
いちにちひとつぶ

おじい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いちにちひとつぶ

【コード】

N3285C

【作者名】

おじい

【あらすじ】

作品テーマは『幸せ』

あなたは、幸せですか？

受験ムードが本格化する高校三年生への進級初日、口数少ない男子、宮下優成は、無駄に騒がしい同じクラスの女子、仙石原未砂記に意味深なピース手芸のセットを渡された。

一本のテグスが、青春の日々とみんなの絆を紡いでゆく。

第十六話〜第十八話の『(浸地編)』表記は事実上番外編で、その話からでも読める仕様となっております。そちらのみでもどうぞご覧ください。

ただいま改訂中のため、表記や人物の呼称等にバラつきがございます。早急な作業完了に努めてまいります。

第一話：ワケも分からず

俺は湘南に住む高校三年生。今日から高校生活最後の一年が始まる。

「ギャーツ！！ キノコ君！！ 久しぶりー！！ 未砂記みさぎだよー！！
同じクラスになるの中学以来だねー！！ またよろしくねー！！」

名乗らなくても知ってるっての。それに、部活同じだし、たまに会うだろ。ま、俺は半ば幽霊部員、彼女は部長でほぼ毎回出席だから久しぶりってのもわかるけどな。

「あら、どうも、仙石原せんごくはらさん、お久しぶりです。ってか、俺の名前は宮下優成みやしたすけなりですけど？」

中学時代からこのムダに騒がしいお方で、当時から部活も同じだが、どうにも苦手だ。

「まあまあ本名とか細かい事は気にしないでっ！！ そっいえば今はキノコ頭じゃないんだね!？」

「当たり前だろ、中学みたいに髪型でからかわれたくないからね」

「ふうん。さて、本題です！！ ここにビーズ手芸のセットがあります。これを使って私が用意したこのテグスがビーズでいっぱいになるまで一日一粒ずつ好きな色、形のビーズを通して何か作って

下さい！！　か・な・ら・ず、一日一粒ね！！」

「はあ？　なんで」

訳がわからん。俺、不器用で面倒くさがりだし、強引にそんなの渡されても困るんだよな。

「ん？　まあ将来の思い出のためと思ってやってみてよ！　ねっ！　あと完成したら見せてね！！」

「はあ、まあいいけど」

仙石原のテンションに押されて断ることも出来ず、とりあえずそれを受け取ってしまった。

「じゃあよろしくねー！　あつ、そうそう、君は今、幸せかい？」

「どうだろね？　どうした急に」

「幸せ、すなわち幸福には大きく分けて二種類あって、一つは衣食住とか、物に恵まれた幸福、もう一つは人とかペットとか、一緒に居て幸せになる、心に恵まれた幸福。どっちも欠けるのは辛いけど、一番避けなきゃいけないのは、幸福に恵まれ過ぎて慢心すること。君はその辺、理解してるよね？」

「ああ、まあ」

ホント、どうしたんだコイツ。そんな事言うキャラだったかな？　しかしなるほど、幸福には大きく分けて二つの形があつて…。

一つは、物質的に恵まれている幸福。もう一つは心情的に恵まれ

た幸福。どちらの欠如も辛辣ではあるが、最も避けるべきは、恵まれ過ぎて慢心すること。何変わらぬ日々を当たり前と思い込んでしまふこと。という事か。

俺には幸福が一つ欠如してるから、こんなにも日々が重たいわけか。まさかこんな奴に気付かされるとは…。

話だけ話して、仙石原は俺の机にビーズのセットを残し、じゃあね！ と元気良く手を振って去っていった。こうして俺はワケも分からずビーズ細工を半ば強引に作らされることになった。

放課後、俺はクラスメイトで鉄道ファン、通称オタちゃんと一緒に帰った。こちらも中学時代からの友人だ。

オタちゃんは俺が聞いたこともなかった路線や電車について楽しそうに語る。中学生の時の職場体験でオタちゃんと二人で駅の仕事を覚せてもらったこともあり、俺も鉄道に少し詳しくなった。最近覚えたのは『アメリカ、ボストン、チャイナ、デンマーク、イングランド』という用語の意味だ。

オタちゃんは鉄道についてしばらく語った後、珍しくそれ以外の話を持ち出した。

「あ、あのさあ、僕、今日、名前忘れたけど、女子からビーズ手芸のセット貰った」

「はっ！？ オタちゃんも!？」

「えっ、宮下君も？」

「うん。ちなみにその女子の名前は仙石原未砂記ね。軽音部の部長。
おなちゅう同中なんだけどなあ」

「え？ そうだったんだ」

俺とオタちゃん、他に誰が手芸セットを貰ったのだろう。クラス全員に配っている様子はなかった。それともこの二人だけだろうか。

夜、家庭という地獄に戻った俺は、仙石原から言われた通りテグスにビーズを一粒だけ通したのだった。

第二話：宮下家の事情

あれから数ヶ月、気が付けばもう夏だ。俺はすっかり毎日ビーズを紡いでいくのが習慣となっていた。

ビーズ細工をいくつか作っているが仙石原に、変わらないなあと言われるばかり。俺の不器用具合に呆れているのだろうか。そもそも半ば無理矢理作っている物で、あまり力を入れて作っているわけはなかった。

今日から三連休で学校が休み。台風が近付いているとのことで、外出は避けた。心身共に不健康な一日だ。

リビングでは父親とは思いたくない男、正人まひとしが一人でテレビを見ていた。

宮下家の家族構成は祖父、祖母、母、俺（優成）、妹の瑞穂みずほ、ネコという名前の猫、そして家族とも父親とも認めていない正人だ。ネコという名前の猫とは、いくら拾ってきた猫とはいえ随分ぞんざいな扱いだ。もっとも名前を付けたのは俺だが…

この家庭では正人がいる所には肉親の祖父と祖母以外は近寄らない。近付いてきても避けるのだ。その理由は後々少しずつ明らかになっていくだろう。

その日の夕方、外は強い雨が降っていた。今回接近している台風はかなり強いということで、仕事を終えて濡れて帰ってきた母は、濡れたついでに庭にある祖父が大事に育てている植物を家の中に避難

させていた。

翌日、思っている程この辺りに台風の影響はなかった。正人は外出していて家庭には、つかの間の平和が訪れていた。夕方になると、母と俺は昨日屋内に避難させていた植物たちを庭に戻そうとしていた。

母は特に家の二階程まで届く、背の高い向日葵ひまわりの扱いには注意するように俺に注意喚起していた。

母と共に植物を戻そうとした時、正人が帰ってきてしまった。

「俺もやる」

正人が母に言った。

「何もしなくていいから帰って来ないで!!」

母が言うと正人は、何だよそれ訳分かんないよと言って、意地を張り、一番大きい向日葵を持ち上げ外に出そうとした。

その時、恐れていた事態が起きてしまった。持ち上げられた向日葵の頭が天井に押し付けられ折れてしまったのだ。

後にそれを知った祖父は、折角大事に育てたのに、向日葵だって生きてるんだ!! と、悔しさより悲しさで心がいっぱいになっていた。

割と冷めた性格の俺にも、その気持ちは大いに伝わってきたし。

確かに植物は生きている。だからこそ向日葵は太陽に向かって朝は東に、夕方は西に頭を向けるのだ。

そんな様子を観察していると、小さな愛情すら芽生えてくる。冷めた人間にだって情くらいはあるのだ。少なくとも俺には。

その夜、オタちゃんから明日電車でどこかに出掛けようと誘われた。交通費はオタちゃんが出してくれるということで、折角なので誘いに乗った。俺はその電話を済ませ、いつも通りビーズをテグスに一粒だけ通し、少し漫画を読んで眠った。

第二話・宮下家の事情（後書き）

今回は優成とその家族にスポットを当ててみました。今後は他のキャラクターにもスポットを当て、話が深くなっていきますので、是非ご覧下さいm（ー）m

第三話・小さな幸せ（前書き）

第三話：小さな幸せ

連休最終日、俺は予定通り、オタちゃんと電車に乗って出掛けることにした。

駅で待ち合わせをして、先ずはいつもの電車からスタート。

この地方は割と観光資源に恵まれていて、普段から遠出することは少ない。そのためかどうかは分からないが、その日の俺は少し緊張していた。

オタちゃんは今乗っているいつもの電車について語り出した。

「この電車は東海道線用の通称“にいさんいち”。東北線にもこのタイプは走っているけど座席の配置とかが違うんだ。東北線タイプは湘南新宿ラインとして横須賀線の逗子まで乗り入れてるんだ。東海道線タイプは群馬の前橋まで行くよ」

俺からしてみれば東海道線も東北線からの逗子行きも一緒だ。でも、次に見たら気をつけて見てみよう。

そうこうしている間に景色は変わっていく。さつき喋り始めた時はビルが立ち並ぶ渋谷辺りにいたのに、いつの間には埼玉か群馬の田園風景に。普段落ち着かない生活を送る俺にとって、このただ広がる田園風景には何かホッとするものがあつた。

「電車って凄いでしょ？ いつも乗り慣れている車種でも、長く乗っていれば、いや、いつも降りる駅より一つ先まで乗るだけでも、いつもとは大分違う風景を見せてくれるんだ」

そんなオタちゃんの言葉に、俺はただ納得するしかなかった。

しかしこの後、この旅行計画は地震による列車運転取りやめで中止になった。

俺たち二人が辿り着いた土地でもやや大きく揺れたので、万一に備え急遽引き返した。

以前、夕方に東京で震度5弱を観測した時、カノジヨとのデートで新宿に居た俺は、電車の大幅な遅れで日付が変わる頃まで家に帰れなかった事があった。

殺気立った人々、振替輸送で混んだ地下鉄、家に帰れないのではという不安、あれには懲り懲りだ。

関東で大地震が起きたら地元はどうなるのか。そんなことを帰りの電車で話していた。

江ノ島の近くまで戻ったら、なにやら浜辺でコンサートをしていた。

アーティストの歌に聞き浸りながら、何だか不思議な気分を味わっていた。今日は俺にとって、イベントフルな一日となった。

たまにはこんな穏やかで楽しい思いをしても悪くないかな。素直にそう思った。地震を除けば。

その夜もまた、ビーズをひとつ、テグスに通して就寝した。

第四話：ある春の日

僕の名前は小田博文^{おだひろふみ}。通称“オタちゃん”。部活は鉄道研究部。小さな頃に踏切まで電車をよく見に行くようになってから現在に至るまで、鉄道にハマッっている。これを世間では“オタク”と呼ぶのだろうか。

僕は宮下君同様、クラスメイトの仙石原さんから言われてビーズ細工を作るようになった。高校生といえば、恋愛に情熱を燃やす人が多いと思う。

しかし僕はなかなか異性に興味を持つことができない。宮下君にも不思議がられるけど、ホントに興味がない。

話は今春に遡る。

「あれ？キミ、オタちゃんって呼ばれてる人だよな？」

「う、うん、そうだけど…」

「私、大甕^{おおみかひたち}浸地。未砂記たちと部活でバントやってるんだあ。なんか男の子みたいな名前だけど、よろしくね！」

「お、オオミカヒタチ！？」

「そう。お父さんが電車好きで、大甕^{おおみかひたち}ってゆう駅をひたちって特急が通るからこんな名前にね。子供に一生付き纏う名前だったのでにそんな軽率に決めちゃって。」

「ハハハ、ま、まあ…」

「でさでさあ、オタちゃんも未砂記からビーズセット買ったの？」

「あ、うん。」

「実は私も前に買って作ってたことあるんだよ！」

「え、じゃあこのビーズの意味知ってるの？」

「うん！まあね！」

「ど、どどういう意味があるの！？」

「うう〜ん、それはいずれ未砂記から聞かされると思うよ！それまで頑張って作り続けるんだよ！絶対サボっちゃダメだよ！」

「あ、はい。」

それにしても何なのだろうか。このビーズの意味って…

しかし、僕にはそんな事を気にしている余裕などなかった。

第五話：闇討ち

僕は鉄道オタク。周囲から偏見の眼差しで見られるのが現代日本の現状。ただ趣味が鉄道というだけで。

「オタちゃんっていい奴なんだけどオタクだからな」

「そうそう。オタクじゃなければ別にな。」

「え、いくら性格良くてもオタクは論外なんですけど。」

「やっぱりオタクだからキモいんだけど」

そんな声が周囲からひっそりと聞こえてくる。

さつき知り合った大甕さんもそういう事を言う人の一員となるのか。そんな事が気になっていた。

これはもしかしたらイジメの一部なのかもしれない。しかし、外的暴力を受けるわけでもなく、自分が直接悪口を言われることも今までない。従って学校やクラスで特に問題視されることもない、最もタチの悪いイジメなのかもしれない。

そんな僕にこれまで味方してくれていたのは、部活のメンバーたちや、宮下君、そして仙石原さんだった。仙石原さんと宮下君は中学の時、同じクラスになったことがあった。

特に僕にとって最初の仙石原さんの印象は

「無駄に騒がしく、真っ先に僕をいじめてきそうな存在」だったけ

れど、後者は余計だったようだ。

いま僕がなんとかこの世に留まっていられるのも、この二人や部活のメンバーのお陰と言って良い。

しかしやはり、こつこつ毎日陰口を言われていると、流石に辛いものがある。

イジメが起きると必ず聞くワード、

「いじめられる方にも原因がある。」

確かにそうかもしれないと僕は思い、鉄道の話題になるとついベラベラと語ってしまう癖や、何か避けられる要員になりそうなものを直してきた。

しかしイメージは定着してなかなか離れぬもので、陰口は絶えなかった。

そんな日々がいつまで続くのか、もしかしたら一生続くのかもしれない。ならやはり、早めにこの生涯を閉じた方が良いのでは？そんな疑問が頭を駆け巡っていた。

ある日、僕が部活を終えて一人きりの教室でそんな事を考えていると、軽音楽部の活動を終えて仙石原さんが教室に入ってきた。

「あつ、オタちゃん！！お疲れ様あ〜！！どしたの？複雑な顔して。」

「ああ、ちよつと考え事してた。」

「そっか。私で良かったら何でも相談してね！そういえば最近、イ

ジメとかで自殺する人多いよねえ。」

「あ、うん、そだね。」

仙石原さんは今の僕にとって、最も辛い話題を投げ掛けてきた。

第五話：闇討ち（後書き）

これは現代の高校でよくあるイジメのパターンではないでしょうか。少なくとも自分が最近みてきたイジメはこんな感じですよ。

自分は気持ちを少しでもラクに出来るようにその人にアドバイスをしたりすることがありますが、いじめられている人はどれだけ辛いのでしょうか。自分は体験したことがない。若しくは気付いていないので何とも言えないのですが、計り知れないものがあることですよ。

第六話：解毒

一人きりの教室でイジメの事を考えている時、軽音楽部の活動を終えて仙石原さんが教室に入ってきた。

「あつ、オタちゃん！お疲れ様あ〜！どしたの？複雑な顔して」

「ああ、ちよつと考え事してた。」

「そっか。私で良かったら何でも相談してね！そういえば最近、イジメとかで自殺する人多いよねえ。」

「あ、うん、そうだね。」

彼女は今の僕にとって最も辛い話題を投げ掛けてきた。

「私さあ、いつつも思っただけど、イジメられる原因って何だと思っ？」

「ん〜、それは、その人が他と違うから、かなあ。」

「あ〜あ、そうかもね。普通と違うだけで攻撃してくる人って多いよね。」

「う、うん。」

「つまらない人たちだよねえ。そうやって狭い視界でしか物事見れない人たちって。私はむしろ普通の人なんかつままないと思うから、

個性的で変わってる人の方が好きだな。」

「で、でもやっぱりキモいんじゃない？」

「ん？何が？」

「オタクとか、挙動とか色々……」

「んと、確かに違和感はあるけど私はキモいとか思わないよ。それに、そういう人たちも居ないと世の中つまんないよ。それに、オタちゃん居なくなったら悲しむ人だっているよ。」

「誰が？」

「ほら、ここにいるよ。あと宮下もね。」

今までそんな事を言ってきた人は初めてだった。頭の中の鉛が少し取れた気がした。

「え、そ、そうかなあ……」

「そうだよ。だから自殺とかしちやダメだよ。絶対に。」

「えっ……？」

僕が自殺の事を考えていることなど何故知っている？それとも自殺は定番だから？

「私、泣いちゃうよ？女の子泣かすなんて最低だからね？オタちゃんが生まれ変わってもまた同じ人生になるように呪いかけちゃうから！」

「や、やめるよ〜」

「ほらやっぱりそんな事考えてたんだあ。」

「あつ…」

「私に隠し事したって無駄だよ？とにかく自殺はダメ！いいね？」

僕は多分、全てを見透かされていた。一見無駄に騒がしくて子供っぽい彼女は、本当は何か凄い人なのかもしれない。少し話しただけに、自殺するのが馬鹿らしく思えてきた。

「でもね、イジメは自分から立ち向かわない限り終わらない。私たちも協力するけど、最後は自分だからね。了解？」

「うん、了解。今日はありがとう。」

「いっていいってえ！！ パシフィックガーデン一室でいいよ！」

「は、はあー！？最低だこの女！だから女って奴は…」

「冗談だよ！グレートバリアリーフの島ひとつでいいから！」

「そつ、そつちの方が高いだろが！」

「えっ？そつ？まあ人生お金じゃないって！」

「いやそれアナタに言いたいよ。」

「フフッ、真に受けてるよコイツ…」

「何か言った？」

「うっん、なんでもない！じゃあ島よろしくね！」

「いや、だからそれは！」

こうして僕は一日の終わりを楽しく過ごせた。

しかしまだイジメに立ち向かわなければならぬのだ。

僕は帰ってから例のビーズを一つだけテグスに通すのだった。

パシフィックガーデン

海が目の前にある高級マンション。サザンオールスターズの楽曲に登場するパシフィックホテルの跡地。

第六話：解毒（後書き）

今回の登場人物にモデルはいませんが、どんな形であれイジメは絶えません。陰口だって立派なイジメです。

イジメられている人で、身近に相談できる相手がいなければ、何か参考になりそうな本を読んだり、テレビ番組をみてもいいかもしれません。

自殺は出来るならやめましょう。生まれ変わってから同じ人生を繰り返すことになりそうですよ？リアルに…

第七話：他愛ない土曜日

一学期が終わり、今日から高校生活最後の夏休みが始まる。受験生にとつての夏休みは勉強する時間と遊ぶ時間を分け、計画的に過ごさなければならぬ日々だ。

特に就職希望の学生にとってはSPI対策や履歴書の作成など色々忙しい。俺もその中の一人だ。俺は自分の部屋で学校の宿題を片付けつつ、就職に向けた勉強や履歴書を作成していた。

しかし家でこういった作業をするのはこの家庭では至難の業。だからといって図書館も満席。困ったものだ。

俺は気分転換にテレビでも見ようと思いきや廊下に出た。廊下は大雨で浸水した家のようになっていて、腐敗臭と風呂の湿気、カビの臭いがした。俺からすればこんなのは十年以上前から日常となっていた。何故ならこの原因は父とは思いたくない正人の仕業なのだ。

水浸しは洗面台の水を出しっぱなしにしているせい。腐敗臭は異常な程の加齢臭。湿気は風呂から出た後に換気扇を回さないからだ。これら全てがアイツの仕業。だらし無い性格なのだ。

今日は土曜日。しかし正人は爪痕だけを残し会社に出勤していた。過去に数回リストラされているので、再びリストラされるのも時間の問題ではなからうか。今のうち外に出て行っておいでくれ。

家に居てもやはり気分は紛れないので自転車で鎌倉へ行って気分転換。鎌倉には何故か俺を引き付けるものがある。

鎌倉から帰り俺は正人が帰るまでの時間を宿題を少ししたり音楽を聴いたりして有意義に過ごした。俺はオタちゃんからすればもしかしたら幸せ者だろうか。

しかし、少し穏やかな日々はそう長く続かなかった。オタちゃんと比べる余裕がある俺に、後に起こることなど想像すらしなかった。いや、したくなかった。今までの経験から何か起こる気はしていたが…

第七話：他愛ない土曜日（後書き）

今回の話は主人公、宮下優成の日常の話でした。

今後、もしくはは過去に主人公たちは苦い経験をします。しかし趣味や気分転換、仲間との交流により支えられ今も何とかやっています。そんな話です。今更ながらストーリー紹介でしたm（――）m

少しでも幸せな時間がないと人間潰れます（ノ―・。）

第八話：アルバイトに費やす青春のある日

日曜日、今日はファミレスでバイトだ。

俺はバイト長をしていて、バイト希望者の採用面接をしたりシフト表を作成している。時給は他のバイト生と変わらない。

「あ、店長、おはようございます。」

「あいおはようございます。今日はバイト希望の女の子が来てるから面接してあげてね。」

「あはあ〜い。」

女の子かあ… ちゃんと仕事する人で、すぐに辞めなきゃいいけど… というのも、何故かここでバイトする女子は喋ってばかりでろくに仕事もせず、すぐに辞めていく人が多いのだ。そんな事を考えつつ、その女の子が待つロッカールームに入る。

「お待たせしました…。」

「あー！！宮下だあ！！！」

「はい、君、不採用。」

よりによって面接を受けに来たのは無駄に騒がしい仙石原だった。

「はあ！？まだなんにもしてないじゃん！！！」

「いやだつてお前いつもうるさいし喋って仕事サボりそうじゃん」

「公私のケジメはちゃんとつけるんですっ」

「じゃあここで働きたい理由は？」

「んとねえ、車の免許取るお金が欲しいから！」

「しばくぞ」

「ええ！？なんでえ！？立派な動機じゃん！！ってか女の子に暴力はダメだよ！？」

「免許の資金なら他でも稼げるっての」

「じゃあ今から考える」

「いやもういいから帰れ。ってか普通、動機も考えないで面接来る奴いないから」

すると仙石原は少し早口でベラベラ喋り始めた。

「志望動機なんかいつも即席だよ。履歴書いらないバイトなら。うんとねえ、じゃああ、ファミリーレストランという空間は老若男女問わずあらゆる世代のお客様に親しまれている場所であり、人々の笑顔が絶えない場所だと思います。私は持ち前の性格でお客様を明るく元気にもてなし、料理のみに満足していただくのではなく、心も満足していただける仕事をしたいと思志望致しました！！これですっ」

「これでどうだは余計ね。はいはい、まあ良いでしょう」

「わ〜い、やった〜、愛してるよ!〜!」

「また軽率にそういう事言っ」

「ええ〜酷お〜い。乙女心が傷ついたあ〜」

「はいはい。じゃあ制服余ってるから早速仕事してもらっよ。でもその前に接客の基本から練習ね」

その後、接客の練習やレジの使い方を教えて早速働いてもらうことに。

「そついえば宮下あ?」

「ん?」

「ちゃんと毎日ビーズやってるう?」

「ああ、やってる。ってか何なんだよあれは…」

「ふふうん。そのうち教え上げる」

「そのうちって…」

ピンポーン

お客さんから呼び出した

「じゃあ、最初の一回、やってくる?」

「うん!頑張る!」

俺はレジから仙石原が客の注文を受けているのを遠目で見る。

「お客様お待たせ致しました!」

「おっ!見かけない子だねえ。新入りかい?」

「はい!」

「そうかい。頑張れよ?」

「ありがとうございます!頑張ります!」

「じゃあ注目いいかな?」

思いの外うまくやっているようで安心した。馴れ馴れしい接客でもしたら家ででのストレス発散にぶん殴ってやるうかと思っただが殴る理由がない。

「ああ、宮下もしかして私が馴れ馴れしい接客でもしたら殴ってやるうか考えてたでしょ?」

「あらよくわかりましたね」

「だってえ、中学の時イライラした相手なら男女関係なく殴ってたじゃ〜ん。私がまだ殴られてないのは奇跡だね!」

「ああ、ホントに」

確かに彼女は騒がしくて苦手で厄介だと思うことはあるが、無垢な笑顔を見ると何故か殴る気が失せる。そして何より仙石原のシヨトヘアで無邪気な顔は可愛い。

「じゃあレジやってみる？俺が陰で見てるから」

「うん！じゃあやってみる！」

「はい。頑張って」

「ありがとう！今日は優しいんだね！」

うん、やっぱり笑顔は可愛い。最高の化粧だ。

「俺はいつも優しいよ」

「うわっ！自分でそういう事言うんだあ。マジ引くわ」

「なっ！？」

「でも分かってるよ私！いつも口数少ないけど階段に転がってるカナブン助けてあげてたもんね！」

「うわっ！見てたのかお前！」

普段大人しくしてる俺は、実は動物や虫が大好きだ。何と云うか、癒される。だから健気でチョコチョコしたカナブンを放っておけな

かった。

こうして今日のバイトは無事終了。俺は家に帰りたくないのも苦手な彼女に公園でバイトの事を教えたり雑談をしながら時間を潰す。相手が苦手な人でも正人が居る所に帰るよりマシだ。

「ねえ？私のこと名前で呼んでいいよ！苗字じゃ長いでしょ？オタちゃんにも言っというてね！」

「あ、うん。わかった。」

「じゃあ呼んでみて！」

「えと、末砂記？」

「うわっ！好きな人から名前と呼ばれるとドキッとするなあ！」

「またそうやって公の場で。今まで何回似たような事言ってたよ」

「んとねえ、百回くらい」

「はあ。そんなんじゃホントに好きな人出来た時どうすんの」

「どうするんだろね」

「でも俺も他人の事心配してる場合じゃないか。ってか受験生だし恋愛禁物かな」

「じゃあ私と付き合う？私は専門学校受験だけど、SPIなら少し教えられるよ？」

S P I

主に入社希望者が多い企業で採用される筆記試験問題。 R E C R U
I T が開発。ただし、応募が多い会社でも必ずしもこの試験を実施
するとは限らない。

「えっ！？マジで！？付き合つかどうかはともかく教える！！」

「ダメ。付き合ってくれなきゃ教えないよ？」

「えっ…！？」

その時の仙石原は少し意地らしい面持ちで、その台詞が異様に似合
っていた。

第八話：アルバイトに費やす青春のある日（後書き）

青春っていいですねえ（ ; ）

でも受験わやだ（ ; ; ）

第九話：幸福と不幸

「ダメ。付き合ってくれなきゃ教えないよ。」

「えっ…!?!」

「私、軽い気持ちで愛してるとか好きだとか言ってたんじゃないよ？」

「え、だって、じゃあ今までの…」

「全部ホント。でも私とあなたは性格がまるで逆。うるさくしていっぱい迷惑かけてるのも分かってる。だから今まで軽く見せ掛けて愛してるとか言ってきた。」

これは冗談なんかじゃない。彼女の瞳には少し涙が浮かんでいた。こんなに真剣に、しかもクラスが別になって数年話もしなかった俺の事を想っていてくれていたなど考えもしなかった。むしろ愛してるの言葉が迷惑とすら感じ、必死に愛情表現する彼女をどれだけ傷つけてきただろう。

「悪い。今まで本気でそんなこと百回くらいも言ってたなんて思わなくて…」

「いいよ。こっちもトモダチ関係壊したくなくてワザと軽いノリで言ってきたんだし。でも気付いて欲しかったな。ってか、私なんかが恋人だなんて迷惑だよな。」

「いやっ、そんな…」

「ごめん。なんか気まずいよね。だからせめて今まで通り相手してくれたり遊んでくれない？」

彼女は必死に笑顔を作っていた。

「いや…」

「そっか、そう、だよ、ね…今まで、こんな、私の、相手、してくれて、ありがと、ね。」

彼女の顔はもう涙でグシャグシャになっていた。

「そうじゃなくて、その、お、俺も末砂記と一緒にいたい！」彼女が苦手な筈の俺の口から、無意識にそんな言葉が飛び出した。

「ふへえ？」

そして俺はしゃっくりが止まらない彼女を衝動的に抱き締めた。

「こっ、こんな俺で良かったら…」

彼女は一度泣き止んだ。

「ホントに？」

「ホント。」

そう言うと彼女はまた泣き出した。

「ふへへええーん！！こ、こちらこそバカ、だけどよろしく、ね？
ふえーん！！」

「うん。じゃあ少し休んだら寄り道しながら帰ろうか？」

この人生で愛の告白をされたのは四度目だが、これほど疲れたことはなかった。

「そういえば末砂記って軽音部だよな。」

「うん。そだよ。」

「じゃあリスpektするバンドとかあんの？」

「んと、やっぱサザンかな！地元だし、私の大切な人が好きだったんだ！あっ！男じゃないよ！小さい頃お世話になった人！」

「えっ、じゃあ キノコ公園ライブ聴きに来た？」

キノコ公園

球場がある公園。正式には

「茅ヶ崎公園」だが、地元の子供たちには

「キノコ公園」と呼ばれている。サザンオールスターズはその球場で地元ライブを敢行。

「当たり前じゃん！せっかく地元に住んでるんだよ！まさか来なかったの！？」

「いやいや行ったよ。じゃああの時近くに居たんだね。」

第十話：あなたのためなら（前書き）

作中、カタカナ表記の「ネコ」と漢字表記の「猫」が登場しますが、どちらも同じ個体を指すもので、「ネコ」は固有名詞です。つまり、「ネコ」という名前の猫なのです m () m

第十話：あなたのためなら

俺たちを襲った悲劇、それは正人が毎日家の中を水浸しにしているせいで家の柱が柔らかくなり、羽アリやシロアリが大量発生したのだ。それが視界いっぱいには隙間がないくらいウジャウジャしている。

「あつ、親から電話。もしもし？」

「あつ、もしもし！？ お母さんだけど。家帰った？」

「帰ったけど、何この状況？ だいたい想像つくけど」

「そうなの！ ネコが帰ってこないから心配で！！」

「今どこ？」

「埼玉のおばちゃん家に避難したの！ 瑞穂は友達の家！」

「埼玉って、どんだけ離れてんだよ」

「じゃあ猫見つけたらすぐ電話ちょうだい！」

「ネコ捨てて逃げたくせに」

捨て台詞を吐いて俺は電話を切った。

「優成、なんだって？」

心配そうに訊ねる未砂記。

「親は埼玉の親戚の家に避難して、妹は友達の家で避難したらしい。とりあえず猫探さなきゃ」

「シャツー!!」

ネコが威嚇してる声だ。

「家の中だ!!」

「私も入っていい?」

「えっ、大丈夫? こんな所」

「だって、ネコちゃん何か怯えてるよ!」

「ありがとう。じゃあ頼む!」

「うん!」

俺たちは家の中に入りネコを探す。するとネコの身体いっぱいになり、ありがくつついていた。

「ネコー!!」

俺はすぐにネコに纏ったアリを素手で払おうとするがなかなか離れない。

「優成! 段ボールとかある!」

「ロフト！」

「じゃあ取ってくる！」

「ありがとう！」

未砂記がロフトから段ボールを持ってきて、俺はそれにネコを入れて持ち上げた。ネコに夢中で気付かなかったが暗いリビングでは正人がテレビを見ていた。俺は怒りを堪えられず、正人の胸倉を掴んで持ち上げた。

「おいテメエ自分が何したか分かってんのかよ！！！」

「テメエじゃねえよお父さんだ！！！」

「テメエなんか親じゃねえんだよこのクズ野郎！！！」

「親に向かってクズ野郎だあ？ それにここは俺がローン払ってるんだから俺さえ住めればいいんだよ！！！」

「んだとゴラ！！ いつも思うけどテメエはカネが全てなんだな！！！」

「ハハハ！！ 当たり前めえだろ！！ 笑わせんじゃねえよ。カネさえあれば何でも手に入る。世の中を制するのはカネと権力なんだよ！！ 他の誰が何しようとする主人の俺には逆らえねえんだよ！！ ざまあみる！！ ヒエツヒエツヒエツ、いい気味だ！！！」

「てめえブツ殺してやる！！！」

俺は正人の顔面を殴ろうとした。

「優成！ 今はネコちゃんを動物病院に連れてくのが先！！」

「あつ、そつだ！」

未砂記の一声がなければ俺は人殺しになっていただろう。

「逃げんのかよ」

正人は俺に言い掛けてきたが構っている場合ではない。ネコの身体はアリに酷く噛まれ血だらけになっていた。

動物病院で診察を受けた結果、ネコの命に別状はないようだが、帰る家がないので暫く入院することになった。

「どうしよ、俺、ホームレスだ…」

「私の家に寝泊まりする？ どうせ誰も帰ってこないし」

「誰もって…？」

「ウチね、父親は仕事で単身赴任してて母親はもう何年も帰ってないの。私、一人っ子だから他に残る家族はいないの。ネコちゃんも預かってあげるよ」

「じゃあそつさせてもらつか。申し訳ない」

「いいよ！ 大歓迎だよ！」

未砂記は俺とネコの厄介を快く引き受けてくれた。なんてありがたいのだろう。何か恩返ししなきゃな。

「ありがとう。でも先ずある程度の荷物取りに戻らなきゃ」

家に戻ると正人が俺に再び喧嘩を仕掛けてきた。

「ほう、戻ってきたじゃねえか。いい度胸だ」

俺は無視して未砂記と一緒に俺の部屋がある二階へ。この部屋はまだアリの被害を受けていないようだ。

「ねえ、そういえば優成っておじいちゃんとおばあちゃんも一緒に住んでるんだよね？」

「うん。いつもこの時間は出掛けてるんだけど、もう帰って来てても……」

「じゃあおじいちゃんおばあちゃんも私の所に来る？」

「いや、大丈夫だよ。横須賀よこすかに爺さんの兄弟いるから。もしかしたらもうそこに行ってるかもしれない」

「ああ、その二人なら家に帰るなり腰抜かしそうになったからトドメさしてやったぜえ？」

「テメエ部屋に入ってくんじゃねえよ！！　ってか二人はどうなってるんだよ！！」

「ああ、今頃どつかで気絶してるか死んでるかもな。ヒヤッヒヤッヒヤッ、あゝおもしれ……」

「えっ、ちよつと、優成、ヤバイよ、ってか何なのコイツ、どっかおかしいよ……」

未砂記は顔面蒼白になつて震えていた。

「大丈夫。未砂記には手え出させないから。それにコイツが言ってるのは嘘だ」

「ほう。よく判つたな。うちに帰つた途端血相変えて車で逃げたよ」

「やつぱりな。お前はこの時間一番楽しみなテレビがあるから何があつても一切動かないからな。人殺しなんかしてる場合じゃないんだよ」

「でもお前らにはここで消えてもらうよ？ 完全犯罪の計画はちやんとあるんだ」

その時だつた。あまりに突然で予想外の出来事だつた。

「キヤツ!?! いやっ!?!」

あろうことが正人は未砂記を人質にとつたのだ。法の壁を上手く利用して悪事を働いてきたコイツがこんな法外な事をするなんて思いもしなかつたのだ。

「おいテメエ未砂記に手え出んじゃねえ!! 殺すなら俺だけにしろ!?!」

「ダメだよ!! 私死ぬ!! だって優成にはいつぱい迷惑かけ

て、それでも恋人になつてくれる、命より大切な人なんだから！！
だから今度は私が恩返ししなきゃ！！」

その言葉を聞いた時、俺の目から涙がこぼれた。

「えっ、俺、迷惑なんて、そんな…」

そして未砂記がその言葉を放った直後だった。

プスッ。

「痛っ！！ 早く、早く逃げて！！」

俺は一瞬目と耳を疑った。何かが刺さった未砂記の腹部から真っ赤な血が滲み出てきていた。

「ハア、ハア、優成… 逃げなきゃ、私がやられた、意味、ない、よ…」

「みつ… みさ… なんで…？」

なんで、なんで未砂記がこんな…。

「でも、もし死んじゃったら、早く、私の事… 忘れて… ね？」

状況とは裏腹に、天使のような笑みで俺を見つめる未砂記。しかし息が荒く声がかすれている。今まで冷たく接してきた俺なんかの為に命を落とす気なのか？ 冗談じゃねえ、俺の勝手な事情のために未砂記が死ぬなんて、ぜってえさせるか！！

「みつ、みさつ、未砂記を… て、てめつ、テメエ！！ クソ野郎！！ ざけんじゃねええええ！！」

第十一話：お願い これだけ

俺の心は怒りと大切な人を失うかもしれない焦り、そして実は孤独だと思っていた俺を自分の命より大切だと思ってくれる彼女の愛で混乱していた。しかし一度叫んで深呼吸をすると、周囲のエネルギーが俺の体内に集まってきている気がしてきた。

「お？怖じけづいたか？そりゃそうだよなあ？でも良かったなあ？偉大なるお父様に葬ってもらえるんだからなあ？あ？」

「はあ？怖じけづく？なあ、お前、女人質にとって身体密着してるからもしかして興奮してる？」

「ふっ、お前のカノジョなのに俺が抱く事になるとはな。まあお前らもあつちの世界で抱き合うんだな。」

その時の俺は一番大切な人を人質にとられているにも関わらず、驚くほど冷静だった。

「末砂記、悪い。」

「うん…いいよ…今まで…ありがとう…」

「いや、そうじゃない。それもあるけど。」

「へっ…？」

その瞬間俺は腹部が真っ赤に染まった末砂記を乱暴に正人から引き離した。

「ボコッ!」

「うおっ!」

未砂記を引き離す時間を含め僅か数秒の出来事だ。俺は正人の下半身の急所を一発殴った。

「うおっ、ぐおっ、ぐあー!」

「そうだよな? 欲求不満の中年がいくら高校生とはいえ女と密着したらアソコが大きくなっちゃうよな? 今にみてる。腫れ上がってくるから。」

「くそっ!! ぐあっ…ううう…」

俺がもし正人だとして、自分がこの状態で何処をやられたら再起不能になるか考えると、下劣ながらその答えにたどり着いた。

そんなことを言っている場合ではない

「もしもし!! 救急車を!! 早く!! お願いします!! 早く!!」

俺は正人が動けなくなったのを確認して未砂記をおぶりアリを蹴散らしながら家の門まで出た。彼女の腹部には刺さっているのは糸鋸のようだが、抜いてしまうと余計に出血が酷くなるので痛々しいが抜かなかった。

「ごめん…服…血で…汚れちゃったね…」

彼女は自分の命が危険だというのにそんな事まで気にしていた。どこまで良い奴なんだよ…本来なら俺の家庭の問題なのに、偶然そのに居合わせたためにこんな事に巻き込まれて腹を刺されても文句どころか俺の身代わりになれて良かったなんて…

「そんなこと気にしなくていいから！！なんでだよ！！なんで未砂記が俺なんかのために！！」

「愛…してる…からっ…それだけ…ごめん…もう…目を…開けてるの…つらい…」

「やめろ！！もう喋るな…頼むから…くそーっ！！なんで！！なんでええ…うああああん！！ああああああ！！」

「男が泣くな…クールなキミが…台なしだよ…」

「だって！！だってええええ！！」

「ねえ…キス…して…そうじゃないと…未練…残っちゃう…」

「するもんか！！したらお前…未砂記…」

「うん…だから…後悔…したく…ないの…早く…お願い…」

囁くような声で呼吸すらままならなかった。俺はそつと彼女の唇に自分の唇を接触させた。すると彼女は小さな舌を精一杯俺の舌に絡めてきた。俺もその言葉なきメツセージに必死に答えた。

「ちゃんと…ビーズ…やるん…だよ…？了解？」

「バカか！！末砂記がいなくなったら新しいビーズ貰えなくなるだろが！！それにまだビーズの意味だって聞いてねえよ！！」

「そのうち…わか…」

「お待たせしました！！」

「あつ、早くお願いします！！」

救急車に乗りようやく病院にたどり着いた。

「末砂記は助かるんですか！？」

「いや、幸い内臓にまで鋸は届いてないんだけど、出血が酷くて…」

「そんな！！彼女は関係ないんです！！本来なら俺が！！」

「事情は警察から聞いています。しかし…」

その後、俺は不安を抱えたまま警察の取り調べを受けることになった。

第十一話：お願い　これだけ（後書き）

男わアソコやられるとかなりキツイ　；
つてか撃沈です（-”-；）

そのへんの中年オヤジってホントに欲求不満なのかなあ（？|？）

そうじゃない人もいます…

下品な話ですみませんm（|）m

第十二話：心の天気雨

俺は気が付くと警察署の取調室に居た。別に病院からここに来るまで気絶していたわけではないが、未砂記の心配と巻き込んだ罪悪感で頭がいつぱいだった。

「あの時俺が告白を断って突き返しておけば…もっと冷たくして嫌われてれば…俺も人殺しか…いや…死んでなんかない…あんなに騒がしくて元気な奴が…死ぬ筈…」

口に出して言っていたか、それとも心の中ではやいていたのかすら覚えていない。取調室でも何を質問されたのか覚えていない。覚えているのはカツ丼ではなく袋入りの煎餅と温かい緑茶を差し入れされたことと、正人の急所が腫れ上がっているため病院で手術してから警察へ身柄引き渡しになるということくらいだった。

「今日はここに泊まっていけば？」

警察官の勧めで、特に寝泊まりする所のない俺は質素で重い空気の漂う警察署で一泊することにした。

寝室は個室になっていて誰も入ってくることはない。俺はこの孤独な空間でただじっとしていると、ある事を思い出した。

「あ、今日ビーズ出来ない。一日一粒ずつって言ってたけど…」

「宮下君、病院から電話だよ。」

「あ、はい…」

さっきの警察官が扉の向こうから俺を呼んだ。病院からの連絡、末砂記はどうなるのだろうか。そればかり考えていた俺はすぐに部屋を飛び出し、電話機まで案内してもらった。

「もしもし……」

「宮下君だね。」

「はい。あの……」

「末砂記さん、凄いですね。普通あんなに出血してたら……」

「た、助かったんですか!？」

「ええ、良かったですね。」

「はい!!ありがとうございます!!」

体中の力が一気に抜けた。明日になったら末砂記に謝りに行かなければ。いや、末砂記は自分をこんな事に巻き込んだ俺を本当に許してくれているのだろうか。複雑な気分だ。バイトで始まった長い一日がようやく終わった。

第十二話：心の天気雨（後書き）

今回わ小説らしく台詞少なめです（-”- ; ;）

ええ、今までわ台詞だらけでしたので（ノ・。・）

今回も台詞多めなのかな（、・ ; ;）

本編以外わいつも日本語の使い方おかしいですねm（|・ ; ;）m

もしかして本編も…？

第十三話：愛情と友情

翌朝、俺は早速末砂記が入院する病院へ行った。部屋は個室だ。

「あの…」

「あ、やっときた。来るの遅いよお」

「ごめん、本当に。俺、末砂記と会う資格、あるのかな」

「当たり前じゃん！ だって私たち恋人だよ!？」

末砂記は思いの外元気そうで安心した。それとも繕っているのだろうか。そして俺を歓迎してくれた。俺の心中で感謝と謝罪の気持ちが錯綜していた。その時一瞬で決意が固まった。

これからは俺が彼女のために全力で尽くそうと。彼女がそうしてくれたように、この身を捨てる覚悟で。

「私、嬉しかったよ？ 私のために泣き叫んでくれたり意地もプライドも全部捨ててくれたんだよね？」

「うん、もうそんなのどうでも良かった。傷、痛まないの？」

「まだ痛いけど、そんな事よりまたこうやって優成と話せる嬉しさの方が大きいよ」

俺は静かに涙をこぼした。そしてしゃがみ込み顔を沈めた。そんな俺の頭を彼女は優しく撫でてくれた。

「よしよし、本当に一番辛いのはキミだもんね。心にいっぱい怪我してるもんね。でも大丈夫だよ。他の友達に本音でぶつかるとかできなくても、私だけには遠慮なくぶつかって良いんだからね？ これからは何も不安は要らないよ？」

全てを包み込むようなその優しさが涙に更に拍車をかけ、子供のように泣き崩れた。同時に俺は彼女になら何も包み隠す必要などないという今まで誰にも自分の本当の姿を見せられなかった俺にはこれ以上ない安心感を得た。

「ごめん！！ 今までずっと押し退けてきて！！ 迷惑だなんて言うてきて！！」

「迷惑かけてきたのは本当だからしょうがないよ。ごめんね。こんな私で、本当に良いかな」

「何言ってるんだよ！！ それは俺の台詞だろ！！ 末砂記の優しさにはずっと前から気付いていたのに！！ だからこれからもいっぱい迷惑かけていいから！！」

「ありがとう。私も知ってたよ？ キミはホントは優しい人だって。だから命を捨てても良いくらい好きになれた」

「なんか、そういう事言われると恥ずかしいかも」

すると末砂記は、にんやりとして俺の顔を覗き込んできた。

「わく照れたあ」

「う、うるせえ」

「泣き止んだね。良かった」

それから暫く他愛のない話で盛り上がり時は昨日とは違い、あつと言つ間に過ぎていった。時計を見ると病院に来てからもう数時間余り過ぎていた。

「ねえ優成？ 末砂記、愛してるって言って抱きしめてみて？」

「どこで？ いま？」

「うん。ここでいま」

暫く躊躇したが、このくらいの要求に応えられないなんて情けないし、末砂記を愛してるのは本当だ。俺は思い切って末砂記に抱き着いた。

「末砂記！ 愛してるー！」

「優成……」

耳元で囁いた。

「ん？」

「後ろ」

「後ろ？」

「うん、振り返ってみて」

その時、俺の中で時間が止まった。そして、今まで味わったことのない痺れが身体全体に走った。

「へ…？ ふああああああ！？」

「よっ！ 普段の態度からは想像もつかないくらい大胆だねえ！」

「あ、こんにちは、二人とも。お土産持ってきたよ」

後ろを振り返ると友人の浸地ひたちとオタちゃんがいた。俺の額からは、今までにない大量の冷や汗が流れてきた。

「お、お、おおお前ら、いいつ、いつから居た！？」

「宮下が正に末砂記に抱き着く瞬間だよ。いいなあ、私も彼氏欲しいなあ」

「ごめんねひたち」

「ってか何で末砂記が入院してんの知ってるんだよ！？ マスコミの取材も来てないみたいだし」

「ああ、それは学校からの連絡だよ。仙石原さんが入院したって、あけぼの（寝台特急）乗ってる時に朝川あさかわ先生が電話してきた」

「でもどこの病院か迄は特定出来ないだろ！？」

「それは朝、末砂記からこの病院に居るの聞き出したから分かった

んだよ」

「あ、そうだったんですか…」

「今日は良いもん見れたなあ。私も新しい恋しなきゃ！」

「ひたつちガンバ!!」

「サンキュー末砂記！ 心の友よっ!!」

正人が捕まった事より末砂記に抱き着いている所を見られた方が恥ずかしいのかもしれない。俺がこの日、過去最高の大恥をかいたのは言う間でもない。そしてその噂は、浸地を介して担任の朝川夕子あさかわゆうこを含め、あつという間にクラス全体に広まったという。

その夜、俺はオタちゃんの家で浸地も一緒に泊まることになった。

「あつ、宮下、ケータイ鳴ってるよ!!」

ケータイの画面を確認すると、どうやら電話は担任からのようだ。

「もしもし、夕子ちゃん？」

「おう、色々大変だねえ。何かあったら相談してね？」

「ありがとう」

「でさ、末砂記ちゃんに抱き着いたの見られたんだって!?!」

「えっ!？」

この後、結構な人数が俺に電話をかけてきたが、正人の事は問わず、末砂記に抱き着いた事だけを問い掛けてきた。これはみんなの優しさなのか、それとも興味本位なのか。違う意味で疲れた一日だった。

それと、後で聞いた話だが、俺や末砂記の家、学校にも取材陣が押し寄せなかったのは、学校長、会長と、末砂記、浸地、オタちゃんそれぞれの父が各メディアに圧力をかけたらしい。

この日は一旦家に戻ってビーズを通したのだが、よく見ると、何故か昨日の分のビーズも通されていた。誰がやったのだろうか。俺の背後に何かの気配がしていたが、それはまた別の話。

第十四話：小田夔線仙石原經由ふたりの幸せ行き

今日はオタちゃんの家でお泊り会。メンバーはオタちゃん、ひたち浸地、俺の三人だ。

トランプに飽きて、面白いテレビ番組もなく、あまりにも暇なため、オタちゃんの提案で駅名しりとりなるものをやることに。

圧倒的にオタちゃんが有利なので、浸地、俺、オタちゃんの順番でやることにした。浸地の父は電車の運転士、オタちゃんは鉄道マニア。俺は圧倒的に不利だ。そこで、オタちゃんには地元以外の駅名を一回につき二つ挙げてもらうことにした。このゲームで負けると丑三つ時に一人で酒を買いに行かされることになるのだ。ただし、三人共未成年だ。飲酒は二十歳になってから。

「では、ここに大夔さんが居ることだし、常磐線の大夔おおみか駅から始めよう」

「はい。じゃあ次は私ね！ か… かものみや鴨宮！ アクティー止ま
ないよっ！」

「止まんないのかよっ！ うーんと、や… やまて山手」

「じょうばんせん てんのうだい常磐線の天王台、ばんえつさいせん いなわしろ磐越西線の猪苗代」

「猪苗代は知ってるけど天王台って何処！？」

俺と浸地は知らない駅名で、見事にハモった。

「だから常磐線の駅だよ！」

ちなみに鴨宮は新幹線発祥の地で、浸地が住む小田原市内おだわらの駅。山手は横浜市内でリッチマンが多い。

「うーんと、じゃあ、芦花公園ろかこうえん」

「何処だそれ？ ってか語尾が『ん』だから終わりだな」

「てへっ、負けちった。でも何処だっけ？ 芦花公園」

「うーんと、確信ないけど京王線けいおうせんかな。僕もまだまだだね。プロになるためには今のうちに色んな駅とか路線を覚えておかなきゃ」

結局負けたのは浸地。コンビニまでは徒歩二分程度。しかし丑三つ時にはたったそれだけの距離でもドキドキものだ。

「ねえ、こんな時間に私一人で行かせるの？ 私、カワイイから何されるかわかんないよ」

確かにカワイイ、というよりは美人で、俺の初恋の相手。長く艶やかな黒髪、二重まぶたに凜としながらも華奢な体格。おもいつきり大和撫子だ。

「んーじゃあ僕も行ってあげるよ」

「ありがとオタちゃん！ オタちゃんが居れば心強いね！」

「人の安全を守るのも鉄道員として重要な事だから」

「え、じゃあ俺も、一人だけ行かないのもなんだかなあ」

「いいの！ オタちゃんと二人でデートするの！」

「はあ。まあ行くの面倒だしそこまで言うなら…」

そんなこんなで二人の小さなデートが始まった。

私とオタちゃんはコンビニに向かって歩きだした。実はこのしりとり、最初から私が負けるつもりで、オタちゃんが付き添いになる予定だったんです。私とオタちゃんが出掛けている間に未砂記からすう君に電話をかけさせて愛のトークを楽しんでもらうって作戦。未砂記が使っている部屋には電波の影響を受ける医療機器がないのでケータイ使っても問題ナッシング！

「うまくいったね！」

「うん」

「ところで、オタちゃんは好きな人居るの？」

「ううん。というよりまだ恋したことない」

「え、うそっ!?!」

「ホントだよ。でもムツツリ扱いされることはあるんだ。ホントに興味ないのに」

幼い頃に初恋を経験した浸地にとって、オタちゃん、もとい博文の恋愛感情未経験は不思議だった。

「ん〜、何でだろ。もしかしてオタちゃんって、人間不信？」

鉄道関係のネタで博文とは少し親しいと浸地は、深層心理にズバツと突っ込んだ。

「ああ、それはあるかも」

「そつか。でも、私とか、すう君、未砂記、たぶん石神井さんも、信じていいと思う。人を信じられるようになれば、きっといつか、素敵な恋、出来るよ」

「そうかなあ…」

「うん、メイビー！」

「メイビーかあ」

実は男子から人気の浸地と、恋愛に興味ないチエリーボーイの青春トーク。あまり澄み渡っていない茅ヶ崎の星空の下にて。

「あつ、未砂記に電話しなきゃ！」

言って浸地は未砂記に電話をかけて、優成とラブリートークをするよう伝えたのだった。

「もしもし優成？」

「未砂記？ どうしたの？ こんな時間に」

「いまオタちゃんの部屋で一人だよね？」

「えっ、何で知ってんの？」

「私は何でもお見通しだよ！」

「ああ、そうですか」

俺は直感した。あの二人は最初からこうするつもりで、浸地はわざとしりとりに入れてオタちゃんがそれに付き添う事になっていたのだと。

「恋人からの電話なのになんかテンション低いよ？」

「俺はいつもこんな感じですよ。そういえば傷どう？」

「まだ痛いけど外見は何でもないよ。現代医療は凄いね。手術の跡も残さないんだから」

「えっマジで！？」

「マジで。エッチする時見せたげる」

「そうやって破廉恥な事を平気で言う。でも未砂記らしいか」

少し安心した。未砂記のいつものペースが戻ってきたようだ。それとエッチするの前提なのだろうか。不覚にも少し妄想してしまっただではないか。俺も男だなと思った。

「酷い！ 私の事そんな風に思ってたの!？」

「えっ、いや…」

どうやら彼女を怒らせてしまったようだ。ってかまだ傷が痛むとか言っとしてよくそんなに大きな声を発するものだ。俺だったら極力傷に響かないようにするが…。

「バカカ!! テメエとなんか一生エッチするかボケ!! 子供作る時だつて人工受精だから!! 一生童貞だね!!」

「いや俺童貞じゃ…」

「えっ、うそ、違うの!？」

「うわっ!!! しまったっ!!!」

衝動でうっかり余計な事を言ってしまった。しかもよりによって恋人に。気まずい。それにしても酷い言われ様だ。女子にボケなんて言われたのは初めてだ。しかも恋人になんて以っての外。あと俺と結婚する気なのね。あんな事になってしまった手前、俺も覚悟はある。それになにより、俺は無垢な笑顔を振り撒く未砂記が好きだ。

「初めての相手は聞かないでおくよ」

「はい」

「よし！ いい子だ！ あと、さっきの冗談だから気にしないでねっ！！」

「さっきの？」

「バカ力。でも大好きだよ。いっぱい幸せにしたげるからね？ 幸薄さん？」

「サンキョ」

こうやって電話で話すだけでも、例えボケと言われても幸せを感じられる。未砂記の暴言が心の底からの言葉でない事くらい今までの経験から分かる。当然だが発せられる言葉の全てが真実とは限らない。もしかしたら彼女は幸せを運ぶ天使なのだろうか。天使は大袈裟かもしれないが、オタちゃんも未砂記と話して少し気が楽になったと聞いた。

「じゃあね。おやすみんみんぜみ〜」

ミンミンゼミ？

「おやすみんみんぜみ〜」

浸地とオタちゃんのお陰で少し幸せな時間を過ごせた。二人にも感謝だ。

第十四話：小田麿線仙石原經由ふたりの幸せ行き（後書き）

未成年の飲酒を法律で禁止されています（――）（m

第十五話：再会 格差 芽生え

「オタちゃん、サイダー買ってえ」

「なんで？」

「末砂記たちがラブラブだからあ、私たちもらぶらぶしようよあ」

「サイダーとそれとどんな関係があるの？」

「サイダーを私の谷間に注いで、それをオタちゃんが飲むのっ」

「まったく、淫らな人だ」

「チエツ、あの男（優成）ならすぐ食らい付いてくるのに」

私とオタちゃんは末砂記と宮下の愛の時間を少しでも増やすためにコンビニでの滞在時間を少しでも長くしようと思って雑誌を立ち読みしたり、オタちゃんに好物の三ツ矢サイダーを集^{たか}つたりしながらゆっくり買い物をしていた。

「あの、そろそろ帰ってもいいんじゃないかな」

家を出て一時間弱。コンビニに居るにもそろそろ限界。

「そうだね！ じゃあゆっくり帰ろう」

結局サイダーを買わされて、大鶴さんとコンビニを出ようとした時、一人の女性が僕を呼び止めた。

「あれ？もしかして小田君？」

「えっ！？あの…」

どうやら僕を知っているようだったが、当の僕には見覚えがない。

「オタちゃんの友達？」

「いやその…」

「私のこと忘れちゃったかな？」

「忘れた！？やっぱり僕と面識ある…それとも人違い？」

「いや、え〜と…」

気持ちが焦ってきた。真面目に思い出せない。あ〜どうしようどうしよど〜しよ… 忘れたなんて失礼だ… 大変だあ〜

「オタちゃん冷や汗かいてるよ!？」

「同じ学校なのに…」

同じ学校!? うわっ…もって大変な事になってきたあーっ!! 大変だ大変だ大変だあー!! 普段他の人に関心ないから全然わかんない… どうしよどうしよたいへんたいへんたいへんたいへん!!?

たいへんたいってなんだーっ!?

「お、同じ学校!?!」

「小学校も同じだよ? 中学は一時的に引越してたから違うけど」

あっ!?!? まさか!?!? でもあの時と全然違う…。

「あの…もしかして…」

「思い出してくれた?」

「石神井いしじんさん?」

「そうだよ。やっと思い出してくれたね」

「いや、あまりにも変わっちゃって… 小学校の時は三つ編みで眼鏡かけてたし…」

彼女の名は石神井さやか(しゃくじいさやか)。小学校の時はまさに地味そのものだったのに、髪は大甕さんのように長く艶やかでストレート。ただ、色素は大甕さんより少し薄く、二人並ぶと茶色っぽく見える。顔立ちは柔和でおしとやか。決して地味ではなく清楚で大人っぽい、お嬢さまそのもの。そして僕は当時から地味なまま。

「えっと、こんな時間にどうしたの? 僕たちはウチでお泊り会やってるんだ」

「えっ!?!? ふたりきりで!?!?」

「いやいやいやいやいや、ちっ、違いますっ!!」

「え、オタちゃんひどい。私と暑くて熱い夜を過ごしてくれん
じゃなかったのお?」

「なっ!? 何言ってるん…!」

「そうなんだ。小田君も変わったんだね」

また大変な事になってきたあーっ!!

「いやそんな約束してないって!! なんで大甕さんは話を変な方
向に持つて行くんですか!?!」

「面白いから」

「やっぱり変わってないね。私も参加したいかも」

「えっ、石神井さん、でいいんだよね? 家に帰らなくていいの?」

「はい。今夜、家には誰も居ませんので」

石神井さんは少し遠慮気味に二人の様子を伺った。

「じゃあ来なよ! 人数多いほうが楽しいよね!? オタちゃん!
?」

「ええ、まあ…!」

ということ、急遽お泊り会のメンバーが一人増えた。

「あつ、おかえり」

「ただいま」

「ただいま、突然だけど、メンバー増えたよ！」

「あ、あの…」

「あれっ！？ 石神井さん！？」

「あつ、宮下君、ですよね？」

「ああ、去年クラス隣だったよね」

石神井さんは清楚で気品があつて、話したことはなかったけど俺の好みだった。

「はい。今夜は突然お邪魔してしまつてすみません」

「ううん、オタちゃんの家だから気遣いはいらないよ！」

「な、なんだよそれ！？ 追い出すよ？」

「女の子には優しくしようよオタちゃん！！」

その言葉によってオタちゃんの心のスイッチが押されたようで、急に男女平等について熱く語り始めた。

「現代は男女平等参画社会ですよ！！ レディースデーとか、女性にはデザートサービスとか！！ 優遇され過ぎです！！」

すると石神井さんはそれに反論するように切り返した。

「でも女性は家事ロボットとか子供を産む とか言われる事もありませんよね？」

オタちゃんは呆気なく失速。急に弱気な口調になった。

「た、確かに未だそう言う心ない人も居ますけど……」

「よく言った！ 石神井さん！」

大甕は何か勝ち誇ったように石神井さんを褒めたたえた。

「えっ、いえ……」

俺はこの場を治めようと尤もっとももらしい言葉をかける。

「なんかそういうのって複雑だよな。要するに互いを尊重すればいいんだべ？」

「宮下が言うみたいになればいいんだけどね」

「はい」

「そうだよ。男だからとか女だからとか関係ないよ。だから電車には男性専用車も設けてほしいな。この辺りの電車は小田急線以外女性専用車すらないけどね」

男性専用車なんかあったら臭くて呼吸もままならないだろうな。

「ごめん、オタちゃん。私が悪かったよ」

浸地が非を認めたというか納得したのか、オタちゃんに詫びた。

「私も、変な事言ってしまったってごめんなさい」

「い、いや、気にしなくていいよ。僕も急に熱くなっちゃって、ごめん」

浸地を謝らせたオタちゃんは気が重くなってきた。しかし、男女の格差はいつになったら無くなるのだろう。未だに賃金だつて同じ仕事をしても女性の方が低いし、亭主関白な家庭もある。夫は出稼ぎして給料が入るけれど、女性は家事をしても給料は貰えない。そもそも、収入で物事を考える世の中が間違っているのかもしれない。

「ところで、なんとここには大和撫子が二人も居ます！ 男性の二人、特に宮下は欲望を制御出来るのかな？」

「な、なんだよ！？ 俺には未砂記が…」

「でも、本能は嘘つけないよね？」

浸地の小悪魔的な笑みが、優成の中枢を刺激する。

「そ、そうなんですか！？ 男の人って…」

「そ・う・な・の・！」

「そ、そんな事ねえよ… 誤解だ」

口ではそう言いつつ、凶星だ。なんてこった。他の女に欲情してしまつとは。ってか浸地の白いネグリジエは俺のツボにどっぷりズツキユンだったの。そして石神井さんは見ているだけで、おいしそ〜。

男とは下劣な生き物だ。しかしここは我慢するしかない！

「オタちゃんは平気だよね？」

「う、うん」

いや、実は平気でなかったりする。何だろう？ なんかも胸騒ぎがする。しかもそれが快感というか、楽しい？ なんだ？ この感覚は…？

第十五話：再会 格差 芽生え（後書き）

なんかかんやで十五話まで勝手に続けさせていただいております m

（——） m

女性優遇…

複雑だあ…

第十六話：初恋（漫地編1）（前書き）

本作登場人物、おおみかひたち大甕漫地の小学生の頃の話ですm）
）
）
m

第十六話：初恋（漫地編1）

私は小学生の頃、私立の学校に電車で通っていました。当時私は五年生で、イジメの標的だったのです。

やっぱり避けられなかったか…

イジメが始まると同時に友達が減ってきて、味方といえば末砂記とクラスで一番騒がしかった男の子、海老名守えびなまもるくん。彼は学校の席が私の隣で、私立の学校では珍しく授業中も落ち着きがないので、授業に集中出来ません。でも弱った私に元気を分け与え続けてくれた掛け替えのない存在でした。

「おい大甕あ！！ 今日うちに来て勉強教えて！」

「やだ。遠いもん」

「いいじゃんケチ！ 相模線さがみせん使えば帰れるだろ！」

「授業聞いてない海老名君が悪いんでしょ。それに、相模線本数少ないし遅いからやだ」

「じゃあ帰り俺が送ってくから」

「しょうがないなあ…」

当時私は海老名君が好きで、初恋の相手でもありました。勉強を教えに行くのも、本当は最初から断るつもりなんかなかったのです。

海老名君の両親は不規則勤務の仕事をしていて、その日は家に帰ってこない日でした。

「ねえ、勉強するんじゃないの？」

「まあまあ、少しゲームでもしようぜ」

そのゲームは少しでは終わるはずありませんでした。ゲームが終わると近所の大型スーパーにあるゲームセンターで遊んで、買い物して帰りました。勉強なんかする気がないのは分かっていました。でも、心配だからつい、ありきたりな事を言ってしまう私。

「ねえ、勉強しなくていいの？ 成績いつもビリじゃん」

「いいのいいの！ 成績良くて学歴高くてもいい人生送れるとは限らないだろ？ いつ死ぬか分かんないんだから今を生きるの！ それに、俺にだってもしかしたら…」

彼のその言葉は、本当に私立学校に通う子供の台詞なのかと疑いたくなる。確かに誰がいつ死ぬかなんて分からない。だからといって将来をないがしろにしていいのか。複雑でした。

「海老名君はそんな簡単に死んだりしないよ！ だって、強いもん！」

「まあね！ それしか取り柄ないし！ あっ、あとイケメンか！」

「調子のるな！」

海老名君と居ると楽しくて、笑いが絶えない。でも海老名君と長い

時間会える学校は辛い。だから他の場所で会いたい。もっと沢山一緒にいたい。小学生の私にもそんな感情がありました。

「なあ大甕？」

「なに？」

「大甕と遊んでるとこんなに楽しいのに、なんで今回のターゲットに選ばれたんだ？」

彼の表情は無邪気な笑顔から一変、深刻な目で私を見る。

私達の学校では、一人虐めるのに飽きると次のターゲットを選ぶ。次も飽きるとまた次。しかも教職員たちに知られないように巧妙に仕組まれた計画的なイジメだった。今回私は、それに選ばれてしまったのです。

「ホントに楽しい？ 私と一緒にいると海老名君もイジメられちゃうかもよ？ だから早く離れた方がいいよ」

私なんかと一緒にいたら次は海老名君が…

だから私は彼に想いを伝えることが出来なかった。

「バーカ。一緒だと楽しいつつつてんだろ？ そうだ。週末お前ん家のホームシアターでDVD見ようぜ？」

「ホームシアターなら海老名君の家にだってあるじゃん」

「だってそっちは屋上プールあるし…」

「プールもここにあるでしょ？」

「だって、大甕の家、行ってみたいんだもん」

海老名君と週末会える！ しかもウチに来る！ 今週一週間はそれだけで乗り切れそうな気がした。

翌日の火曜日、クラスは騒然としていた。私が教室に入ると、末砂記と海老名君以外の冷たい視線が自分に集まったのが分かった。

第十七話：ラムネ（漫地編2）

海老名君と遊んだ翌日、教室に入ると海老名君と末砂記以外のクラスメイトの視線が私に集まった。

何だろう…？

「ねえ、大甕さんって、海老名君のこと好きなの？」

「好きなんだろう！？自分で暴露してるんだから。」

暴露！？何それ？そんな事するわけない。でもなんで？

「大甕が恋なんてキモッ！」

「しかもネットで公表なんてありえない。」

ネットで公表！？そんなの知らない！誰がそんな事したの？やりそうな人が多過ぎて、というよりクラスのほぼ全員がやりそうで特定出来ない。

当時インターネットは現在ほど普及していなかったけれど、私立の学校で金銭が豊かな家庭に暮らす生徒が多かった。そのためインターネットを使っている人も多いのです。

「あなたに誰か好きになる資格あんの？」

「えっ…？」

「だから、あなたが人を好きになる資格なんかないの！」

「だよ。気持ち悪い。人間の格好したゴミの塊のくせに。」

「そうだ。私は人を好きになっちゃいけないんだ。だって、ゴミ同然だから。早く処分されなきゃ…ゴミなんだから…」

「おい！大甕がネットで好きな人なんか暴露する筈ないだろ！第一、大甕が好きってことになってる相手は俺なんだからお前らには関係ないだろ！」

彼はそう言う手で末砂記にサインを送った。

「わかった！」

末砂記は教室を走り去ってどこかへ向かった。

彼はきつと一番の被害者です。存在理由が見当たらない私のイジメに巻き込まれてしまったのですから…

「あれ？もしかして海老名君って、大甕さんが好きなの？」

「ああ、好きだよ。可愛いしお前らなんかと違って中も外も綺麗だからな。外見とか世間体とか学力ばかり気にしてる本当のゴミと違って。」

「やっぱり好きなんだ！！ゴミが好きなんだから海老名はゴミ箱か！！今日からゴミ箱だね！よろしく、ゴミ箱君！」

「先生！大変です！早く教室に来て！！」

「なんだ。なんかあったのか。」

「いいから早く！」

私は浸地に一刻でも早くこの状況から解放されて欲しかった。その一心で担任を教室まで走って引っ張っていった。

しかし教室に戻ると、クラスメイトたちは何事もなかったかのように自習をしていた。

「なんだ。何もないじゃないか。」

「浸地がみんなに虐められてたの！」

「そうだ！！大甕がネットで俺の事が好きだとかいう情報流したってデマ言われて！！」

「大甕！！お前、可愛い顔してそんな事してるのか！！」

「えっ、そんな…」

「だから違えつつてんだろ！」

やっぱり担任も私がやったことにしようとした。過去にもそういう

事は沢山あった。しかし事實は闇の中。明るみに出た事はない。

「それに海老名と仙石原！！先生に向かって何だその言葉遣いは！減点だ！！それにな、例え大鵜がなんかの被害を受けてるとしても、学校内の事だから刑事事件にならない限り問題ない。イジメなんか警察も取り合ってくれないしな！でも自殺はすんなよ？厄介だから。」

担任教師の言葉はあまりに残酷でした。私はやっぱりゴミなんだ。早く死んじやいたいよ。自然に大粒の涙がこぼれてきた。

「何だとクソ教師！！今から俺が殺してやる！！！」

「待つて海老名君。今日はもう帰ろう。浸地もだよ。」

「仙石原！！逃げるつもりかよ！！ほっといいていいのかよ！！！」

「ダメだけど、これ以上ここに居たら浸地が可哀相だよ。」

「あ、ああ、わかったよ。復讐は今度だ。」

「無断早退。また減点だな。」

「勝手にしなよ。でも帰る指示したの私だから減点は私だけにしな。」

「」
そもそも浸地が虐められるようになった理由は社会科見学で出掛けるため電車に乗ろうとした時、浸地と同じドアから乗ろうとしたクラスメイトが横入りをして乗客のおじさんに怒鳴られたから。浸地だけは横入りしなかったので怒鳴られなかった。それが気に入らな

かったみたい。横入りしたのが悪いのに。イジメが日常で、一人の虐めるのに飽きたらまた一人。次々と標的を探す。だからその程度で理由は十分。

学校を抜け出した私達は海老名君の家で今後どうしていくか話し合った。例の浸地の恋について語られているサイトも見つからない。結論が出ないまま時間は過ぎていった。気が付くと北々東にあった太陽が北々西の空へ沈み始めようとしていた。その陽の優しい光が逆に気持ちを落ち着かなくさせた。

「この世界って太陽の優しい温もりと光はあるけど、そこに暮らす人って氷より冷たい心とブラックホールみたいな闇を持つてるんだよね。」

「末砂記…」

「でも、俺は太陽だろ？光だろ？」

「そうだね。でもそんな人、私達の周りには少な過ぎるよ。攻撃するのが生き甲斐で、人の価値基準は財力、学力、学歴、権力。そんな人達ばかりじゃん。」

「私、海老名君が好きなのは本当。でもネットでなんか公表してないよ。」

「分かってるよ。」

「俺も朝、反動で言っちゃったけど大甕が好き。だから大甕に何があっても俺が守ってやる。ついでに仙石原も友達だから…」

「本当に？こんな私がいいの？」

「うん。本当。嘘じゃない。」

「ありがとう。海老名君。」

「おめでとう！！でさあ、ついであって何！？私はオマケ！？」

「ああ、アレだよ。ピーピーラムネと一緒に小さい玩具入ってるだろ？アレ。」

「酷い海老名君！！最っ低え！！」

「えっ、いや、でも、ラムネより玩具の方が長持ちするだろ？長く付き合える友達ってことで…」

「えっ？じゃあ私達の縁はラムネみたいにすぐ溶けちゃうの？」

「いや違う大甕！誤解だ！！ラムネみたいに刺激的で甘い恋が出来るって事で！！」

「苦しい言い訳はよしなよ。」

「仙石原！！せつかく良い事言えたと思ったのに余計な事言っちな！それともお前も俺が好きで大甕との恋をさっさと終わらせてほしいのか？」

「えっ、そっなの？」

「そんな訳無いでしょ！？私はクールでカッコ良くて優しい人が好きなの！海老名君みたいなガサツな人は願ひ下げ！！」

「そこまで言われると…」

「あっ！ごめんね！！でも友達としては最高だから！！」

「苦しい言い訳だ…」

「落ち込むなよ！！冗談だよ冗談！！」

「だって…」

「今度ラーメンおごってあげるから！！」

「えっ！？マジで！？やっぱお前最高！！仙石原末砂記さま万歳！！」

「海老名君って単純なんだね。」

「こら浸地！余計な事言わないの！」

この二人が一緒なら何とかなるのかな？あんな奴らなんて蹴散らせるのかな？でも事は思い通りに運ばない。まさかあんな事になるなんて、誰も想像していなかったでしょう。

第十七話：ラムネ（漫地編2）（後書き）

ピーピーラムネとかラーメンで許しちゃう所とか。小学生らしい一面を描いたつもりなのですが…

末砂記の人物設定が子供にはかなり色々な事を知ってるって事にしてるので…

末砂記の話はまたいつか…

第十八話：ばあちゃん、みんな、ありがとう。
(漫地編3) (前書き)

漫地の話の続きです m () m

第十八話：ばあちゃん、みんな、ありがとう。（漫地編3）

水曜日、漫地は忌引で学校を休んだ。母方の祖母が亡くなったためだ。クラスでは登校拒否になったとか引きこもりになったなどと勝手な噂が流れていた。

守は普段の元気を無くし、教室の机に突っ伏していた。週末遊ぶ約束は当然果たせないし、何よりもこんな時にお祖母さんが亡くなったのだから、漫地は更なるショックを受ける事になり心配でたまらなかつたのだろう。

翌週の火曜日、漫地は再び登校。漫地と末砂記は最寄駅が違つので、電車内で合流した。

漫地は車内で末砂記に亡くなったお祖母さんの話をした。

私のばあちゃんは東北地方、福島県猪苗代町いなわしろに住んでいて、そこは家の中から大きな湖が見渡せるビュースポットでもある。ばあちゃんには、近所の野口英世記念館に連れて行ってもらったり、畑で一緒に野菜に水をあげたりして、よく可愛がってもらった。

ばあちゃんは農作業が趣味で、夏、家の敷地には東西に長く野菜畑が広がっている。そこで収穫された野菜はどれも店で売っているも

のとは風味が違い、特にトマトはおもいつきりトマトの匂いがして格別。私もばあちゃんの家に行った時は収穫を手伝っていた。

手伝いの合間、私は辺りに居るトンボを追い掛けていた。公園がない田舎では、昆虫採集や魚釣り、が日常出来る数少ない遊びだった。畑には黒い毛虫が沢山いて、おばあちゃんはそのを躊躇うことなく踏み潰していたのはグロくて印象的。ばあちゃんはトンボを追いかける私に、チョウを捕まえるよう言った。

「ほらほら浸地ちゃん、チョウチョを捕まえて！　そこ揚羽蝶いるべ」

「え、リンプン付くからやだ」

「浸地ちゃん、トンボを捕めえたら畑の虫増えちゃうべえ」

トンボは肉食で、畑の害虫を食べてくれるらしい。

「分かったあ。ねえばあちゃん、この黒くておっきいイトトンボ何？」

「これはハグロトンボだべ。よくテーブルの上でおかずと一緒に寝てるべさあ」

「テーブルで寝てるの！？　オニヤンマはよく家の中飛んでハエ捕つてくけど…」

黒く鮮やかな羽と、光輝くメタリックグリーンの身体が綺麗なトンボでした。ハグロトンボがイトトンボの仲間じゃないのは後で知った。

翌朝、朝食の前にウズラの卵みたいな模様をした豆を摘みました。これに砂糖を混ぜて煮ると美味しくなる。昼はまた畑に行つてトウモロコシを大量に収穫。これがここでのおやつだ。

「おいしい！ 甘いねこれ！」

「オラがこさえたんだから当たり前だべえ。都会じゃこんな食えねえだろうから送つてやる」

「ホント！？ ありがとうばあちゃん！！」

「浸地は素直でいい子だべえ。夕方たんぼに行つてイナゴ取るべさ」

「イナゴ！？ やつたー！！」

ばあちゃんが作ったイナゴの佃煮は私の大好物。バツタも混じつていたりするけどその時は気にならなかつた。それよりも食べる事に夢中だつた。

「おいしい！！ ばあちゃんのイナゴ最高！！」

「ホントに浸地は良い子だべさあ。もし浸地が誰かに虐められたりしたらばあちゃん神奈川まで飛んでついでいじめっ子退治するべよ？」

ばあちゃんはそう言いながら私の頭を撫でてくれた。まさか本当に虐められる日が来るなんて、当時四年生の私には想像もしなかつた。

そして、あつという間に神奈川に戻る日がやってきた。駅に行くためタクシーを呼んで、来るまでの時間、玄関で待つ。

「浸地ちゃん、また来るだべえ？　ばあちゃんビンの三ツ矢サイダーとご馳走用意して待つてるから」

「うん！　ありがとう！」

別れを惜しみつつ話をしていると、あつという間にタクシーが来てしまった。

「じゃあね、またおいでよ？」

「うん！　ばいばい。ばあちゃん」

タクシーが走り出すとばあちゃんは曲がった腰を押さえながら走って追いかけて来ました。私は車内から扉のハンドルを回し、窓を開けて精一杯叫んだ。

「ばいばいばあちゃん！！　またねー！！　ありがとうー！！」

それが、ばあちゃんとの最後の別れとなった。

それから約一年。私は日タイジメと闘いながら生活していた。

そんな中、私は海老名君に気持ちを告白した。

気持ちを告げた後、末砂記と一緒に家に帰った。

その夜、電話が鳴った。

「はい、大甕です」

お母さんが受話器を取った。誰かが亡くなったという雰囲気は理解できた。

最初、お母さんは無表情のまま、私に告げる。

「浸地、ばあちゃん、死んじゃったって。明日、ばあちゃん家、行くからね……」

言っと、お母さんは涙ぐみ、黙った。きっと、受け入れられないんだ、母親の死を。

まさか亡くなったのがばあちゃんだなんて、思いもしなかった。死因は急性心筋梗塞。私も、それを受け入れられず、表情を変えられなかった。

翌日は学校を休んで、初電と新幹線、更に電車を乗り継ぎ約3時間半。

その間、トンネルを抜けて横浜の小高い丘を走るグリーン車の二階席から、ずっと遠い所にある朝日をぼくつと眺めたり、新幹線の窓から、高い高い所にある雲を追い抜くさまを臨みながら、本当は生きているんじゃないか、死んだなんて嘘じゃないか、などと都合の良い妄想ばかりして、胸の中は信じたくない気持ちでいっぱいだった。

しかし私の本当に小さな期待はやはり裏切られた。

ばあちゃんの家の私に数知れない思い出や勇気、優しさをくれたばあちゃんは仏壇の前で静かに眠っていた。沢山の野菜とお母さんたちを育ててきたその手は少しゴツゴツしてるけど優しいあの感触を残し、太陽から授かった温もりは、きつと高い高い雲の上、還るべき場所へ。

その時、私は全てを受け入れた。

「ばあちゃん、ありがとね。向こうに行ってもいっぱい野菜作って、じいちゃんたちを喜ばせてあげてね」

隣では、お母さんが静かに涙を流していた。

77歳、決して長生きではなかったけれど、ばあちゃんはその生涯を強くたく生きた。私はそう思う。

翌日に葬儀が営まれ、翌々日、とうとう最後の別れの時が訪れた。

ばあちゃんの死は受け入れた。しかし、とうとう身に秘めていた思いが我慢出来なくて、他の遺族が居る中、私は大声で叫んだ。

「やっぱりやだ！！ やだよ！！ ばあちゃん居ないなんてやだ！！ 私もばあちゃんと一緒に連れてってよー！！」

「浸地、そんな事言うんじゃないよ！」

瞬間、大声で私を否定したお母さんに、強い反感を覚えた。

「お母さん私の事知らないくせに！！ 黙ってよ！！」

「えっ…?」

私は虐められている。もう心が壊れそう。毎日が憂鬱で、自殺も考えた。その事をお母さんは知らない。

「浸地ちゃん、オラはいつも浸地ちゃんを見守ってるから、淋しがる事ねえべさ」

「ばあちゃん!？」

思わず私は後ろを振り向いて、声を出してしまった。しかし、周りの人は私のそれに無反応だったように見えた。

今、確かにばあちゃんの声が聞こえた。でも他の人には聞こえていないみたい。いや、聞こえたというより、心の中、胸の内側から響いてきたような気がした。

ばあちゃんは私の心の中に居る。そう思うだけで心強くなれた。だけどそれじゃ天国行けない。ばあちゃんに心配かけない自分にならなきゃ。

「浸地、あなたの名前はばあちゃんが付けたみたいなものなのよ」

「え？ お父さんが特急電車の名前から付けたんじゃないの？」

「そう。最初は平仮名で『ひたち』の筈だったんだけど、ばあちゃん
が乾燥した地面でも水で潤せるような、つまり、困っていたり悩
んでる人に心の潤いを嫌ってほど沢山与えられるような子になれる
ようにって漢字を当て嵌めたの」

そうか。だから漢字だったんだ。名前の由来は鉄道員のお父さんが
特急の名前から取ったって聞いてたけど、名前の漢字の由来は知ら
なかった。

「ばあちゃん、私、困ってる人たちの力になれるような人になれる
ように頑張るよ」

翌週、再び私にもうひとつの現実が戻ってくる。学校に行けばまた
イジメの標的として扱われる。気が付けば私は末砂記と一緒に学校
の最寄駅に居た。

「優しいおばあちゃんなんだね」

「うん。私もばあちゃんみたいに強くなりたい」

「浸地なら大丈夫。もっと強くなれる」

「もっと?」

「もつと。今だって強いじゃん。だから私達と一緒に頑張ってるね！」

「うん！」

「おはよー！！ 大甕とオマケの仙石原さん！！」

「おはよう海老名君！」

「私はやっぱりオマケなんだ！！」

いよいよ教室に到着。今日は何が…

「大甕…」

教室に入るとイジメの主犯となっている男子が話し掛けてきた。

「なに？」

何されるんだろう…

「ごめん、今まで」

「…」

謝る理由は何？ ひよつとして、油断させるつもり？

「よく考えれば、大甕を『虐める』理由なんかなかった。テストでずっと僕がトップだったのに、それを大甕に奪われたのが悔しくて。」

だから次に虐めるのは大甕にしようって、みんなに言い聞かせて…」

「そっか、分かった」

「酷い事しといてこんな事言つのも難だけど、許してもらえる…かな？」

「じゃあ、これから誰も虐めないって、約束してくれる？」

「うん、もうクラスの人のこと虐めたりしない。約束する」

「分かった。なら、いいよ」

「ありがとう。今まで本当にごめん」

私への不自然なくらいあっさり終わりました。

しかし、彼は翌週から次なるイジメを始めた。相手は担任です。担任は私達生徒をぞんざいに扱い、次々と起こるイジメを見逃したり、テストの点数で人間を判断するなど、良くない所を挙げたらキリのない人だった。中でも最低なのは、女子生徒に対するセクハラ。生徒は小学生なのに。私は末砂記に守られ、その被害は避けられた。

担任は彼から校長に全てを報告され、調査を行った後、解雇となった。これは教師イジメというよりは内部告発。自業自得。その後、その教師を復帰させる運動が一部職員の間で行われた。しかし、それが実ることはなかった。

イジメから解放された放課後、いつものメンバーで桜木町駅前にあるランドマークタワーの展望台に行った。

「ごめん！ デートなのに私も来ちゃって！」

「いいよ！」

「そうそう！ 今日は祝いだからな！」

それにしても不可解だ。なんで急にイジメをやめたんだろう。理由もなく虐めるなんていつもの事なのに。

「きつと、浸地のおばあちゃんがやめさせたんだね！」

「あつ…！」

未砂記の言葉で思い出しました。去年の夏、ばあちゃん言ってた！
もし私が虐められたらいじめっ子をやっつけてくれるって。

「大甕？ どうした？」

「ばあちゃん… ホントにイジメから解放してくれたんだ… ありがとう…！」

「約束したべえ？ オラ嘘つかねえ！」

「そっか！ そうだよね！ ばあちゃん！」

「大甕？ ばあちゃん、居るのか？」

「居るよ。浸地のすぐ後ろ。浸地、あんなに嬉しそうに泣いてる…」

「えっ、仙石原も見えるのか！？ 見えないの俺だけかよ！！」

ランドマークの幻想的な夜景をバックに、浸地は亡くなったおばあさんとの再会を果たした。

末砂記は朝、浸地と会った時からおばあさんに気付いてたけれど、浸地ちゃんには内緒、って口止めされていた。

二人の無言、うつん、心と心の会話は数十分続いたのだった。

「浸地ちゃんもうオラが居なくても大丈夫だべえ。浸地ちゃんにはこないいい友達居る。もう心配いらねえ」

とうとう別れの時です。本当はずっと私の傍に居てほしい。でもそれじゃあちゃんは天国に行けない。

「うつん…」

「じゃあ浸地ちゃん、元気でなあ。ばあちゃん、向こうで見守ってるべよあ」

私は必死に涙をこらえました。ばあちゃんに心配させちゃいけない。心配かけない事がばあちゃんにとって一番良い事だと思うから…

「ありがとう。いっぱい優しくしてくれて。本当にありがとう。私、ばあちゃんの事ずっと忘れられないからね。だから、ばあちゃんも私の事忘れないでね？」

「分かった。約束だべ」

「うん、約束」

「末砂記ちゃんと守くん？ 浸地ちゃんの事、宜しく頼みます」

末砂記たちの事は、私からよくばあちゃんに話していました。

「私達の事、知ってたんですね。ほら海老名君、浸地のおばあちゃんが浸地の事よろしくって言ってるよ？」

「あっ、はい！」

「じゃあな、みんなも元気だな？」

「さようなら。浸地は私に任せて下さい！」

「いや、俺が守る！ 名前の通り！」

「よかったなあ、浸地ちゃん」

「うん！ じゃあね！ ばあちゃん！ 天国でも元気だね！」

「ああ、じゃあ、オラ、行くな」

「うん。ありがとう！ ばいばい！」

私がそう言つと、ばあちゃんは微笑みながらその姿を消した。

「良かった、ちゃんとお別れ出来て」

「そっか」

「俺はよくわかんなかったけど、良かった良かった！」

周囲の人は、私達を不思議そうな目で見ていました。

「じゃあ帰ろっか！」

「でもその前になんか食ってこっぜ？」

「そっだね」

食事をして海老名君とは横浜駅でお別れ。私達はばあちゃんとお別れしたランドマークの幻想的な世界から、満員電車という現実に引き戻された。でも、これでいい。ここが私達の在るべき場所なのだから。

二年後、私と末砂記は経済事情で公立の中学へ。海老名君はエスカレーター式でそのまま同じ学園の中学へ進学した。海老名君との恋愛関係は終わっちゃったけど、小学生の恋愛はこれくらいがちょうど良いのかな。

高校三年生となった現在、海老名君とは連絡が取れていません。家電話番号は知ってるけど…

「そういえば海老名君、小田原の高校に行ったらしいよ？ ひたつちの家つて小田原だから、どっかで会ってるかもよ？」

「えっ！？ そうなの！？ 何処からの情報！？」

「ミサキこねつと！ そして私がイメージキャラクターのミサキコネコ」

「はい！？ 意味わかんないよっ！」

「ミサキこねつと！ は、末砂記によるコネクションとネットワークの略だよ！」

「もう、訳わかんない事言ってるんで教えてよお。ってかパクリじやん！」

「ひ・み・つ」

また会えたらいいな。自然とそんな感情が芽生えた。私は今も末砂記やその彼氏で二代目元彼のすう君（優成）、オタちゃん、石神井さんといった友達に恵まれている。

小学生時代を振り返って未だに気掛かりなのは、どうして人は誰かを攻撃するのか、それによって快樂を得ようとするのか。

戦後、日本は独自の技術開発に励みつつ、海外との取引も盛んになり、急激な経済成長を果たした。しかし、それと引き換えに、ばあちゃんからもらったような、愛情、温情、恩情を失い、目まぐるし

い日々の中、やがて人である事すら忘れてしまったのでしょうか。

もしかしたら、誰かを攻撃しなければ気持ちがいり切れなくなってしまう世の中が創造されてしまっているのではないのでしょうか。現代を生きる人々の責任は重大です。

人は、時に誰かを傷つけ、逆に自分が押し潰されそうになることもある。だからこそ、一人ひとりの意識や思いやりが大切です。例えば、自分の友達が何か悩んでいたら、相談に乗ってみたり、一緒に考えてみる。そして一緒に立ち向かう。そんな小さな事の積み重ねが、この世の中を優しくして、愉しくするのだと思います。

これまでの日本が経済成長で幸せを得たのなら、私は、掛け替えのない仲間や愛する人と共に歩み、か細い紅い糸で繋がる、未来に語れるような幸せを紡いでゆきたい。

以上、大甕浸地、18歳の記録でした。

第十八話：ばあちゃん、みんな、ありがとう。(漫地編3)(後書き)

なが〜い話になりました。更新もやや遅めです。構想に少し時間を
かけましたが、なかなか上手く表現出来ません。精進精進…(、
、；)

第十九話：流星とポップینگキャンディー（前書き）

今回は主人公である優成中心の夏物語ですm | | m

第十九話：流星とポップینگキャンディー

俺は事件のあった家の修理が済むまで埼玉にある親戚の家でお世話になることにした。末砂記からは自分の家で寝食するよう勧められたが、兄弟や親戚でもない高校生の男女が一つ屋根の下で暮らすのは如何なものかと思うので遠慮した。

家庭の事情で大学に行けず就活する事になった俺だが、SPI（就職試験）の勉強はあまりしていない。

ああ、現実逃避してえ…。

気が付けば八月。今日は地元の海岸、サザンビーチで花火大会。俺はそれを観賞するため埼玉から一時帰省していた。花火大会は退院した末砂記と一緒にに行くことになっており、末砂記も俺も他の人も一緒にどうかと誘ったが、気を遣われて二人きりで行って来るようにと断られた。

夕方、俺と末砂記は大麿の家で待ち合わせ。末砂記が大麿の家に来ているからだそうだ。

俺は待ち合わせ時間ほぼびつたり到大麿の家を訪ねた。どういう訳か、時間より前には来ないように言われたからだ。とりあえずインターフォンを押して待つ。

「あつ、すう君だ。そろそろ末砂記追い出すから待っててね」

大麿の家のインターフォンはカメラ付きなので俺が無言でも向こうからは誰が来たかわかる。ちなみに『すう君』というのは大麿が

俺を呼ぶ時のあだ名。

待つこと数分。普通は玄関先でそんなに待たせないと思うが…。

「お待たせっ！！」

ようやく扉が開いた。

ぬほあっ！！ な、なんと眩しい！！

俺の目の前には浴衣を纏った末砂記と大甕の姿が。ああ、にやけて頬が落ちそうだ。

末砂記の浴衣は黄色、大甕はピンクがベース。末砂記に黄色は、外見、性格、イメージにピッタリだが、少し大人びた大甕のピンクの浴衣もギャップがあって意外と可愛い。

「優成久しぶりっ！！ 元気い？ どう？ 浴衣似合う？」

「ああ、はい、似合ってます」

浴衣だといつもの制服と少し雰囲気違うなあ。そそられる、帯引っ張りでえ！！ いやいや、そんな事考えちゃいけない！ 理性を保て！ それにそんな事したら殺される！ それに帯引っ張るなんて古典的すぎる！ ん、俺、暑さで頭狂ったか？ それにしても可愛いなあ、二人とも。

「何そのテキトーな返事」

「いや、その…」

ロベタという奴で、感情を素直に出せないんだよなあ…。

「二人とも、楽しんできなよ？　せつかくデートなんだから」

「いえす！　おふこーす！！」

「はい、どうもです」

「よし！　じゃあ私はオタちゃんと石神井さんと一緒に行くから。宮下、未砂記の事しっかり頼むよ？」

「うん」

夜、俺と未砂記は観光客があまり来ない、地元の人が集まるスポットで花火を見ることにした。しかし、開始時間になっても花火が打ち上がらない。

「あつ、ひたつちから電話だ。出るね」

「うん」

「もしも〜し」

「もしもし未砂記？　ごめんねデートの邪魔して。なんか花火、波が荒いから安全確認で打ち上げ遅れてるらしいよ」

「えっ、そうなん？　分かった！　ありがとう！」

ここの花火は海上の船から打ち上げるのです。なので波が荒いと危険なので花火を打ち上げられません。でも、打ち上げ時刻が遅れるって事は終了時刻も遅れるって事なので、優成と二人っきりの時間もその分延びます。私的にはちょっとラッキーなのです！

待つこと約二十分、ようやく花火の打ち上げが始まった。夏の幻とも見えそうな色とりどりの花火たちが、ドンツ、パラパラと普段は何も見えないくらい真つ暗な海岸と霞んだ夜空を音と共に華麗に彩る。俺はただ、末砂記の左手を握りながら花火に見入っていた。

無数のポップピングキャンディーのような火の粒たちが、ジメジメした夏をノックして、透き通った季節にしてくれる。まるで魔法のようだ。

「「うおおおっ！！！」」

「ヒューー！！！」

花火大会の目玉でファイナーレとなる大スターマインが打ち上がる
と辺りは騒然とし大きな歓声と拍手があちこちで沸き起こった。

「凄いね優成い！マジ感動！！！」

「八八、素直だなあ」

「ええ、感動しないのお？」

「いや、感動してはいるんだけど、言葉に出せなくて」

花火の光が目キラキラさせた末砂記に反射する。なんかいいな、素直に自分の気持ちを表せるのって、羨ましい。俺の口ベタは、気持ちを素直に言葉で表すのが照れ臭いからなのかもしれない。

それにしても花火とは不思議なものだ。空を駆け登る時はたったひとつの小さな流星。ところがそれが宇宙に届きそうな高さに到達すると、その小さな流星は自分の体を大きな音をたて空いっぱいに散らし、更に小さくて、なぜか江戸時代を連想させる無数の大流星群となる。あんなに小さくても、力いっぱい頑張ればあんなに大きくて素晴らしい事が出来る。もしかしたら俺みたいになちっげな人間でも、何か凄い事が出来てしまったりするのかもしれない。

「そっかあ。言葉に出せなくたって感動出来ればいいじゃん！」

「だよな」

優成、本当は今の気持ちを言葉にするのが照れ臭いんだろうなあ。そっという所、なんか可愛い。

初めて優成と見た海に降り注ぐポップینگキャンディー。そのはじける音はロマンチックと一緒に私の気分をいつも以上に高揚させたのでした。

夏独特のほんわかした夢幻のような雰囲気と感覚。そして今年は

ついこの前まで苦手だった末砂記とふたり。

僅か三千五百発の花火大会は荒波で打ち上げが遅れたにも関わらず、いつもより更に短く感じた。これも末砂記と一緒にだからかもしれない。

「優成、そろそろ帰ろっか!」

「ああ、これから二時間かけて埼玉か、めんどくせ」

「今日はウチに泊まりなよ。優成の着替えウチで預ってるんだからな」

「そうだね。そうさせてもらっかあ…」

「なんかあんまり嬉しそうじゃないね。やっぱり私のこと苦手?」

「ううん、なんか不思議で。まさか末砂記と付き合っただけじゃ泊まるなんて。それに付き合ってみて末砂記がうるさいだけじゃないって知れて良かった」

「だね!私は付き合うまで優成にあんな一面があるなんて知らなかった。」

「その話はくれぐれも内密に…」

いま俺は最高に楽しい。そんな楽しい気分をプレゼントしてくれた末砂記やみんなに感謝する。

末砂記の部屋にお邪魔して、今夜も俺はテグスにビーズを一粒通

す。

「優成い、お風呂先に入っでいい？」

「そりゃ勿論。末砂記の家なんだし」

「ありがとう。なるべく早く出るからね！」

そんなに気遣わなくて良いのに……。俺って末砂記と知り合っでから六年間、彼女の何を見てきたんだろう。こんなに優しく可愛い女の子、俺には勿体ないなあ……。

第十九話：流星とポップینگキャンディー（後書き）

話を早く書き上げると出来が悪くなるので少し時間をかけて話を作ったのですが、あまり完成度に変化ないような…

第二十話：裸エプロン

花火大会の夜、埼玉にある親戚の家に戻るのは面倒なので俺は末砂記の家に一晩泊めてもらう事にした。

末砂記の家は築十五年程度の一軒家で、茅ヶ崎市海岸地区ではやや広めの五十坪くらい。南側に庭があり、土地全体の面積六十坪くらいになるだろう。

いま末砂記は入浴中で、家族は他に誰もいない。いや、帰ってこないと断言できる。

俺は広いリビングのベージュ色で大きなソファーにポツンと座っている。彼女は普段この広い家で一人きりなのか。

なんか落ち着かない。あまり散らかっていないからか、生活感があまりなく、どこか空虚で淋しい。

カノジヨの家にふたりきりでお泊りなんてそうそうないシチュエーションなのに、この感覚は何だろう。

色々考えながら約四十分が過ぎた頃、末砂記はようやく風呂から出て来た。なるべく早く出て来ると言っていたような気がしたがそれは聞き違いだろうか。

お世話になっっている立場なので文句は言わないが、仮にそれを言ったとしても、優成ひとりぼっちで淋しかったんだあ、などと凶星なツッコミを入れられ、まともな言葉を返せなくなり、そんな事ねえよ、と分かりやすい返事しか出来なくなってツンデレだとか言わ

れるのがオチだ。

「お待たせえー!!! お風呂入っていいよ!」

「ん〜と、あなたの目の前に居るのは誰でしょう?」

「何言ってるの!? 優成でしょ? 彼氏の事忘れるほど馬鹿じゃないよ」

「あ〜、なるほど。じゃあ俺の性別は?」

「男の子でしょ? 私レズじゃないよ。そこまで馬鹿にされると傷つくなあ」

「じゃあその格好は?」

上半身は大きめの白い無地のシャツにピンクのブラが透けて見える、男の前とはいえ真夏のクソ暑い季節の格好としては割と普通。しかし下半身はおそらくパンツ一枚。シャツが大きいのでパンツはギリギリ見えないチラリズムが男心をくすぐる。

「あつ、もしかしてエッチな気分になっちゃったあ? 私、大人っぽくてセクシイだからね!」

「いやいや、あなたの外見は大人っぽくないですよ? 顔は割と童顔だよな。」

俺はロリコンじゃないけど。

思う事は色々あるが敢えてスルーして風呂へ。

「うわっシカト!?　これがカノジヨに対する態度ですか!?!」

やはり返せそうな言葉が見付からないのでシカトして風呂に入る。
俺って、かなり感じ悪いんだろっなあ。

浴室は広く開放感がある。浴槽のお湯はメントール入りのミルクーバスで心地良い。それに風呂独特の匂いも自分の家の正人が腐らせたものより格段に良いものだ。それにさっきまでここには末砂記が…。

「優成?　まだ出て来ないの?」

「ん?」

風呂のモニターの向こうから末砂記が俺を呼んでいる。

「もう一時間以上経ってるよ?」

「はい!?!」

要らぬ想像を膨らませているうちにすっかり眠ってしまったようだ。お湯もかなり冷めていた。少し温かいシャワーを浴び、さっさと風呂を出る。

「俺とした事が…」

とりあえずリビングに戻る。そこには少し色褪せた青いジーンズを

履いた末砂記がテーブルの上にみじん切りにされた玉葱の炒飯や、ほうれん草入り卵スープが二人分用意して待っていた。

「遅いよお。間抜けな寝顔さん」

俺は爆睡すると口を開けてしまうのだ。

「見たんだ…。俺の間抜けヅラ。ところでこれ末砂記が？」

「そうだよ！」

女の子の手作り料理は嬉しいものだ。それにここなら正人が帰って来るのを恐れる事なくゆっくり食事が出来る。一度で二度美味しいとはこの事が。それにしても末砂記が料理出来るなんて、失礼だが意外だ。

「優成のためにいっぱい愛情込めて作ったからいっぱい食べてね！」

「サンキュー。いただきます」

「いえいえそんなご主人様あ。私もいただきます！」

「ご主人様？」

時々変な事を言う子なので本音を言うとそんな事気にも留めていないが敢えて突っ込んでみる。

「優成が絡んできたあ。珍しい」

なんだその反応は！？俺が絡むのがそんなに意外だったか。じゃ

あ今まで変な言動はスルーされるの前提だったのか？

「うるせえ」

それしか返せる言葉がなかった、頭の回転が悪い俺。

「早く食べなよお。冷めちゃうよ」

「あ、はい」

末砂記は俺が一口目のスープを口に運ぶのを興味深そうにじっと見ていた。

「ど〜お？」

「美味しい。マジで」

匂いは美味しそうだが味はどうかと予想していただけに驚いた。

「でしょ！？ 良かったね！ 良いカノジョが出来て！」

「それを言わなければなあ」

食事を終わると末砂記は食器を洗うため台所へ。お世話になっていた俺が何もしないのも良くないし、ここまでやらせてしまうと肌がむず痒いので何か手伝おうと後を追った。

「どうしたの？ 裸エプロンやってほしいの？」

その一言で手伝う気をなくした。そして無言でその場を立ち去る。

「あつ！ またシカトしたあー！！」

「何か手伝おうと思って来たの！」

すると末砂記は急に俺を包むように穏やかな笑みを浮かべながらいった。

「知ってる。優成ってそういう奴だよ。今日くらい何も気にしないでゆつくりしなよ」

「いやでも……」

「いいから！ 次からは手伝ってもらおうからね！」

また見透かされた。俺に気遣う事なく手伝いさせないためにわざとあんな事を言ったんだ。

「サンキュー。じゃあお言葉に甘えて」

「じゃあテレビでも見てて！ ちょうど今なら『世界遺産』が大画面で見れるよ！」

実質一人暮らしなのに大画面のテレビ。これは単身赴任の末砂記の父親が送ってきたらしい。きっと彼は末砂記が一人で暮らしている事を知らないのだろう。

「手伝ってもらえばよかったかな？」

恩着せがましいなあ、私つて。素直に手伝ってもらえば裸エプロンなんて言った意味気付かれなかったよね。

リビングに戻った俺は早速世界の遺産をフカフカなソファーから大画面で拝む。一度はその遺産の数々を訪れてみたいものだ。それから間もなく末砂記が戻り、俺の隣に座った。

「優成い、明日ネコちゃん退院だからね」

例の一件で俺の家で飼っているネコが羽アりに襲われて動物病院に入院している。

「ホントにいいの？ 此处で面倒みてもらって」

末砂記は以前から家でネコを預かってくれると言ってくれている。

「うん！ トイレ外でするんだから全然問題Nothingだよ！」

うちのネコは家の中で排泄しない。俺の家と末砂記の家は小学校の学区は違えど程近く、この近辺は縄張りのようだ。

「ねえ、そろそろ私の部屋、行かない？」

そういえばそうだった！ 寝る部屋一緒じゃん！ 他の家族の部屋は一応使ってるみたいだし。やべ、どうしよ。

第二十話・裸エプロン（後書き）

優しかった、他愛ない会話の中にひっそり隠れているのかも…？

第二十一話：本能はネコにも俺にも（前書き）

今回は単純な話ですm（ ）（ ）m毎回複雑な内容だと暗い物語になりがちなので…

第二十一話：本能はネコにも俺にも

今夜は末砂記の家にお泊り。たった二人きりの空間。

深夜、そろそろ寝ようと末砂記は俺を自分の部屋に誘った。

俺は座っているソファから立ち上がるのを戸惑った。

「どうしたの？」

「いや、俺、このソファで寝ようかな」

「じゃあ私もここで寝るうZZZ」

それじゃ意味ないんだって！

「いやいや付き合い始めて間もない若い男女が一緒に寝るのは……」

「あつ、またエツチな妄想してる」

ニヤリ、末砂記が俺の心理を読み取って少々嬉しそうだ。

「妄想じゃ済まないんだよ！ 本能が妄想を現実にしちゃうんだよ
！」

「きゃ〜、こわ〜い」

こわ〜い、の後に何か言いたそうな、やる気ない口調は、明らかに俺をバカにしている。

「今日、アレ持っていないから尚更やバイんだよ」

バカにされて内心半ギレの感情を抑えながら、アレがない事を告げた。

「そっか。分かった。じゃあ私は部屋で寝るよ」

末砂記はどこか淋しげな表情だ。

「あ、うん」

「じゃあねえ。おやすみんみんぜみ」

「ミンミンゼミ?」

「そう、ミンミンゼミ! じゃねっ!」

「じゃあ」

末砂記は二階の部屋へ行った。それにしてもあっさり引き下がったなあ。悪い事しちゃったかな。

やっぱり私の事好きじゃないのかな? 事件に巻き込んだからって嫌々付き合ってたのかな? 屋根裏で一緒に星見たかったな。おやすみのキス、したかったな。

午前三時、部屋に戻って三時間。私は眠れずに彼の事を考えていました。

優成って、どんな女の子が好きなんだろう？ ミンミンゼミみたいに活発な私より、切なく鳴くヒグラシみたいな子の方が好きなのかな？ 優成の元カノって、二人とも大人っぽいから、そういう子のほうがいいのかも。

午前八時

「ふああああ」

末砂記の事を考えつつも、いつの間に眠っていた。

末砂記は俺が眠っている間に布団をかけてくれた。

「末砂記？」

末砂記は朝食を作っていた。夜、追い払っちゃったのに本当に悪い

な。

「おはよ。もうちょっとで出来るから待っててね！」

「布団、サンキュー」

「あつ、ごめん！ 暑かった？」

「ううん。んな事ないよ。ホントに」

また優成に恩着せちやったかな？ 熱帯夜に掛け布団なんて余計だよね。

「出来たよー！ 食べよー！」

「うん。あつ、目玉焼きなら俺でも作れるよ」

パンに目玉焼きとベーコン、そしてスクランブルエッグ。卵料理が二つというのは疑問だが、末砂記が心を込めて作ってくれた。それは伝わって来る。

「マジで！？ じゃあ今度作って！」

「うん。目玉焼き作れるって驚く程でも…」

「じゃあ食べよー！」

「いただきます。」

「いただきますー！」

末砂記が作る料理はどれも温かい味がする。冷めた俺を包み込んでくれる優しい味。

「末砂記、色々してくれてありがとう。あと昨日の夜はごめん」

「いいよ！ 夜の事は！ 私が魅力的過ぎるのがいけないんだから！」

とつさにそんな事を言えるのが凄い。俺だったら自分が魅力的だのカッコイイだの言えない。まあ、とりあえず許してもらえたのだから。

午後、俺と末砂記は予定通り動物病院からネコを引き取りに行った。前にも言ったが

『ネコ』は固有名詞だ。うちの猫の名前だ。実はこの猫は捨て猫で、俺と妹で拾ってきた。語る事は沢山あるがそれは別の機会に。

末砂記の家に戻って早速ネコを籠から出した。此処と俺の家は近い。猫は家に執着するというから工事中の俺の家に行かないか心配だ。

「ウヤーン！ ウワーン！ オワーン」

初めての場所だから落ち着かないのだろうか。ネコは俺に何か訴えてきた。とりあえずネコに自分の顔を近付けてみる。そして目と目を合わす。

ネコは目を逸らした。

頭を撫でてみる。

ネコは目をつむった。

「こんにちは」

ネコに話しかけてみる。

ネコは何も答えずその場を立ち去った。

「ダメだなあ、飼い主さん。ネコちゃんの事分かってないなあ」

「ああ？」

食ってかかるように返事した。

末砂記はネコに近寄って話しかけた。

どうせ未砂記だって分かってないだろう。

「ネコちゃん」

未砂記はしゃがんでネコに顔を近付けた。

ズリズリ…

ネコは未砂記の顔に頭をズリズリした。

…？

未砂記とは初対面の筈…

俺とは付き合い四年目の筈…

…！

…？

いせいせ…

優成は混乱した。

「ウヤーン」

ネコは何やら未砂記に話しかけた。

「じゃー…」

未砂記はとりあえず返事をした。

ズリズリ…

俺もネコに話しかけてみる。

「じゃー」

…

反応しなかった。

俺の中で何かが崩れた。

「落ち込むなよ優成い！ 大丈夫だよ！ ネコちゃん別に優成の事嫌いじゃないって！」

「ありがとう。その言葉だけでも嬉しいよ」

素直になれずにいられなかった。そして、哀しかった。

気が付けば夜。

そういえば俺たち受験生なのに勉強してないな…

そんな事を考えながらアリに家をやられて未砂記の家に荷物を預ける際にニツセンで注文したタンスの上ではネコが尻尾を垂らして黄昏れていた。

ニツセン

無料配布のカatalog。

そのタンスからアンダーウェアを取り出すべく尻尾をよけて引き出しを開け取り出す。そして閉める。

「フシャーッ！」

ガブッ！

「うひゃーっ!?!」

「どうしたの!?!」

未砂記が隣のリビングから駆け付けた。

フシャーッ！ から、うひゃーっ!?!? までは一秒足らず。

また俺は素っ頓狂な声を出してしまった。

どうやら引き出しを閉めた時にネコの尻尾を挟んでしまったようだ。

「うわっ！ 優成！ 右手！」

ポタッ…

「あ……」

相当強く噛まれたため、俺の右手からは血が滴り落ちていた。

ドタツ！ シャンシャンシャンシャンシャン……

猫はタンスから降りて鈴の音を鳴らしながらその場を立ち去った。

「あの猫野郎……」

「逃げちゃったね。手当てしてあげるから先ず手洗って来て！」

早速手を洗い手当てしてもらおう。

「いでっ！」

消毒液が傷に染みる。かなり深くやられたか。ネコめ、後でいっぱい可愛がってやる……

「あぁっっ！」

「変な声出さないの！ 男の子でしょ？」

男とかカンケーねえ、痛いものは痛い。

夜が更けてもう深夜。

今夜も当然のようにこの家に泊まる事になった俺は石鹸が染みるのを我慢しつつ風呂に入り、いつも忘れそうになるが、ビーズを一粒通してから屋根裏部屋で星を眺め、家に置いてあるワインを白と赤を一本ずつ呑むことに。おつまみはブルーチーズでシンプルに。

「優成と二人きりで呑むのって初めてだね」

「そうだね。あの時以来だけど、あの時の事は持ち出さないで」

実は中学生の時に未砂記とその仲間たちで呑んだ事がある。

その時のメンバーで男は俺だけという普通なら羨ましい場面だった。しかしその夜、俺は調子に乗ってウイスキーを原液のまま一気呑みして女子数人の前で吐いてしまった。しかし、急性アル中にならなくて良かった。

「はいはい、あの時は凄かったね！アレ処理したの私なんだからね！」

「あらっ！多大なるご迷惑を」

当時から私は彼の事が好きでした。好きな人のゲロなら片付けられるでしょ？と、みんなに言われ仕方なく、それはホントに仕方なく。

ワインとブルーチーズ、そして星空がロマンチックな雰囲気醸し出しています。そのワインを開けて数十分。彼はお酒に弱いみたい

で、あつという間に酔ってしまいました。でも酔ってる時の彼はとても素直なのです。

「末砂記い」

彼が私の名を呼んだその時、ロマンチックな雰囲気が一気に様変わりしました。

第二十一話：本能はネコにも俺にも（後書き）

友達とかカノジヨと夜お酒呑むのって、定番ですよ。きっと…

僕は未成年ですからそんなこと…？

この年代だと酒はチューハイ、煙草はマルメンとセッターが人気な
ようです…

たまたマイセン派もいますね。

言うまでもないですが未成年の飲酒、喫煙は法律で禁止されています。

第二十二話・ミンミンゼミみたいに鳴くアブゼミも居る(前書き)

サブタイトルと本編の関連性は殆どありませんので予めご了承ください

い m () () m

第二十二話・ミンミンゼミみたいに鳴くアブラゼミも居る

すっかり酔い潰れた彼。普段クールな彼。しかし酔い潰れると平静な時は絶対に言わないような本音を何の躊躇いもなく言います。私はそれが楽しみなのです。

「末砂記い…？そこに居るのはだあれ？あつ、みしやきちゃんだあ」。

意味不明です。人格が変わってます。それともこれが彼の本性？

彼は酔ってる。そこで私は思い切って彼は私が好きなのか聞いてみる。

「ねえ優成い。あのさ…あの…私の事、好き？」

「ん〜？好き！だあ〜いちゆきでちゆよお？みちやきが居ない人生なんて有り得まちえ〜ん！」

良かった…

ちゃんと好きでいてくれたんだ…

彼のその言葉で私は自然に表情が柔らかくなりました。

英語の例文に出てきそうな文章だなあ…

「末砂記い…ごめんね…俺のせいで…でも俺は…末砂記が好き…責任とか関係ない。」

やっぱり彼の心の底にはあの事件が引つ掛かっていた。

「気にすんなよ。そんなの。私は優成が傍に居てくれるだけで最高に幸せだよ。」

事件の責任なんて関係なく私の事が好き。本当に良かった。私の最大の悩みはあっさり解決しました。

「ありがとう！本当にありがとう…末砂記…」

その夜、私には新しいノルマが出来た。それは彼が背負っている重要な事件の責任感を取り払う事。そんな事気にしないで接して欲しいし、何よりずっと彼を苦しめてきた父親のせいであんな事になったのだから。一番の被害者は刺された私ではなく彼なのだから。

彼も過去の私のように辛い現実を背負っている。彼にだってそろそろ幸せが来たっていいじゃない。だから…

「よし！私も呑むぞー！ワインの次はチューハイだー！！果物バラダイスだー！！」

「おう！呑んで呑んで潰れるじょー！！みしゃきいー！！」

こうして二人は夜明け前まで暴れた。でも俺はいつのまにか眠ってしまった。

気が付けば午前五時。

…俺、いつの間に…

「ふあああ…」

呑んだ時の記憶がねえ…

末砂記、酔ってるなあ…何か歌ってる…

「みくんみんうるさいぞぉ〜私は鳴いちゃう雌のせみい〜彼は鳴かない雄のせみい〜」

相変わらず意味不明だ…

一曲歌い終えてまた一曲。またセミの歌？

「みんなみんぜみぜみあぶらぜみい〜 私の前世はあぶらぜみい〜
うるさいしつこい暑苦しい〜 ごめんねこんなカノジヨでえ

〜!〜」

そんな末砂記が好きなんだからわざわざカタツムリの歌の替え歌で謝らなくても…

ってか末砂記ってセミ好きなのかなあ…

うつ…気持ち悪…二日酔いだ…飲み物買ってこよ…

そういえば俺、酔ってる間なんか変な事言わなかっただろっな…？
飲み物買って帰ると、末砂記は自分の部屋のベッドで寝ていた。気が付けばもう昼。毎年恒例のあの昼ドラでも見るか…

「おはようじむし〜。」

短い睡眠を終え、末砂記が起きてきた。二日酔いの時にウジムシとかやめるよ…

「こんにちは。冷蔵庫にアミノ酸入りの飲み物入れといたよ。」

「ありがと〜気が利くね〜。」

夕方からここで勉強会。オタちゃんとおおみか、そして新しく俺等の仲間に加わった石神井しゃくじいさんが来た。

シャンシャンシャンシャン…

「ウナアーン。ナヤーン。ニヤッ！」

彼等が家の中に入ってきた時、どこかに隠れていたネコがみんなの輪の内に入って来た。

そして俺を除くみんなの膝にズリズリした。

あ〜そうですか…どうせ俺なんて…

「あつ、石神井さんだね！？はじめましてえ〜！！末砂記です！！よ

ろしくっ！」

「はいっ、はじめまして。よろしくお願ひします。」

末砂記は同じ学校なので顔は知っていたようだ。

「でき、二人とも、酒臭いよ？」

「うん。確かに大甕さんの言うように…」

「失礼ですが、私もそんな気が…」

「だって、夜明け前まで呑んだもん！」

「うん。なんだか眠くなってきた。」

結局俺と末砂記は寝てしまい、勉強会は三人だけでやったようだ。

ここから先は僕、小田博文オタちゃんがナレーション。

勉強会を適当な所で切り上げ、大甕さんはキッチンを勝手に使つて食事の準備を始めた。部屋には僕と石神井さん。僕と石神井さんは小学校からの知り合い。お互いに遠慮せず話が出る数少ない人の一人。久しぶりに会った時は顔を見ても誰だか分からなかったけどそれはそれ。

「ねえ小田君…ちょっと話があるんだけど、いいかな？」

「どうしたの？」

何だろう？かなり不安げな表情だ。

「あの…実はね…」

彼女の相談内容は僕が想像もしなかった、いや、出来る訳無い事だった。

「そう…か…本当なんだね？」

「うん。…どうしよう…小田君…どうすればいいの…？」

「大丈夫だよ。きっと分かってくれる。よく話してくれたね。」

とは言ったものの、これは大変なんてもんじゃない。僕がその立場だったらきつとストレスで死んじゃう。彼女を救うにはどうすれば…早くどうにかしてあげないと…掛け替えのない友達を見捨てるなんて出来ないよ…

第二十三話：夕方、思い出のキノコ公園で

今日は久しぶりにファミレスでバイト。このファミレスではバイトでも有給休暇が貰えるので、連日それを利用していたのだ。

この日は普段に増して暑さのレベルが格段に高い。三重県と埼玉県では最高気温が四十度九分。俺がそんな所に行ったら死ぬだろうな。

「いらっしゃいませ！ 二名様ですか？」

お客さんはちょうど私達と同じくらいの年齢の男の子二人。

「あゝ、はい。えっと、宮下っていうバイトの人いますか？」

優成に何か用かな？ もしかしてクレーム？ アイツ接客態度暗いから。

「はい。少々お待ち下さい」

私は一礼して、さっそく優成を呼びに厨房へ向かう。

「ねえ優成い、お客さんが呼んでるよお」

「俺？ 接客態度良くないからクレームかな？」

コイツ、自覚してるんだ。

客から呼ばれたとのことで、俺は足取り重く未砂記から聞いた番号のテーブルへ向かった。

「はいつ、ご用…」

あれ？ 何故ここに？ ってかなんで俺がここでバイトしてるの知ってるの？

「おっす！」

「ヤニ切れ〜」

この二人は埼玉在住の友人だ。わざわざ遠い所までおつかれさま。

ところで今回この二人が登場した意味はというと、文字数調整による場繋ぎだ。今後たまに登場するかもしれないので紹介も兼ねて。一話あたり二百文字以上という規定があるのだ。ここで初めて作者の代弁。

二人が俺のバイト先を知った理由は、俺が酒に酔った勢いであれこれ全て吐露してしまったからだという。もちろん隣に居る未砂記と付き合っている事も。

バイトが終わって空は茜色、俺と未砂記はそのまま近所の公園へ向かった。埼玉の友人たちは原宿の竹下通りで買い物をすると言って早々と去った。ちなみにこの公園は、あのサザンオールスターズが地元ライブを敢行した公園だ。

「優成い、ちょっと話があるんだけど」

「どつぞっ？」

「うん。ちょっとじゃなくて長いんだけど、私の過去の事、優成には知っておいて欲しい。あなたにはなるべく隠し事したくないから」

まるで別人のような口調だ。俺はこの後、未砂記の壮絶な過去を知る事になる。

第二十四話：バイオカマキリなんているの？

これは私、仙石原末砂記が小学五年生の時の話。

その年といえば地元で暮らす人々はサザンオールスターズの地元ライヴで盛り上がった年。私も盛り上がった一人。マジでサザンの生演奏最高でしたよ！？ でもその年は、私にとって複雑な年でもあったのです。良い意味でも悪い意味でも決して忘れられない年。

私の家庭は当時から父親は単身赴任。母親と姉が同居していた四人家族です。特に困った事もなく、経済状況も問題ない円満な家庭でした。

「末砂記っ！ サザンの新曲予約してきたよ！」

「サンキュー！ 姉貴！」

年初めに大ヒット曲を出したサザン。夏に一曲、秋にバラットのアルバムともう一曲新曲をリリースしました。その年はまさにサザンイヤーです。姉貴が予約してきた新曲はかつてイチサンヨン、つまり国道134号線沿いにあった海を眼前に臨めるホテルをモデルにした曲。

さて、サザンについて長々と語ったところで本題に入るとしましよ
う。

季節は梅雨。私は当時アメリカのビバリーヒルズを舞台にしたドラマにはまっていた。今思えば家族みんなで楽しめた数少ない番組です。家族とのこんな些細な時間が実はとても大事な時間。こんなま

ったりしてたらお話が作れないよ…。

とりあえず家族の紹介です。父親は単身赴任、母親はごく普通の専業主婦で、当時は日曜日になると親戚の家の手伝いをしていました。姉貴は高校一年生。

彼氏が出来て幸せそうです。

いいなあ…。

そして私が無垢で清楚で可憐な美少女、未砂記！

というのは嘘で、本当は無駄に騒がしいただのおバカ！

でも無垢だったのはホントだよ！

こんな愉快的な家族から物語は始まるのです！

じゃね！

バイバイオカマキリ！！

意味分かんないよね…。

第二十五話：いとしの？

今日は姉貴が通う高校と私が通う小学校のテストが返却された。姉貴は彼氏を連れて意気揚々と家に帰ってきた。

「末砂記い、この人が彼氏だよ」

「こんにちは末砂記ちゃん」

「こんにちは！！」

彼の名は川越勇一。かわえゆういち成績優秀で東大の医学部志望だという。

「末砂記い、テストどうだった？」

姉貴は興味深そうに座布団でくつろぐ私を見下ろす。

「聞いて驚け！？ なんと百点だよ百点！！ どうです奥さん！」

「えー珍しい。見せて見せて！」

私は早速ご要望にお応えして三枚の答案用紙を右上の点数だけが見えるように重ねる。順番は一点のテストを一番左、あとは右隣に零点のテストを二枚。三枚をこう並べると左から1、0、0、という数値配列になる。これで百点！！

「どお！？ 凄いでしょ！？」

姉貴は呆れた顔をしていた。当たり前といえば当たり前だ。この配列で百点になるなどと理解出来ない人も少なくないだろう。

「ハハハ、凄いな未砂記ちゃん」

「だべえ！？ 三枚寄れば文殊の点数つてか！？」

「大丈夫かしら。姉としてこの先思いやられるわ…」

「私は今を生きるの！」

「そうね。人生いつ終わるか分かんないし、そういう生き方もアリかもね」

その後は姉貴と姉貴の彼氏にいっぱい遊んでもらった。姉貴もだけど、彼氏も面倒見の良い人なんだなあ…

夜、姉貴の彼氏が帰って数分後、母親のよし江が帰ってきた。

「ただいま〜絵里い、テストどうだった？」

「お帰り。つてか一言目がそれ？」

就寝の時間。家には一人一室ずつ部屋が用意されているけれど、今夜は姉貴の部屋で二人一緒に寝る事にした。灯りを豆電球にしてふわわりのオレンジの光が部屋を包み込む。

「実は私も点数良くないんだよねえ…」

「え、どうしたの？ 中学までほぼ毎回トップだったんでしょ？」

「高校って学力ほぼ同じ人が集まるから、今までトップだった私でも急に落ちこぼれちゃう事もあるわけ」

「そっかあ、大変なんだね」

姉貴の口から学力に関する弱音が出るなんて、今までなかったので少し信じられなかった。

土曜日の朝、この日は雨。私達はいつものように目覚め、いつものように朝食を摂る。

「二人とも、ご飯出来たわよ」

「はい」

「ふにゃ」

ブルルルル…

電話が鳴り、母親が受話器を取る。

「はい、仙石原です」

「ああ、俺だ。ちょっと話がある…」

電話の相手は赴任している父親。

「えっ！？ ちょっとどうゆうこと！？」

母親の口調がかなり驚き気味。何があったのだろうか…

父親との通話を終え、母親がテーブルに戻って来た。

「末砂記、聞いて」

「なにになに？」

話の内容は、父親が勤める会社の経営状況が一気に悪化したため私
が通っている小学校から高校までエスカレーター式の私立学校を小
学校一杯で退学して、中学からは公立学校に通う事になるとい
う事だった。そして同じ会社の上司の娘である浸地も同じ学校に通
うこと。浸地とは小学校入学以来の付き合いだ。

「うん、分かった！」

「あら、あっさりオッケーしたのね」

私にとってはイジメの絶えない学校で浸地が苦しむのを見ているく
らいなら浸地と浸地が好きな男の子、海老名君と一緒に他の学校に
転校したかった。

「あつ、いけない！ デートの時間だつ！ じゃね！ 行ってきます！」

「行ってらっしゃい。いっぱいチュウして後で感想聞かせてね！」

「はいはい……」

苦笑いで私に返事をして姉貴は急ぎ足で家を出ていった。夕方までの間、私は母親と駅ビルや大型スーパーのサテイで買い物をした。母親はこの後友人と約束があるというので、私は独り家路を辿ろうと駅のコンコースを歩く。

「末砂記！」

姉貴だ。なんだもう帰って来たのかあ。

「あつ、姉貴い、どうだった？ チュウした？」

「さあね。それよりこれから横浜で遊ばない？」

「彼氏と遊べば良かったじゃん！」

「なんかね、これから用事あるから早く帰らなきゃいけないかったんだって」

姉貴と夜の横浜。雨はすっかり止んだ。港の見える丘公園にはカッ

ブルがいっぱい！ 私もいつかは…

華やかだけどこか切ない公園からの夜景を眺めながら、姉貴と私はその一時ひともぎのトークを楽しんだ。

「私さあ、サザンのコンサートに彼誘ったんだけど、家族と行くからダメなんだってえ」

「へえ、普通なら彼女と行きたいと思わない？」

「家族想いなんだよきつと」

「そっかあ、優しい人なんだねえ」

「だからさ末砂記、私と一緒に行く？ ね？」

「うん！ いとしの絵里と一緒にね？」

「そうそう！ いとしの絵里いと！」

家に帰ると私達は二人でお風呂に入って、今日の思い出話やくだらない話で静かに盛り上がる。母親はリビングのソファで眠っているようだ。

「喉渴いたから飲み物取って来るね」

「うん」

姉貴はそう言って階段を下り、冷蔵庫があるキッチンへ向かったのだが、なかなか戻って来ないので私もリビングへ向かおうと階段を

下る。深夜なので物音を立てないようにそそと。

ところが姉貴は階段を下りてすぐのリビングの横開きの扉をほんの三センチ程開けて部屋を覗き込んでいた。

「ねえ、何してんの？」

かすれるような声で姉貴に理由を尋ねる。

「だ、ダメ、見ちゃ……」

「まあまあ、そんな事言わないで見せてよお」

気になるので姉貴をそと押し退け私もしビングを覗く。

「えっ、うそ……」

私は自分の目を疑った。

第二十六話：姉妹愛

扉一枚向こうには…

姉貴がそつと囁く。

「末砂記、部屋に戻ろう」

「…うん」

部屋に入ると、姉貴はベッドに飛び込み放心状態になっていた。

私達二人が見たもの、それは母親と姉貴の彼氏の禁断の一面。小学

生の私にも映画などで見た事があるので分かった。

「姉貴、なんで止めなかったの？」

「怖いよ、怖くて止められないよ……」

私も怖い。怖くて震えが止まらない。今あの二人の前に行ったら何されるだろう？ もしかしたら殺されちゃうかも。って言うかこれは現実？ 頬を抓ると痛い。やっぱり現実だった。

「大人って汚いよ、私、彼もお母さんも信じてたのに……」

姉貴にとっては最悪の状況。もちろん私にとってもだけれど、好きだった彼と自分の母親がこんな事を……

「ねえ、姉貴、誰を信じればいいの？ 親も信じちゃいけないなんて思いもしなかったよ……」

「そうだよ、でも私の事は信じていいよ。一緒にサザンのコンサ
ート行こうね」

「分かった。約束だよ？」

「うん、約束。」

私達は恐怖に怯えながら悪夢のような夜を明かした。姉貴は体に力が入らない様子。

「姉貴、立てる？」

「大丈夫、あつ…」

立つ事すらままならない。当たり前。私だって口が痺れてる。

もうあの人が帰ったであろう昼、私は母親を問い詰めるべくリビングへ。

「ねえ、どういう事？」

「ん？ 何が？」

やっぱり最初はとぼけるか。

「どういう事じゃないよ。夜中の事だよ。アンタここで姉貴の彼氏といけない事してたでしょ」

「何それ？ 夢でも見てたんじゃないの？ どうせ彼氏が欲しいからって妄想でもしてたんでしょ？」

何言ってるのこの人…なんで私の妄想なの？

「最初に姉貴が見付けたんだよ。それを私も一緒に見たの」

「ああ、仲良いのね。二人揃って同じ夢見るなんて」

なんで？ なんで子供に嘘つくの？ 私が一年生の時、学校の当番サボったけどちゃんとやったって嘘ついた時は何時間も怒って何回もひっぱたいたくせに…

「もついい」

「あつそ。気が済んだのね」

母親に失望して階段を駆け登り姉貴の部屋に戻る。

「アイツ、シラ切ったよ。ウチ等の妄想だとか言ってきた。なんで親のそんなシーン妄想するんだよ」

「そつか。なんか私の人生って馬鹿らしいなあ。小学校の時から必死に勉強して友達とも遊べなくて、遊べないからどんどん友達減っていつて、お母さんには勉強頑張れば将来幸せになれるって言われて、だからそれでも我慢して勉強頑張って、今の高校入って、でも入ったら成績ビリで、そんな私にも好きな人が出来て、告白したらオツケーしてくれて。初めての経験もして、でもその彼がまさか…」

姉貴の人生って、こんなに辛かったんだ、勉強頑張ってたのは知ってたけど、母親に幸せ掴むためって言われて必死で勉強して。やっとな彼氏が出来て幸せになったと思っただけならその幸せを母親に奪われて…

可哀相過ぎるよ…

私は衝動的に姉貴の胸に飛び込んで少し涙を流した。

「姉貴い、ごめんね、私ばっかり楽しんで…」

「ハハツ、いいんだよそんなの。末砂記の生き方の方が正しいんだよ…でも末砂記だつて辛いよね？ まだ小学生なのにね？ 酷いよえ、ごめんね末砂記い、横浜行ってなければ寝てる時間だったのになえ。あんなの見なくて済んだのにねえ？」

午後六時。二人は夜中までずっと泣き続けた。

月曜日、姉貴は学校で彼を問い詰めた。

「ねえ、どういふことなの？　うちの親と」

「はあ？　何それ？　そんなの知らねえよ」

彼の口調が今までと違う。それに嘘のつき方が下手だ。

「何よそれ！？　ふざけないでよ！！」

「るっせーよ！　ってか俺、もう新しい彼女出来たからお前とはサヨナラ。お前エツチする時痛がって叫ぶからこっちも気持ち良く出来ないんだよね！」

えっ、それって…

「それって、体目当てって事？」

「はあ？　当たり前えだろ。男なんてみんなそうだから。もういいからお前さっさと死ねよ」

「分かった。サヨナラ」

彼に別れを告げ学校の屋上を去る。

その日、私は頭痛に見舞われ学校を早退した。家に帰ると末砂記が自分の部屋で日記を書いていた。

「珍しいね。日記なんて」

「うん。私が母親になった時に同じ過ちを繰り返さないように、カタチにして残しとくんだけ」

「末砂記だったら大丈夫。きっと良いお母さんになれるよ。ちょっと頼りなさそうだけど」

「最後の一言余計！」

「はいはい。私頭痛いから寝るね。おやすみ」

「そうなんだあ。お大事に。おやすみんみんぜみ」

姉貴の背中がみるみる頼りなくなっていくのが分かった。そういえばこの事実を父親が知ったらどうなるだろう。これもこれで可哀相で言えない。

こんな感じの日々がしばらく続くある日、姉貴は頭痛で学校を休んだ。あれ以来ずっと頭痛に悩まされているみたい。

もうすぐ夏休み。そしてサザンの地元ライブ。それが傷ついた私達の大きな楽しみだった。

姉貴は相変わらず頭痛に悩まされているけれど学校へは通っている。私はいつも通り小学校へ登校した。

「末砂記、最近元気ないね。」

「ううん、そんな事ないよ。ありがとね浸地ひたぢ、心配してくれて」

友達に気付かれてしまった。表情に出てるかな…

「浸地はサザン、海老名君と行くんだよね？」

「うん！」

「そっかあ…」

放課後、私は寄り道する事なく家に帰る。

私の部屋の机には姉貴の手作りクッキーがお皿に山盛りで置いてあった。クッキーを包むラップの上には置き手紙が。

『お帰り！』

あとで一緒に食べよ！

絵里

夕方六時頃、姉貴がどこかから帰ってきた。クッキーを見付けてから二時間待たされた。

「遅い！ 早く食べようよお」

「ごめんね！ 食べよー！」

姉貴の作るクッキーは少し砂糖が多いけど優しい味がする。この味が小さい頃から私のお気に入り。だけど一気に全部食べちゃうのは勿体ないので明日食べる為に少し残した。その夜、姉貴は久しぶりに私と遊んでくれた。トランプしたりテレビゲームしたり、お互いの体をくすぐり合ったりしてじやれたり。

「久しぶりだね！ 姉貴と遊ぶのって！ 私はこれだけで幸せ！」

「そうだね！ こういうのが幸せって言うんだよね！ 私って勉強なんかしなくても幸せだったんじゃない！」

姉貴も少し元気を取り戻したかな？

「ありがとね末砂記！」

「何があ？」

「私、末砂記が居なかったらこんなに楽しい思い出出来なかったよ！ 本当にありがとう！」

「いや、それほどもある？」

私達二人なら、きっと何があっても大丈夫。そう、きつと…

第二十七話：放心

いよいよ楽しみにしていた地元ライブの日。私も姉貴も元気を取り戻しつつあった。チケットは取れなかったけれど、生演奏は会場となる公園の外からでも聞くことができる。公園周辺には大勢の市民が集まった。

ライブの最中、同級生くらいの男の子が一人で聴いているのに気付く。おかつぱ頭の大人しそうな感じの子だった。

「ねえ、キミ一人？」

「ん？…うん。」

「じゃあ私達と一緒に聴こうよ！楽しい事は共有したほうがいいし、一人じゃ危ないよ？」

「うん。」

この子は一人ぼっち…？

もしそうだとしたら私達は二人だからその分心強いのかな？

彼等の生演奏が私達が住む海岸地域にこだまする。様々な曲調を持つ彼等の楽曲たちは、その曲が変わるごとに街のムードも変えていった。私もいつか彼等の様に何かを変えていけるような人になりたいと思ったのはこの時だった。

すっかり演奏に聴き入り、ふと横を見ると姉貴が静かに涙を流して

いた。感動して泣いてるのかな？何か思い出してるのかな？敢えて涙の理由は聞かないことにしたけれど、近いうちにその理由を嫌でも知ることになるのだった。

ライブはあっという間にファイナーレを迎え、アンコールの後に無事終わった。何とも言えない独特の感覚を地域いっぱいにちりばめられた。忘れる事のない最高の夜。

男の子とお別れして公園から程近い家へと戻る。

「今日は最高の一日だったあ〜！！一生の思い出だね！末砂記っ！」
ベッドに腰掛け両手と背筋を伸ばす姉貴はとても満足気な表情だった。

「ですねっ！」

私は絨毯に横たわって体を目一杯伸ばす。

短い夏休みが終わり、新学期が始まった。姉貴は再びアイツと頻繁に顔を合わせる事になる。

この頃から母親はあまり家に帰って来なくなつた。

私達にとっては生活費は単身赴任の父親から振り込まれるのでかえってその方が気が楽だった。日照時間が短くなり楽しかった夏に別れを告げる様で切ないこの季節、姉貴が居て良かったと実感する。とは言っても姉貴はバイトをしていて週三日か四日は一人の夜になる。でもそんな夜は姉貴がようやく帰って来ると一際安心する。

「お帰り！」

「ただいま」

「今日は疲れて食欲ないと思ってご飯と味噌汁しか作ってないよ」

「いつもありがとね。もう末砂記は一人暮らしでも平気だね！」

「やだ！姉貴居ないと作る意味ないし。」

「そっかあ。じゃあ沢山おかわりしていい？」

「食欲ないと思って軽目にしたのに…ま、いつか！いっぱい余ってるし味噌汁はあんまり長く保存出来ないもんね！」

翌日、姉貴はひどい頭痛で学校を休んだ。

「今日は私にご飯作っとくね！」

「うん！でも無理しちゃ駄目だよ！じゃあいつてきま〜す！」

「ありがと！いつてらっしやい！」

私はクラブ活動で帰りが遅くなる。いつもの立場が逆転する日だった。

すっかり帰るのが遅くなり、夜のドラマが始まっていた。家の中はいつもとは違う、少し甘い匂いがした。

「ただいま」

姉貴から返事がない。寝てるのかな？

リビングに入ると、テーブルには姉貴お得意のクッキーが山盛りで置いてあった。

私はそれを確認して荷物を置くため二階の部屋へ戻った。その足で隣の姉貴の部屋に入った。

「末砂記…」

扉を開けると足元には姉貴がぐったり横たわっていた。尋常じゃない。それだけは分かった。

「姉貴！？どうしたの！？ねえ！？救急車呼ぶから待ってて！！」

「妹になってくれて、ありがとう。最期に会えて良かった…」

この時私はなぜか体が金縛りに遭ったようで一步も動けなかった。

「だめ…そんなのだめ…」

それからどのくらい時間が経っただろう。姉貴は少し目を開き優しい笑みでずっと私を見つめていた。私が動けないのはそのせいなのか…

「姉貴、私の方こそありがとね。私はもう大丈夫だから…」

姉貴が口を開ける事はもうなかった。ただ最期まで笑顔を絶やす事なく、ゆっくり目を閉じていった。そう、ゆっくりと…

私はこの時、人が死ぬところを初めて目の当たりにしたのと同時に、状況によって様々かもしれないけれど、ドラマのように最期の言葉の後すぐに目を閉じるのではなかった。その時は悲しさなどの感情はなく、無心に近いような不思議な気持ちだった。

放心状態の私は救急車を呼んだ。その時、もしかしたら姉貴はまだ生きてるかもという無意味な期待をしたけれど、やはりそれは叶わなかった。

独り家に戻った私は、ふとりビングの姉貴が作った料理とクッキーに気付いた。

翌朝、病院から連絡を受けた父親が赴任先から戻ってきた。

「末砂記、何があつたんだ？何でこんな事に…」

父親は私とは違って大人しい性格。泣くより落ち込んでいた。私は姉貴の近況を知っている限り全て父親に話した。母親との離婚は即断だった。

数日後、姉貴の死因は不明という知らせがあつた。頭痛が続いていた事やストレスの蓄積からクモ膜下出血と予測されたけれども違うらしい。

葬儀の日、母親と姉貴の元カレは来なかった。周囲の親族や姉貴の通っていた学校の人たちは悲しみに暮れていた。しかし私は姉貴の最期を見た唯一の人物にも関わらず、その事実を頭で分かっているも心かに追い付けないで表情を変える事なく姉貴の亡きながら火葬される時も、骨を拾い集める時も、表情ひとつ変えられなかった。

第二十七話：放心（後書き）

色々事情が重なって久しぶりの更新でしたm（
|（
|（
m

第二十八話：クッキー

夏休みがそろそろ終わる。父親は仕事のために赴任先へ戻った。家に残ったのは私だけ。この頃、ようやく姉貴がいなくなった実感が沸いて来て、孤独感に浸り始めていた。

私、独りぼっちになっちゃったんだ…

そんな私を励ましに友達の浸地と海老名が来てくれた。

「仙石原、お前は独りじゃないからな。」

「そうだよ。私達が居るからね。」

「うん！大丈夫だよ！ありがと！」

強がるしかなかった。でも友達の実在は本当に心強かった。

私は渋々二人に姉貴のクッキーを勧めた。

「良かったら食べて。一人じゃ食べ切れないし、姉貴も二人と食べてもらったほうが嬉しいと思うから。」

「うん。分かった。じゃあ、いただきます。」

「おう。いただきます。」

三人は同時にクッキーをかじった。

「このクッキー、優しい味がする。末砂記への愛情がいっぱい籠ってるんだね。」

「だな。なんか俺も泣けてきた…」

私はその瞬間、クッキーの風味に刺激され一気に流せなかった涙が溢れ出てきた。

「姉貴…なんで…なんでよお…」

その泣き方は、感情を表に出しやすい私にしては静かだった。

「末砂記…」

「へっ…!?!」

浸地は私を抱き寄せ、頭を黙って撫でてくれた。少し気分が落ち着いていた。

「末砂記、こんな事しか出来なくてごめんね。」

「せ、仙石原？俺の胸で泣いてもいいぞ？」

「エツチ。」

なぜかその時だけ涙が引いた。

「何？その反応…」

夜、二人は帰り、私は再び独りぼっちに。その時、家の電話が鳴っ

た。

「はい、仙石原です。」

「末砂記ちゃんだね？」

姉貴の元カレだ。

「あんと話す事なんかないから。」

「海に来て欲しい。謝りたいんだ。」

「そんな事言つて、私も殺す気？」

「違う。ただ、末砂記ちゃんに直接謝りたいんだ。だから。」

私が殺されれば、姉貴にすぐ会えるかな？そんな気持ちで私は海へ向かった。

夜の海は昼とは一転、波の音が聞こえるだけ。周囲は霞みがかつていて、灯台の光が僅かに届く。

「末砂記ちゃん……」

姉貴の元カレは待ち合わせ場所にどんよりした立ち姿で居た。右手には何か長方形の缶を持っていた。私は息が止まりそんな緊張感で近寄った。

「何？今更。」

「君のお姉さんが死んだ原因にはきつと、僕等の愚かな行為が含まれてる。だから、妹の君の前でその罪を償おうと思った。」

「そんなこと言ったって、姉貴はもう戻って来ないよ。」

「分かってる。」

そう言つと彼は缶の蓋を開けた。中身は何？

第二十九話：こうして私は

「ねえ、なにそれ？」

「償うための道具だよ」

彼は缶の蓋を開けると、中身の液体を自身の足元に撒いた。

この臭いはまさか…

「これで許してもらえるなんて思ってない。けどこれしか思いつかなかった」

缶の中身はオイルのようだ。彼の手は震えていた。そしてその手でポケットからライターを取り出した。

「本当に悪かった」

「本気なの？本当にそんな事する気なの？」

その時の私は至って冷静だった。

彼は手を震わせながらオイルのかかった足に着火した。

「うああああ！！！」

火はすぐに彼の下半身全体に広がった。苦しむ彼を見て私はふと我に戻った。

「だめ！！死んじゃだめ！！！」

「いいんだ！君の絵里の、君の姉さんの苦しみに比べれば…」

「だからって、あなたが死んだってしかたないの！！早く海に入
て！！」

「…」

応じないので上半身にも火が回った彼のまだ無事な手を私は無理矢
理海へ引きずり込んだ。

彼は下半身に大火傷、上半身に軽い火傷を負ったが一命は取り留め、
近くの病院に入院した。

「どうして僕なんかを助けたんだ？」

「だって、死んだって姉貴に謝罪したことにはならないから。本当
に悪いと思ったなら、ちゃんと生きて姿勢を見せて欲しい」

「君、小学生なのに立派だね。分かった。頑張ってみるよ」

私は誰も居ない家に戻り、なぜかふと自分の部屋の机の引き出しを
開けた。開けてみるとそこには身に覚えのないビーズのセットがし
まっていた。

「なんだろ？」

そのビーズのセットには手紙が付いていた。これは姉貴からのプレゼントらしい。早速その手紙を読んでみる。

「末砂記へ。このビーズには不思議な力があります。少なくとも私はその力を実感しました。それは……中略……でも、もしこのビーズで作った作品を壊したり無くしたりしたら……」

私はこのビーズに秘められた凄い力と、それに伴う絶大なリスクを知った。だからこのビーズを誰かにあげる時は絶対に信用できる人に限って渡すと決めた。

あれから七年経った現在、彼は会社員として働いているという話を姉貴の友人から聞いた。しかし、もう一人の不倫の張本人である母は未だ消息が掴めないままだ。

舞台は現在に戻り、優成と二人きりの思い出の公園。

「つてのが私の過去かなあ……」

「うわあ、なんだか俺の状況なんか屁でもないな」

「そうかな？まあ背負ってるものは人それぞれだよな！」

俺のカノジョ、末砂記の過去は俺の近況に比べればかなり壮絶だ。こんな過去があるなら性格が暗くなるどころか人間不信にも成り兼ねない。

しかし少なくとも彼女は俺と知り合った六年前、中学一年生の時から現在に至るまで人一倍明るい性格に伺える。そして個人的に一番気になるのは口数少ない俺なんかを何故好きになったのだろうか。

「あのさあ、末砂記ってなんで俺のこと好きに…?」

「好きになったからだよ!」

即答!でも答えになつてねえ…

「いや、だからなんで…」

彼女は少し困った顔をした。もしかして俺の事好きじゃないのか?

「うーんとねえ、好きになることに理屈なんか要らないよ。でも教えて言うならちゃんと私の相手してくれるからかな。」

「えっ、末砂記、色んな人と話してんじゃん。」

俺がそう言うと、彼女は再び困った表情になった。何かまずかったのだろうか。

第二十九話：こうして私は（後書き）

今回は文字数調整のためにひとつの話の中に色々詰め込み過ぎてしまったような気がします。

もっと上手く編集出来るよう努めます m ((m

第三十話：優成のプチ環境教室

俺を好きになった理由を尋ねると、彼女は再び困った表情になった。

「あの、なんか俺、まずい事言っただけかな？」

「ううん、そんな事ないよ。でも好かれた理由は自分で考えてね！」

「自分で考える？好かれた理由を……」

「そう！自分でねっ！」

ううん、なんだろう……そもそもそんな事考えるのってなんかなあ……俺も日本人だなあ……欧米の人はそういう事考えるの得意そうだよなあ……

末砂記の家に戻って俺達は受験勉強を始めた。家計が苦しい俺は就職、末砂記は進学で、夏休みが終わりに近付き、就職試験まであと僅か。

ハア……四十日以上以上の連休とも今年でサヨナラかあ……

「ねえ優成い、夏休み中にどっか行かない？」

「ああ、いいけど？」

そうだよなあ、就職試験の勉強も大事だけど遊ばないと勿体ないよなあ……

「じゃあ何処にする？」

話し合いの結果、少し奮発して日帰り旅行をすることにした。ただ旅行するのは九月になってからだ。夏休み中は都合がなかなか合わず、近所で遊んだり海水浴などをして過ごした。

翌日、俺は改修中の家に戻り庭の手入れをした。未砂記もついできて手入れを手伝ってくれるというので連れて来た。

「うわっつ、なんてこった…」

「あゝ、大変だねえ…」

庭には池があつて、その池の水草が増えすぎたワカメのように池を埋めつくしていた。

「あゝ、俺のビオトープ計画が…」

「草取らなきゃね…ってか優成ってそうゆづの好きなんだあ」

「うん。小さい頃からの趣味」

ビオトープとは簡単に言えば昆虫などを含む動植物が共存する人工的な空間の事。庭に池を作ったり周囲に木を植えたりして自然に近い空間を作るのだ。

俺は小さい頃から自然に興味があり、この庭のビオトープはここに

引越してきた小学三年生の時から作り上げてきたものだった。

この池からは春にはオタマジャクシが泳ぎ桜が咲く頃にヒキガエルになったり、初夏にはオオシオカラトンボやヤブヤンマといったトンボが飛び立ってゆく。

水草が増え過ぎると良くないのは、そこに棲む生き物の身動きが不自由になったり、植物は光合成もするが呼吸もするので、外の酸素が入りにくい水中では二酸化炭素の濃度が高くなることもあるからだ。実際に密室で大量の植物を置き、そこで一晩過ごした人が酸欠で死亡したという話も聞いたことがある。

「ねえ優成い、ここって決まった種類の生き物が棲んでるんだよねえ？なんで種類が決まってるの？」

「ああ、それはこの環境が変わってないからだよ。この庭には木があるから池の周りに木陰が出来る。例えばオオシオカラトンボは周りが木で囲まれていて泥で濁った水質の池を好むんだ。この池はその条件を満たしているからオオシオカラトンボは毎年ここに来て産卵する」

「へえ、じゃあ普通のシオカラトンボは来ないの？」

「ああ、普通のシオカラトンボは開放的な池が好きだからなあ。同じ池でも日向にはシオカラが居て木陰にはオオシオカラが居たりするんよ」

俺が小さい頃からこういうのが好きにだったきっかけは生まれ故郷の田舎町で虫を追い掛けている時に出会った同じ年くらいの少女がきっかけだった。それがそれはまた別の話で。

「そういえば最近あんまりトンボ見ないね。」

「ああ、住宅地が増えたり温暖化の影響もあるのかな」

末砂記の言う通り、子供向けの図鑑には何処にでもいる普通のトンボと記されているシオカラトンボすら滅多に見かけなくなった。それにトンボだけじゃない。ヒグラシの声もあまり聞かなくなったしアマガエルも見なくなった。環境は目に見えるくらい確実に悪化している。

「環境悪いんだね。私もなんか出来る事あつたら協力するよ」

「サンキュ。まあ出来る事っていったら例えば紙は燃えるゴミに出さないで古紙回収に出すとか身近な所かな」

「あ、それならやってるよ！」

「おお。じゃあこれからもな」

「はいー！」

進学とか就職とか進路の事も大事だけど環境も大事だ。環境対策にはよく言われるリサイクルとか節電等の他に地元で収穫された農作物を買う等もある。地元の物を買えば遠方から物を運ぶために使われるトラック等から排出される二酸化炭素の量が少なくなるからだ。

夕方、庭の手入れを済ませ、俺たちは末砂記の家に戻った。そして夜、いつものようにピースをテグスに一粒通し一日を終えた。

第三十話：優成のプチ環境教室（後書き）

長く続いた末砂記の話が一段落した所で今回は優成の趣味の話をお

ひとつm(——)m

でも一応今後の展開に繋がる(?)ネタを撒いておきました(^^);

環境を大切に…

第三十一話：カミナリイルカ

夏休みもあと残り僅か。埼玉の友人二人と遊ぶため東京に向かっていた。埼玉県の人は東京で遊ぶのが当たり前らしい。神奈川に住む俺に埼玉在住の友人が居るのは、さいたま市内に親戚が住んでいて、幼少期に公園で遊んだのがきっかけだった。

遊ぶのは遊園地。俺と二人の合流地点となる駅に集合。オタちゃんに電車の時間をきっちり調べてもらった俺は集合時間十五分前に到着。

だがそんなのは無駄だったようだ。二人が到着したのは集合時間十五分後だった。

「わりい。服選んでたら遅れた」

「悪いね。一服してたら時間を忘れちゃって」

なんなんだコイツら…

ここで呼び名を紹介。服選びで遅れたのはロッカー。ハードロックが好きだからだ。一服して遅れたのはスモック。スモーカーではあまりにダイレクトなので少し言い換えてこうなった。

遊園地に着くと、とりあえず園内をフラフラし、ベンチに座って一休み。

「ねえねえ、この格好なら大学生に見えるよねえ？」

ベンチ横の灰皿を見つめ、スモックが大学生に見えるよねえ？など
と言い出す。それはつまり…

「おい優成い！あっち行こうぜ！」

「ああ、つてか今は俺アイツの事知らねえ」

「ねえちよつと何それ？」

こんな所で検挙されたくないのでスモックと少し距離を置き俺と口
ツカーは缶コーヒーで一服。スモックはやはりマルメン（煙草）を
ポケットから取り出した。

それにしても吸ってる時のアイツって自分の世界に入り浸ってるよ
なあ…

同時刻、神奈川の末砂記の家

「優成のビーズもオタちゃんのビーズも大分増えたなあ。オタちゃ
んは夏休み一杯で終わりにしてもいいかな」

そろそろビーズの秘密、話してもいい頃かなあ。でも良かった。二

人とも。前に比べれば…

夕方、優成たちが遊ぶ遊園地

「なあ、何回乗るんだよ…もう疲れた。肩凝った」

「うるせえなあ！これのために来たんだろ！？」

「そつだそつだあ。一服したらまた乗ろう」

俺は絶叫マシンの乗りすぎで疲労が蓄積していた。もう十一回乗っていた。そしてスモックよ、君は一日何本吸うんだ？

「じゃあ最後の一回行こうぜー！」

マシンは出発すると目の前の勾配をゆっくり上昇してゆく。

「ああ、まただ、もういい加減にしてくれ…」

頂上で止まりそうなくらい速度が落ちる。

ああ、きた…目え閉じよう…

グアアアアアア！！

そして地に落ちる雷の様に一気に地面近くに下っていく。

「ぶほうはああああ！！ぐぼあつ！！！！」

中年オヤジが痰を吐く時の様な俺の絶叫っ!!と言っより凄まじい風によって出てしまった声…

身体が宙に浮くう!!何度乗っても慣れないいいいっ!!

「Mother fucker yeah!!うほっ!!」

「うわわわい!!」

二人とも楽しそうだなあ…

急降下の後、イルカが海を泳ぐ様にループを繰り返したマシンはようやくコースを一周。絶叫尽くしの長い時間がようやく終わりを告げた。

だが再び俺を悲劇が襲うなんて、この時は思っていなかった。

その後は食事をしながら男同士の雑談を楽しんだ。

「じゃあな!!」

「じゃね!!」

「じゃあまた」

遊園地を出て朝集合した駅で解散。

「あ、もしもオタちゃん?いま秋葉原なんだけど、帰りの電車教えて」

「この時間なら通勤快速あるから、それに乗れば品川から大船まで三十分間ノンストップだから早く帰れるよ」

「おう、じゃあそれ乗るよ。サンキュー」

俺は言われた通りに三十分間ノンストップの通勤快速に乗った。三十分間ノンストップの…

うう、まだマシンの酔いが残ってる…電車が揺れるだけであの急降下の感覚が…

うわ、なんか目眩が…

電車は品川を出発…

やべえ気持ちわりい…そうだ！ここは十五両目！車両の端っこにトイレがついてる！

「す…すみません、失礼します…」

俺は通勤客で混雑する車内をトイレという希望に向かって人と人の間ノッソノソ進む。

あれ…？

ぬわあいつ！トイレが無いっ！！ここ十五両目だよな！？

オタちゃんにメールだ！！

「その通勤快速は新型車両だから十五号車にトイレはないよ。トイレはその位置から六十メートル先の十一号車までないよ」

六十メートル！？この揺れる人混みを！？

顔が青白くなるのが自分でも分かる。

なんとか三十分我慢して次の駅で降り、色々吐き出した俺は、なんとか末砂記の家に辿り着いた。

「おかえりんりんすずむし優成い〜！！どうしたの？なんか顔色悪いよ」

もう末砂記の変な挨拶に突っ込む気力もない。

「ああ、まあ色々あって…」

「絶叫マシーン乗りすぎたんでしょ？」

「はい」

「うわっ、ゲ○臭い!!どっかで吐いたでしょ」

「あ、はい、吐きました…」

最悪だ…あんな酷い目にあって最後にはカノジョにゲ○臭いとか言われた…まああの二人に、特にスモックに関わるとロクなことないのは分かったた…アイツにMP3貸したらイヤホン壊されたり、二年前の夏、池袋で遊んだ時は夕方地震があつて電車止まって帰れなくなったり…まあそれでも付き合いが途切れないから友達なんだけど…

「お疲れ様！優成のことだからきつと嫌になつても断れなかつただよね？お人よしだから」

「ああ、まあな」

ふっ、ふふあゝ!!女神さまあゝ!!なんてお優しいお方なんだゝ!!あなたと付き合つて良かったよゝ!!

「涼しい顔しちゃつて、ホントは嬉しいんですよ？素直に喜びなよ！それにゲ○臭い時に涼しい顔されてもカッコ良くないよ！」

「う、うるせえ…」

なんとか無事(?)に一日を過ごした俺は、今日もビーズをテグスに一粒通した。

第三十一話：カミナリイルカ（後書き）

今回の話は私の実体験に基づくものが多々含まれています。絶叫マシーン乗りすぎて帰りの電車で感覚おかしくなったことがあります。た（、、；）

第三十二話：Now and then

俺にとって人生最後であろう四十日以上の夏休みの最終日となる九月二日。俺と末砂記は前々から予定していた東北へ旅行することに。そこは俺の思い出の地なのだ。

電車とバスを乗り継ぎ、幼い頃はかなり時間をかけて来たと思っていた思い出の地には意外とあっさり到着。目の前には大きな湖が広がっていて、冬には白鳥が飛来する。

「ここが優成の思い出の場所？」

「ああ、ここから眺める磐梯山ばんたいさんは最高だ」

「へえ、でもなんでここが優成の思い出の場所なの？」

「ああ、俺のバアちゃんがこの近くに住んでて、まあ幼稚園の時に死んじゃったんだけど、その頃よくこの辺で虫追い掛けてたんよ」

「ふうん」

「それが？」

「この近くって、確かヒタッチのおばあちゃん家がある所じゃない？近くにガラス館とかお札の人の記念館あるってヒタッチ言ってたし……」

気になったので大甕に写メを送ってみた。

ブルルル！

大甕から電話だ。

「もしもし」

「もしもし？二人ともそこに居るの？」

「ああ、思い出の地を散策してるんよ」

「宮下の思い出の地？ここが？まあいいや、実は私もこつち来てるんだ。良かったら家に来なよ！道は分かるよね？」

「いや、知ってる筈ないだろ」

「えっ、小さい頃遊んだじゃん」

「はい？………あっ………」

「やっぱり忘れてたんだ。虫の事いっぱい教えてあげたのに」

いま、俺が生き物を好きになったきっかけをくれたのは大甕だったことが分かった。というより思い出した。彼女のバアちゃん家は俺のバアちゃん家の近くにあり、夏休みは二人ともこちらに来ていたのだ。お互い住んでいるのは同じ県だが町が違ってから顔を合わせるのはここだけだった。

そんなこんなで大甕のバアちゃんが住んでた家に到着。

「あの女の子って大甕だったんだ」

「そうだよ。私は中学で会った時にあの時の男の子って確信してたけど」

「優成ひどい。小さい頃から中学生になるまで会ってなかったとはいえ友達の事忘れるなんて」

「ああ、すみません。名前が浸地ひたぢだからもしかしたらと思ってたんだけど、ここは母方の家で苗字違うから確信なかったんよ」

「ハハハ、実は私もさっきの電話で確信したんだ。お互い聞き出しにくかったんだね」

結局、未砂記と二人きりの時間は短かったが、あの女の子がこんなに身近に居た事を確信出来た。

「そっか。あのバアちゃん亡くなったのか」

「うん。七年前にね」

あのバアちゃんはいいい人だった。それは孫でない俺にも分かった。大甕に玩具を沢山買ってあげたり、どこかに連れて行ってあげたりはしなかったけれど、ただ一緒に畑で野菜を収穫したり、料理を作ったりあげたり、サイダーと一緒に飲んだり、そんな些細な事が何年もたった現在でも良い思い出として鮮明に残っている。

なぜそんな事が分かるかというところ、それはこの近所に住んでた俺のバアちゃんもそうだったからだ。亡くなったのは俺が幼稚園の時だ

が、それでも畑でまだ緑色のトマトと一緒に食べたり、豆を摘んだり、それが楽しかった事をまだ思い出せるからだ。

「いいなあ、二人とも」

「えっ？何が？」

「あっ、ごめんね末砂記」

「ううん、いいよ。勝手に羨んでるだけだから。優成にはこの事話してなかったね」

末砂記の話によると、彼女の祖父母は父方の祖父は会社の社長で、祖母は近所の仲間との交流で構ってくれた事は殆どなかったという。何かあったとしたら、正月の堅苦しい親族の集まりの時にお年玉をくれただけ。母方の祖父母は一度も構ってくれた記憶が無いという。

「それに、家から湖が見えるって所も凄い！」

「ああ、しかも冬は正に白鳥の湖だ。こたつで蜜柑食べながら白鳥眺めるってのもいい」

「そうだね。でもこたつから出たら凄い寒いけどね」

「そつえば家の人はどうしたの？」

「出掛けてるよ。二人が来る事言ったら今夜は御馳走だった」

夕方、俺たち三人は同じ墓地にある俺のバアちゃんの墓と大甕のバアちゃんの墓に行った。

そこにバアちゃんがいる事はない事は去年の大晦日から全国的に有名になったが、ここに来ると、自分のメッセージが他所より伝わりやすい、向こうの世界へのアンテナのような気がした。

「あつ、紋白蝶だ！」

「そういえば末砂記って、虫好きだよな。毎日虫をネタにした変な挨拶するし」

「うん！ヒタツチに小さい頃よく虫の事教えてもらったから！」

「そうだね。女の子なのに公園でウスバキトンボ追い掛けたり大きいアオムシ捕まえてアオスジアゲハ羽化させたりしたよね」

「ああ、やっぱり末砂記がそういうの好きになったのは大甕が吹き込んだからか。結局俺ら二人とも大甕から吹き込まれたんね」

ウスバキトンボ

漢字では

「薄羽黄蜻蛉」。夏頃に校庭や空き地などに群れて飛翔するオレンジ色の蜻蛉。春、沖縄から飛来して本州で子孫を増やし、秋には孫や曾孫に当たる世代が成虫になるが、寒さに弱いため本州の個体は幼虫、成虫共に冬になると全滅する。そして再び春になるとまた飛来する特殊な蜻蛉。

アオスジアゲハ

漢字では

「青筋揚羽」。揚羽蝶の一種で割と小さい。瑠璃色と少し茶色っぽい黒の羽を持つピュラーな蝶で、市街地でもよく見かけたが近年

あまり見なくなつた。

その日の夜

「今日は浸地ちゃんの友達さ沢山来たから賑やかだあ。優成君大きくなつたなあ」

「おばさんお久しぶりです」

「はじめまして、仙石原末砂記と申します。浸地ちゃんとは小さい頃からの友達です」

「末砂記ちゃんさあなたの事かあ。浸地ちゃんから聞いてるよ。ベっぴんさんだべえ！」

「いえいえ、私などまだ子供同然ですよ」

末砂記とおばちゃんの会話は長々続いた。

ガラガラガラ

「こんばんは」

「あつ、お父さんとオタちゃん！」

オタちゃん！？なんでこんな所に？

「あらあ、二人ともお帰りなさい」

大甕親子とオタちゃんは昨日からこの家に泊まり込んでいたらしい。

大甕の父親とオタちゃんがここに来てたのは、近くを走る古い電車のさよなら運転があったかららしい。二人とも鉄道ファンなのだ。娘の浸地はこの機会に墓参りでもしようと思っについてきたようだ。

夜九時過ぎ、家のおじちゃんが日曜出勤から帰って来て家の中は宴会状態になっていた。

「男つてのはなあ ㊦ だべえ!!!」

「おっしやる通り!!! ㊦ !!!」

大甕の父とおじちゃんはすっかり漢おとこの世界に入り浸っていた。もはや何を喋っているのか分からない。

こんな雰囲気は俺にとって、新鮮で胸が躍った。酒を入れたせいか、この空間がどこか幻想的に映っていた。明日からまた現実が戻って来ると思うと、かなり憂鬱だ。

明日から...?

「あっ...」

「どっしたの優成？」

「明日から学校だ」

「あつ、そういえば。宮下よく思い出したね」

「もういいよ。夏休みが一日増えたと思えば。それより今日は455系の送別会だ」

オタちゃんがそんな事言うなんて…

455系

この地方を走っていた電車の車種。

「ああ、でももう電車終わったから帰れないべえ、明日は学校おさぼりだあ」

そういえば今日はビーズ出来ない。末砂記は必ず一日一粒ずつと言っていたが…

「ねえ優成、オタちゃん、今日は楽しかった？」

「ああ、最高だったよ」

「僕も。455系が引退しちゃったのは残念だけど、いいお別れが出来た」

「そっか。よかったね！」

「でさ、今日はビーズやんなくていいの？」

「あつ、そういえば僕も」

「うん、いいよ。今日は特別ね！あつ、オタちゃんはそろそろビーズ終わりにしてもいいけど、どうする？」

「えっ？ん〜、仙石原さんが迷惑じゃなければ続けたい。習慣になっちゃってね」

「分かった！じゃあ今まで通りにね！」

「なんでオタちゃんは終わりにしてもいいのに俺は駄目なん？」

俺が問い掛けると、彼女は一瞬困った顔をした。

「そっかあ、じゃあ優成近うちに教えなきゃね。ビーズの意味」

ほほう、やっぱりビーズには何か意味があったのか。

第三十二話・Now and then(後書き)

更新遅れましたm(´▽`)m

おじい初の小説となるこの物語ですが、ビーズの意味のヒントをちらつかせながらいよいよ佳境に突入です。

第三十三話：聖なる夜に

進路の事でドタバタした秋がいつの間にか過ぎ、季節は冬。俺も末砂記も進路が決まったので、クリスマスはフリーダムだ。クリスマススのブルースでも一曲作ろうかな。

俺の家の改修工事も終わり、三学期が始まる頃にはまたアイツを除く家族との生活が始まる。

「ぐはあく、マニュアル難しい」

俺は就職する事になり、早めに車の免許を取らなければならないので、ほぼ毎日教習所へ通う日々が続いていた。

「男はマニュアルだとかクールに言ってたくせにい」

「うぜえ！！ このオートマ女！！ 見てろよ!？」

「何を見てればいいのか分かんないけど、良かった」

末砂記はホツとした笑顔で言った。

「何が？」

その表情で俺に目を合わせた。

「優成さあ、前より明るくなったよね」

「え？ そつ?」

「うん！」

そう言われてみればそうかも知れない。少し肩の荷が軽くなったような感覚はある。本当なら今頃、社会人になるにあたっての不安と憂鬱で一杯であったろう。まあ全くないといえば嘘、というより大アリだ。二年前のクリスマスにも思ったけれど、末砂記には人を元気にする力があるのだろう。

今日はクリスマスイヴなので二人で横浜に来ていた。ランドマークの展望台は六十分待ち、プラザでのコンサートはギャラリーが多過ぎて出演者が見えない。立ちっぱなしで次第に腰が痛くなってきた。

ただ穴場の夜景スポットを知っていたり、たまたま通り掛かった所でやっていた大道芸を見れたので、それなりに楽しめた。

そして俺は思っていた事を口にした。

「ぐはあゝ、腰痛い」

末砂記は呆れた表情をした。

「疲れるの早いなあ」

「でも楽しかった」

末砂記と付き合う前の俺の生活といえば、ただ目の前の課題に追われ、その課題が終わってもまた次の課題が来る、その繰り返しで毎日が憂鬱だった。課題は今でも山の様にあるが、少し力を抜いても良いと彼女が教えてくれた。

末砂記の家に着いて、ビーズを一粒通し、さつさと風呂に入り、窓際の庭に出れる、ちょうどクレンシちゃんの火燵こたうのある部屋リビングのような間取りの部屋にソファと横百五十センチ、縦五十センチ程のテーブルがあり、ここで少しワインを入れる。こんな同棲生活も、そろそろ終止符を打つ。

「ねえ優成、今度二人でクリスマスを過ごせるのはいつになるだろうね」

「そうだ、俺は来年就職してしまう。クリスマスをこうして二人で過ごせるとは限らない。そう考えると淋しい。俺がこんな気持ちになるなんて、彼女の存在は、いつの間にかこれほどまでに大きくなっていった。」

「さあな、でも来年も一緒に過ごしたい」

何かもつとつまい言葉はないのか？キレの良い頭脳も語彙力ごいりょくもない俺には、これが一瞬で思い付く精一杯の台詞だった。そもそも一瞬で返事をする必要もない、少し間を置いても構わないのだから、気持ちが焦ってしまった。

「うん！ そうだね。私も一緒にいいな」

今宵はクリスマス、未成年なのにアルコールが体内を駆け巡っている、部屋は薄暗い、そんな条件が揃ってか、まがい物の俺も素直な気持ちになれた。すると俺の体は自然に末砂記に寄り添い、抱き寄せていた。

「優成い、二度目だね、こうしてくれるの」

「ああ」

一度目は、末砂記が俺に気持ちを告白してきた時、衝動的に抱きしめたことがあった。詳しくはWEBで。いや、WEBには変わりないが第九話で。

「Merry Christmas 末砂記？」

「Yes, Merry Christmas 優成、でも、初めてだから優しくしてね」

同意を得た俺は、末砂記が纏っている衣を、詳細は公開出来ないが抱き合いなながらゆっくり剥がしていった。彼女の華奢みやびな二の腕は、もう少し強く抱きしめたら壊れてしまいそうな感触だった。

やべえ、可愛すぎる。

末砂記の一連の動作は初めての割にかなり積極的だった。

「あゝあ、傷付いちゃった」

18で傷付いてないのは珍しいと思う。

「お前も楽しんでたろ？ お陰で首筋と下が」

「だって、ずっと好きだった人にやっと抱いて貰えたんだから嬉しいじゃん？」

そっか、コイツ、ずっと俺の事を。

俺なんかの何処が良いんだか。

「ねえ、優成は今、幸せ？」

重なり合ったまま天井を見つめる末砂記が、小さな谷間に埋もれて何も見えない俺に言葉を掛けた。その時少し彼女の鼓動が早くなつた気がした。

「ああ、今までない程に」

幸せな事ばかりとは行かない事は容易に想像がつく。またきつと何かが襲つて来るのだ。でも二人ならそれと闘い、乗り越えられる。

「続けよう、ずっと」

「うん！ 優成の事、幸せにするよ？」

それはこっちの台詞だ。情けないな、俺、女の子にそんな事言われるなんて。

「俺も、末砂記の事、幸せにするから」

末砂記は微笑した。

「私は今でも十分幸せだよ？」

「じゃあもつと幸せにする」

すると末砂記はしばらく黙り込み、滑ったかな？とか考えて気まず

くなつたと思つた時、その華奢な腕で力いっぱい、けど少し力が抜けた感じで抱きしめられた。ふと顔に目をやると、いつも元気な彼女から、やや大粒の涙が溢れ出ていた。

第三十三話・聖なる夜に（後書き）

クリスマスに更新する予定だったのに、、；)

「Christmas in Australia」の製作で目一杯でしたm | | m

という言い訳。

第三十四話：宮下優成の年末

年末という事で、俺と末砂記は家の大掃除をしていた。俺は脚立を使い、外壁や窓を磨き、末砂記は部屋を掃除。昨日は雨が降って足場が悪い。

不安定だなあ、足場がキュッキュいってる。滑りそ…

キュウイン！

「ぬほあっ!?!」

カンツ！ズポツ！ドスン！

「とうおああ!?!……………痛い、ケツ打った」

足を踏み外して脚立から滑り落ちた。怪我はしてない。

「うわゝ、大丈夫?」

見てたのかよ…またダッセエ所見られた…

「ああ、まあ…」

「それにしても面白い落ち方したねえ!!」

うわゝ、嬉しそゝ、コイツ、俺の不幸を喜んでやがる、オマケにムフフみたいな目で見やがって…クツソゝ、覚えてる?

「まあ落ちた所で一段落して、お昼にしよう?」

「はい」

昼食の後、俺は再び窓ガラスを磨き、それを終えて末砂記と家の中の掃除を始めた。引き出しの整理をしていると、

「優成へ」と語尾にハートマーク付きで緑のラメ入りペンで宛名書きしてあり、またもハート形のシールに封をしてある横長で水色の封筒が出てきた。末砂記から俺に手紙?

「末砂記い、これは?」

「うわあああつ!!まだ見ちゃダメ!!」

何なんだ?急に血相変えて…ラブレター?

うおつと!今度は日記帳発見。意外とマメなんだ。

「じゃあこの日記は読んでいいか?」

「ああ、それならいいよ」

あっさり承諾。早速開いてみる。

「今日から三年生!!高校生最後の学年でキノコ(宮下)と同じクラスになれました!もう二度とない告白のチャンス!!ふあいと!」

こんな感じで四月の新学期初日から始まり、現在までの記録がルーズリーフで綴られている。

整理を更に進めると、また一冊日記帳が出てきた。こちらは普通のキャンパスノートだ。

「あつ、これはちよつと…」

また少し焦った表情を見せ、閲覧を拒んだ。

「ああ、分かった」

「ごめんね」

「いや、俺の方こそ、引き出しの整理なんかしちゃって、悪かった。俺は風呂掃除でもするよ」

悪いなあという表情で謝る末砂記。誰にだって見られたくないものはある。

当然だが、例え恋人同士という特別な関係であつても、それを侵す権利はない。いや、権利とかそういう事ではなく、本能的に引く、というより理性が覗きたい気持ちを沸き立たさせない。それが人にして人という生物だろう。

その面に於いて俺は、自己が生きとし生けるものの中で『人』に匹敵、若しくはそれ以上の存在である事を証明していると思う。逆に言えばそれを抑えられない人、若しくはそこまでの発想に至らない人は、俺の中の定義では人とは呼べない、それに匹敵しない存在だ。一言で言えば、人間性に疑問を感じるところだ。

しかし、アリストテレスが唱えた

「全ての人は生まれながらにして知る事を欲する」というのがある

し、確かにそうかも知れない。『知る』事を欲しない限り、人類としての発展は望めないが、時には『知る』事を求めない、それも人類として内面的に発展へ導く術すべだと俺は思う。

知るべき所は知る、知るべきでない事は知らない、その双方を履き違えず、常に良い方向へと持って行こうとする事で、この世界はより発展し、均衡を保てる。しかし現代日本の場合、組織の偽りや隠蔽べいと言った『知らせないようとする行為』、マスコミの『知らせようとする行為』が互いに暴走し、これを保たせていないと言いつける自信が俺にはある。

末砂記の日記一つでこんなに色々な事を考え、しかも、最初に求めていた結論とは何か違うものに辿り着く俺。いや、結論など求めていないから最初とは違う方向にズレる。そもそも俺が考えていた事の主題は何だ？

主題は『知る』か…

結局、自分で暗中模索しながら『知る』事を欲しているようだ。

『目の前のそれを知ろうとしない事は、自分の別の気持ちを知ること』

これが結論。

ついでに、『知ろうとしない』事には大概、『面倒』という言葉をはらむ。

そんな事をボクツと考え、いつの間にか風呂場に移動し掃除を始めると、何やら鈴の音が聞こえてきた。

シャンシャンシャン

「じゃ〜」

久々の登場、ネコという名の猫だ。

「こんにちは〜」

「…」

シャンシャンシャン

俺が挨拶をすると、ネコは無言で立ち去った。

掃除を終えて近所のコンビニへ。

「あら、宮下さん、こんにちは」

俺に挨拶してきたのは、こちらも久々の登場となる石神井いしかみいさん。なんて礼儀正しい清楚で良い娘なんだ。

「こんにちは、石神井さん」

石神井さんは、俺が持つてる店内カゴを見つめた。やべ、そついえ

ばコンドー 入ってる…

「あつ、これ、私も好きです」

少し頬を赤くしながらカゴの中身を見つめる。

ええーっ！？まだ傷付いてなさそうなのに、意外と？

「へ、へへえ、そうなんだ…」

「ええ、結構イケますよ？今までにない感じです」

結構イケる！？今までにない感じ！？

「へ、へへえ、じゃあ早速試してみよう…」

「ええ、是非！意外と合うんですね、ポテトチップスとマヨネーズ」

ああっ！そつちかあ！

石神井さんが見ていたのは、例の物の隣に置いた、ポテマヨチップスだった。こつちはこつちで意外だなあ、こつちの食べるイメージないから。

「あと、煙草は駄目ですよ？」

煙草？うあああっ！！

そう言っつて、石神井さんはカゴの中の例の物を手を取った。

「い、いや、こ、これはっ、は、ハイポだよ？意外とイケるんよ！？」

どうやら石神井さんは、例の物を煙草と勘違いしていたらしい。逆に冷や汗かいた…

「あっ！そうでしたか。失礼致しました」

石神井さんが隣に居るし、割と大きめの声でハイポとか言って誤魔化したせいで、レジに出した時、店員の目が異常に気になった。

末砂記の家に戻った俺は、色々あつて疲れたのでソファで昼寝。ネコが出入り出来るように少し窓を開けてあるので冷える。たまに枕元にネコが捕獲した鳥や虫が置いてあるので怖い。

…夢の中…

「コラッ、お前、ガールフレンドの下着盗んでブルセラに売ろうとしたんだろ？」

警察の取調室だ…俺が下着ドロ？いやまさか…

「何言つてんだあ、ホラ、俺の一本やるから、正直に言った方が楽だぜ？」

警官は俺にセッター（煙草）を勧めた。

「ああ、じゃあ遠慮なく」

未成年に煙草勧めてるよ。法を犯した者を取り締まる警官が…

「未成年の喫煙は駄目なのよ？」

警官は自ら勧めた煙草を自ら引つ込めた。そりゃそうだ。

「わあってるよ（分かってるよ）。それに、俺は生憎タバコはやらない主義なんでね。兎とに角かく、それでも俺はやってないから、アンタ、面倒なんでしょ？真犯人捜すの」

……

夢から覚めた…寒いので手を口元に置き、体が縮こまっていた。

うわゝ、なんか気持ちいいゝ、ズリズリ…

ん？何にズリズリしてるんだ？

俺…

「うわっ、優成、隠れてそんな事するなんて最っ低え…」

？

「現行犯だよ？」

現行犯？だからやってないって…それにあれは夢だろ？コイツ夢を
覗けるのか？

！！！！？

「いやっ、違う！違う！これはっ！？」

な、なんでえ！！？なんで俺の手の中に末砂記のピンクのパンティ
ーがあるのお！？

「このバカチン！！！」

ボコッ！！

「ぬぁふおあっ！！！」

末砂記に急所を殴られた俺はその場で疼くまいった。

シャンシャンシャン

「にゃ〜」

ネコが疼くまる俺の頭の上に何かを置いていった。

「あつ、そういう事かあ!!ごめんね優成い」

ネコが置いていったのは俺のトランクスだった。つまり、末砂記のパンティーを置いていったのも多分コイツだ。

「ごめんじゃ済まねえ…」

急所を殴られた時の痛みは相当な物だ。球体にジワジワ響く…

「でも、パンティーでズリズリしてたのは事実だよな？」

あつ、そういえば…

「いやそれも違う!!寝ぼけてて!!」

ポコッ!!

「どぶうあああ!!」

「ゴメン、今のはノリでやった」

テヘへって顔しやがって…こっちがどんなに辛いかわかってるか？

「お、覚えてる…」

そのまま暫く、情けなく縮こまり、三十日、晦日の夜を迎えた俺だ
つた…

明日はいよいよ大晦日。Oh! 味噌か…

ネコのために窓を開けているので、外の冷たい風が部屋に入り込む、
そして、自ら心まで冷やした俺だった。

今宵もテグスにビーズを一粒通す。

第三十四話：宮下優成の年末（後書き）

気が付けばもう年末。

作中の、ネコがパンティーを加えて来たのは実話です。。。。。；；；

第三十五話：晦日と大晦日（前書き）

2007年12月30日（日）、21時30分頃～同年12月31
（月）の夜までの話です。

第三十五話：晦日と大晦日

12月30日、みそか晦日の夜。俺は未砂記の部屋でビーズを通して一階のリビングに戻ると、未砂記が涙目になっていた。

ああ、なるほどね、俺の胸にもジンジンくるよ。

未砂記はレコード大賞のコブクロの曲を聴いて涙ぐんでいたのだ。これを聴いて泣ける人は本質的に優しい人、だと思っ…。

そういえば未砂記の母親は、今どうしているのだろう。いや、未砂記の場合は、母親より、亡くなった姉さんを思い出して、それを曲の詩と重ね合わせているのかな。

「優成？ 死んじゃ駄目だよ？」

曲が終わり、涙目でこちらを見る未砂記は、ネコを膝に座らせ、ネコの肩に右手を添え、左手をソファーに指立て伏せの体勢で置きながら、この幸せな日々が続いて欲しいと切実に訴えてきた。

「ああ、でも未砂記が居なくなったら淋しくて死ぬかも」

うわっ、我ながら臭い台詞だ。ああ（クサイ）…

翌日、大晦日、今日も引き続き俺と未砂記は家の大掃除をしていた。こうもトラブルのない日常は、俺にとって決して当たり前とは言えない、非常に貴重なものだ。去年、家族と過ごした年末は、正

に地獄絵図だった。ああ、なんて幸せなのだろう。

午後、未砂記が家にオタちゃん、浸地ひたち、石神井さんしゃくじいを呼んだ。実は俺を含めたこの五人で卒業ライブに参加する事になったのだ。今日はそこで発表する曲を作る。軽音楽部の未砂記と浸地は勿論、他の部に所属しているオタちゃんや石神井さん、ほぼ帰宅部の俺でも参加出来るのだ。

演奏する曲数は二曲で、一曲目はロック、二曲目はジャンルは決めていないが卒業ソングにしようかと考えているが、まだ決定ではない。

「なあオタちゃん、ビーズの意味はもう聞いたんだろ？」

「うん、でも意味は仙石原さんから聞いた方がいいよ」

オタちゃんは就職試験の少し前、二学期の初頭頃にビーズの製作を終えた。同じ日から始めたのに一体どういう事だ？

「優成にもそろそろ教えてあげるよ。だからそれまで待っててね」

前にもそんな事を言われたような気がする。未砂記の勿体振りな解答に俺は、はあ、と気の抜けた返事をした。

「本当にそろそろ教えてあげるから溜め息ついてないで、先ず一曲目はどんな楽器を使うかとかみんなのパートを決めよう」

テーブルに耐ハイを並べ、会議は続いた。どうでも良い話だが、個人的には柑橘系のフレーバーが好きだ。しかしご存知の通り、未

成年の飲酒は禁じられていますよ。

「優成い、飲み過ぎだよ？ 健康診断で未成年なのに酒あんまり飲むなって言われたんでしょ？」

「ふあい、言われましたよ？」

！！
優成は酔い潰れたのでナレーションは私、未砂記に、ちえんじい

優成を除く四人で会議は順調に進んでいる。

「じゃあロックだからギターとベースは二人で」

「おう！ 分かってるじゃねえか未砂記い！ 時代はハードロックだぜえ！！？ ヘッヘッヘッ！！」

優成は頬を赤くしてヘラヘラと私を褒めた。コイツ、アルコール入ると人格変わるよな。

再びナレーションは俺に交代。意識がないうちにみんなは帰ってすっかり夜になっていた。時間は紅白歌合戦が始まる少し前だった。

「優成い、お風呂入りなよ。今年の汚れは今年の内ね！」

「ああ、未砂記はもう入ったん？」

「入ったよ！ 優成が爆睡してる間に。今から年越蕎麦茹でるか
ら、優成が出たら食べようね」

頭いてえ、酔ったんだ。俺また変な事言っただろうな？ 肝
臓弱るから酒は控えよう。

未成年の台詞じゃねえ。

「ぶはあ、酒の後の風呂は微妙だあ」

独り言で微妙な満足感に浸る。

風呂といえば、ここでの寝泊まりを始めた夜、ここに未砂記がと
か妄想してひっそり興奮してたなあ。未砂記が聞いたら変態だとか
思うだろう。でも大概の男子はそんな事を考えているのだよ。修学
旅行の時なんか、一人が言い出すと、ほぼみんなが同じ様な事を言
い出して盛り上がる。心のベールを脱いで、非常な迄の変態っぷり
を發揮するんだよな。群集心理って恐ろしいわ。

『群集心理』とは、例えば、そこに居る多くの人が誰かや何かに対
して共通の不満を抱いている時、その中の一人が文句を言い出すと
他多数の人もそれに続いて文句を言ったり暴れたりする時の心理状
態。

一言で言えば

「赤信号、みんなで渡れば怖くない」

俺は風呂に入ると、どうでもいい事を長々と考える癖がある。

さて、そろそろ出て、年越蕎麦でもいただくか。重い腰を起こして、俺は目眩めまいでふらふらしながら風呂を出た。

第三十五話：晦日と大晦日（後書き）

レコ大決まりましたね。今年もあっという間に終わり。歳を重ねる毎に一年が早く感じられます。

今年も汚い事が目立つ一年でした。来年は本当の意味で善良な人たちにとって、そして自分にとって良い年になりますように…

第三十六話：今年もよろしくね

今年は何の優勝か。

間もなく終わりを告げる2007年。紅白が終わった後の、かなり大きな音だが、静けさを漂わすあの除夜の鐘の音に郷愁を感じる。今年は何に加えて雪景色だ。

俺の家では燃え盛る炎の中に人が飛び込む番組か、歌番組で新年を迎えていた。今年は何砂記の家で新年を迎える事になる。今回は歌番組で新年を迎える事にした。この歌番組は、正に新年のカウントダウンに相応しい番組名だ。

何砂記の家のテレビは地デジなので、今テレビに映っている時間空間と実際の時間に若干のラグタイムがある。

地デジだと、画像が綺麗で容量が大きいのか、少し遅くなる様だ。アナログ視聴者より少し、ほんの一瞬だけ遅い年明けを実感するのだろう。

年明けまであと一分を切った。ソファで寛ぐ俺の隣には、何砂記が内股でちょこんと黙って座っている。

おっ…

『今年』が残り十秒を切った時、何砂記が俺の右腕を捕まえ、自身の胸に寄せた。俺は敢えて反応を表に出さず、黙っていた。

「ごお、よん、さん、にい、いち…」

「わ〜い、あけおめえ〜、今年は優成と密着して年越したあ〜、今年もよろしくね?」

「あけおめことよろ〜」

こういう時にハイテンションになれない俺。

末砂記と迎えた新年。年越しそのものは何だか呆気ない2008年だったが、俺にとつて、きつと末砂記にとつても一生忘れない瞬間になるだろう。この瞬間、さつきまで『今年』だった2007年は『去年』になった。

やっべえ、眠くなってきた…いつもはこの番組が終わる迄は起きてるのに…

このまま末砂記に寄り掛かっちゃおうかな…

いや駄目だ、このまま寝たら初日の出が見れなくなる。

「優成い、眠いでしょ」

「ああ、」

日頃から眠そうな顔してる俺が本気で眠いのをよく見破ったな。

「やっぱり、でも寝かせないから」

少し強気な口調だ。

「いや、まあ寝たくはないんだけど……」

はふっ…

「っ！……」

何を思ったか、末砂記は急にキスをしてきた。その場のノリで末砂記の左肩甲骨を押さえて抱き寄せ、舌を絡めてみる。それが息継ぎをしながら何分間か続いた。

「目え覚めた？」

そう言つて、末砂記は俺の表情をうかがった。

ああ、それが狙いか。

「覚めたかも、その先はダメ？」

すっかり目が覚め、下の方は異常に元気だ。

「その先やったら疲れて寝ちゃうでしょ？」

「はい」

「あつ、ちよつと部屋行つて来るね」

末砂記は何かを思い出したようだった。

何だか訳分かんない年明けだなあ…

「あつ、ちよつと部屋行つて来るね」

末砂記は何かを思い出したようだった。

何だか訳の分かんない年明けだなあ…

つてか目覚めさせるためにキス？あの昔話の逆バージョン？まあ意識はある時だったけど…

それにしても軽率なキスだなあ、いや、末砂記は一見ただの馬鹿で無駄に騒がしい女だが、芯は俺よりずっとしっかりしている。きつと彼女なりの理由はあるのだろう。

………

暫くテレビを眺めながらボツとしてると、いつの間にか末砂記が自分の部屋から戻っていた。

「優成い、年賀状あげる」

さりげなく未砂記が差し出したのは、大掃除の時に俺が引き出しから見つけた、ハート形のシールで封をされた手紙だった。

第三十六話：今年もよろしくね（後書き）

あけましておめでとぅございますm（――）m

ただいま当作品では、お正月編をお送りしています。

お正月編が終わると、昨年七月から始まり、そこそこ長く続いたこの作品は、いよいよビーズの意味を公開する等、最終回に向けて動き出す予定です。

第三十七話：手紙と煩惱と初日の出

俺は末砂記から封筒入りの年賀状を渡された。年賀状という表現は合っているだろうか。早速ハート形のシールで施された封を解き、中の手紙を読む。

「うーう、なんか緊張するなあ、手紙って」

頬を赤らめながら、内股で両手を擦り合わせる末砂記。きつと一生懸命書いたんだなあ…

「じゃあ読まないでおこうか？」

「うーうん、読んで」

すると末砂記の頬は更に少し赤くなった。

「うん、分かった」

俺の右隣に座る末砂記の目線が不安定だ。

俺までおどおどしていても仕方ないので、少し遠慮がちに仕草で読んでみる。

“優成へ

あけましておめでとう!!今年もよろしくね。一緒に住んでいて年賀状を書くのもおかしいので、特別に手紙を贈ります。

そもそも、いま私たちが一緒に暮らしているのは、優成にとつてとても辛い事があつたからだよね。私から見れば、こんな表現は良くないかも知れないけど、男の子の優成にとつて、実の父親が尊敬できない事は、きつと辛くて、切なくて、悲しくて、どうしたらいいのか分からなくなつちやうのかな？だから、酷い生活を強いられた事だけじゃないから、余計に苦しいんだよね。

私との生活はどうかな？少しはキミを幸せに出来たかな？そうであれば、私はキミを好きになつてよかつた。ずっと好きでよかつた。

優成と同じ屋根の下で過ごすのは、冬休みが終わる前の日までだね。学校でも会えるし、家も住所が似通うほど近いけど、やっぱりさびしいよ。でも、二人で過ごしたこの日々のこと、絶対に忘れないでね。絶対だよ？

では、これからも引き続きよろしくね？

表向きは元気に振る舞うけれど、実は淋しがり屋の末砂記らしい文章だ。

それにしてもやつべえ、超嬉しい。ドキムネムネ（胸ドキドキ）…

「読み終わった？」

「ああ、でき、俺、末砂記に年賀状送っちゃつた。同じ家に住んでるのに郵便で」

そう言うと、末砂記が優成らしいなと言わんばかりにフツツと微笑した。俺は末砂記の決して馬鹿笑いしないこの表情が結構好きだ。

「ふ〜ん！そっか！可愛い優成い」

そう言われて頬が少し赤くなったのが自分で分かった。

「だ、だって、ねえ？」

俺は末砂記に何かに対して同意を求めた。その何かが、親しい間柄だからとか、それ以外の脳裏にモヤツとしか浮かばない何かなのかハッキリしない。

「優成目線がハッキリしなあい、カアワイイ！」

末砂記はウィンクして俺の目線を追い掛けてきた。更にやつべえ、もう我慢出来ねえ、犬だ、今の俺、犬だ。

気が付くと俺は末砂記を押し倒していた。ああ、駄目だ、俺、駄目だ。なんか舞い上がってる。息が荒い。

「初日の出見に行くまで起きてられる？」

末砂記は押し倒されたのに特に驚く様子もなく俺に問い掛けた。

「へえ？はあ、うん」

「じゃあ、いいよ」

それからは無我夢中で良く覚えていない。でも、俺が末砂記に被さ

つてから直ぐに彼女は痛みを耐え兼ね泣き叫んだのは覚えている。
クリスマスの夜とは違う、ただ痛みを耐えただけの涙。それで俺は
更に加速した。

俺、何してんだ…

馬鹿だ、俺、本当に畜生同然だ。ただ自分の欲求を満たすためだけに、その欲求の受け皿に未砂記を利用したんだ。それを未砂記は悲痛に泣き叫びながら、俺の汚い欲求という悪魔を必死に受け入れ解消してくれた。

何^{なん}なんだよ俺、未砂記に散々救ってもらって、本当に幸せにしてもらって、今度は俺が幸せにするって約束したのに、それを、それをこんな一時の欲求のために…

「寝ちゃ、ダメだよ？」

俺がだらし無く剥がした服を纏い、無惨な姿で、声を掠らせ、こんな俺と初日の出を見に行こうという意志を変えないでいる。

どう返せば良いのか分からない。言葉が見付からない。

少し黙り込み、ようやく俺は一つの言葉を見付けた。

「俺、一方的にこんな事して、末砂記のこと本当に幸せに出来るのかな？」

すると末砂記は急に柔和な表情になり俺に微笑んだ。

「馬鹿だなあ、私が魅力的過ぎるのがいけないんだよ？優成は何も悪くない」

そんな冗談で俺を許してくれた。この寛大さは見習うべき所だ。

「ごめん、本当に、もう絶対しないから」

「えへえ、襲われないなんて女としてやだ」

「じゃあ、適度に」

「そろそろ行くこう？」

辺りは少し明るくなっていた。初日の出を見るべく俺達は渚なみへ向かった。

「寒っ……」

外は寒い、砂浜はもっと寒い。それなのにサーファーたちは波乗りをしていた。そして六時五十二分、大勢の人が集まった湘南の海に、三浦半島の双子山ふたごやま辺りの影から丸い、オレンジの光が昇った。

「今年も良い年になりますように」

末砂記はその光に向けて祈った。

俺も心の中で祈った。

この幸せを続ける事が許されますように。

第三十七話・手紙と煩惱と初日の出（後書き）

ビーズの意味、何もなければ近日公開です。〇（><）〇

プレスリリース

この「いちにちひとつぶ」に代わる新作の第2部分を現在執筆中です。この作品が終了するかしないか辺りで公開する予定です。良かったら読んでみて下さいませm（_）m

更に、「いきものがたり」に代わるホットストーリー小説も現在構想中です。

第三十八話：それは突然に

日曜日、冬休みは明日で終わり。それは末砂記との生活に終止符を打つ事を意味していた。半年弱の同棲生活は、俺にとって色々な意味での我慢と、この上ない幸福に満ちた生活だった。

末砂記の部屋に仕舞ってあるビーズ細工は、いつの間にかウジャウジャという表現が出来る程に増えていた。これは俺の家に持ち帰る今の俺には何と無くこのビーズの意味が推測出来るが、その結論に自信が無い。

ガクンッ!!

「こらっ！何ボーツとしてるんだ！」

「うわああっ、すみません」

俺は今、普通マニュアル自動車の教習中で、運転しながらあんな事を考えていたらコース内の上り坂でエンストを起こし、助手席に座る教官に怒られた。

そして車は坂を後退していた。

俺は咄嗟にサイドブレーキを引いて停止させた。この時、教官が助手席のブレーキを踏まなかったのは何故だろう。

マニュアル車なんて、トラックとかバス以外には殆ど無いよなあ。

末砂記みたいにオートマにしても良かったけど、高校のクラスの男でオートマの奴二人しか居ないし、教習所でオートマ用の原簿を持

つてる男は一人しか見た事ない。浮くのがやだ。典型的なブラッドタイプオチの思考だ。例えて言うならマニュアル教習は、平成の子供がそろばん塾に通ってる様な感覚だろう。でもそろばんは頭の体操になるか。

いや、でもそう考えればマニュアルだつてきつと何かの役に立つ筈だ。バスの運転士になりたいと思った時に大型二種が取りやすくなるとか？俺にはあんなでかい乗り物を人や自転車が飛び出す路上で動かす度胸ねえな。

小さい頃はスーピーとその仲間達が描かれたリクライニングシートにテレビ付きの豪華な路線バスに憧れた。あれが来た時は心躍ったな。いや、今でも元スーピーバスが来ると得した気分になる。普通のバスと運賃一緒だし。あれ？バスかっけえ？

いやでもあの頃はヘルポップ彗星が接近して、将来は天文学者になって新しい星を見付けるとかいう夢もあったなあ。あと高知県の中村に行つて昆虫学者になりたいとも思った。

子供はええのう、色々な夢があつて。あんれ（あれ）？そういえばオーストラリアに行つてカンガルー見るつて夢もあったなあ。でもそれは叶つたか。オマケに十分じゅうぶんに十回以上流れ星見れたし。

「ほああつちよつちよつちよつちよつ！！そこそこつ、そこ左つ！」

「あらま、すんません」

またボーツとしていた。

末砂記の家に戻り、ネコとソファアで庭を眺めながらウダウダする。

何度も説明するが、ネコという名前の猫だ。
あまり懐いていないが登録上の飼い主は俺だ。

しかし俺は本質的に動物が好きなので、近付いてもネコは逃げない。不機嫌だとたまに逃げるけど。ちなみに動物が嫌いな戸籍上俺の父親である正人まさひとが近付くと逃げる。

心が読めるのか、はたまたオーラを読み取っているのか、どちらにしるこの社会で汚された人間にとっては常識を超越したものだ。

逆に言えば、汚れ無きものには普通に出来る事なだろう。子供に幽霊や妖精が見えるというのも、子供には汚れが少ないからだ。実際に俺は五歳の時に自分や母親、妹が川の字に三つ並べて寝ている布団の上を右往左往しながら駆ける幽霊だかお化けを見た事がある。その時は金縛りやソイツに俺が起きている事を気付かれるのを恐れ、怖くて思い切り目を閉じた。

「可愛いね、ネコちゃん」

「うおあつー！」

びっくりした、背後に末砂記が立ってたあ。

「私、別に脅かしたつもりないよ？またボーツとしてたんだね」

「はい、おっしやる通りです」

末砂記と過ごす最後の夜。

まあ一概に最後とは言いが、俺は素直に淋しい気分だった。冬休みが終わり、社会人になって、これからは末砂記どころかネコを

含む家族や友達にすら会えない。俺が内定した会社は全国に支社があり、この界限にもオフィスがあるのでなるべく近くに配属して欲しいものだ。そんなこんなで色んな事を考え過ぎて不安で一杯だ。

俺は末砂記の部屋に入り、今日もテグスにビーズを通した。そろそろこのテグスも一杯になるから次のを用意しようかな。

「優成い」

「うわあっ!」

また背後で末砂記が俺を覗き込んでた。

「今度はなんか考えてたんでしょ」

見透かされていた。コイツすげえなあ、俺だけじゃなくて、他の人の心理も見事に見抜く。心が綺麗なんだなあ、子供並に。フツと笑みを零してしまった。

「あつ、何その人を見下すような視線。私の事馬鹿だとか子供みただとか改めて思ったでしょ」

ああ、これはいかにもって顔しちやっただから判るよな。

「流石ですねえ、末砂記様あ」

すると急に末砂記がハハハと笑い出した。

「やつぱり!?! 私天才だからね!?! 人の心を見抜けるのだよ。ホッホッホッ!?!」

俺の思惑通り、未砂記は調子に乗った。ホッホッホッと言う声は、漫画やドラマに出て来るセレブのオバサンの笑い声と言うより、まるで何かの博士のお爺さんのような声だった。

「優成？ビーズは明日まででいいよ。だから今夜抱き合いながら、ビーズの意味、教えてあげるね」

.....

えええつ...あああ...そのおおお...俺はどういう反応をすれば...？

思わず顔が引き攣った。

それはあまりにも唐突だった。近々教えてくれるとは言っていたけど。

第三十八話：それは突然に（後書き）

次回、いよいよあのビーズがどんな物なのか公開です（・・）

優成がボクツと考えてたスーピーバスを知ってる方、神奈川か東京南部在住の方ですね！？

第三十九話：明かされる謎、残る謎（前書き）

いよいよビーズの謎、公開です。

第三十九話：明かされる謎、残る謎

いよいよ告げられる。

このビーズがどんな物なのか…

早く知りたい、でも知ってしまうのが勿体ない。俺の脳内でそんな矛盾が交錯する中、未砂記は早速気になるそれを語り始めた。

「このビーズはね、テグスに通した日に起こった使用者にとって悪い事を吸収して、吸収した悪い事をその人にとっての幸福に変換するの。一言で言うと不幸の分だけ幸福が訪れる。でも幸福の概念は人それぞれだから、心が汚い人にこれが渡ると世界が自茶苦茶にな

「っちゃうかも知れない。」

だから私は絶対に信用出来て、尚且つ不幸に見舞われていたヒタツチ、オタちゃん、そして優成にこれを渡した。

一日一粒ずつなのは、ビーズ一粒の記録容量が一日だから。

わざわざテグスに通して手芸作品を作ってもらってるのは、それに通す事で使用者の不幸な記憶を読み取るのと、作品を一つ作り上げるとポーナスとして生きていく間に訪れる幸福が、その作品に使った粒の数の二倍訪れる事が保証されるの」

あれ？何だか単純で随分都合良くないか？と思いつつ話を聞く。

「ってか幸福を保証？確かに幸福感はあったが…」

「あゝ、質問です」

「なあに？」

「なんでそんな物を末砂記の姉さんが？」

「問い掛けると末砂記は、ぽかんと困った顔をした。」

「………きつと、姉貴は魔法使いだっただよ！そうそう！うん！きつと！」

うわ、何の根拠もねえよ…

「せめて姉貴をあつちの世界から呼べればなあ…でも幸せを享受するのって、人、もしかしたら動物にとっても永久の課題だよね。それを手に入れられるなんて凄いよ」

確かに、幸せというものには結論などないだろうし、感じ方も人それぞれだ。ただ一つ、結論があるとすれば、それは不平や不満、満たされない気持ちがあつて初めて成り立つもの。だろうか。

それを手にするのは、それ自体凄い事で、幸せな事だ。

そういえばこのビーズ、末砂記の姉さんの形見だとか。

「あとね、このビーズには禁忌きんぎがあるの。それは作品を仕上げる前に投げ出したり、壊したりする事。もしそんな事したら大変な事になるらしいから、最後まで頑張つてね。出来上がったら捨てたり故意に壊さなければ大丈夫だから」

「え？それだけ？」

他に何かあるの？とでも言いたげに末砂記は目を丸くして答えた。

「うん、そんだけ」

じゃあ暫く俺は幸せ？

でももし禁忌を破ったらどんな大変な事が？末砂記も何が起ころかは知らなそうだ。どのみち俺にとって不幸な事には変わりないだろうが。

念のため何が起ころか尋ねた。何度か本当に知らないの？と、念を押したが末砂記はそれでも頑かたくなに答えなかった。きっと教えられない程の何かがある。俺の勘がそう告げている。

第三十九話：明かされる謎、残る謎（後書き）

今回は無事にビーズを完成させたオタちゃんの話です。

実は新作小説を幾つか貯めていまして、この小説が終わったらどれを公開するか迷ってます（ノ・。・。）

第四十話：グロウアップ

小田博文^{おだひろふみ}、鉄道が大好きな高校三年生。みんなからは『オタちゃん』と呼ばれている。

僕の将来の夢は電車の運転士。だから進路は鉄道会社への就職を希望した。

そして見事に内定！！

それ以外にも、二学期に入ってから僕の悪口も聞かなくなったし、超が付く程の大企業に内定ということで、見直したという声も。大企業でも中小企業でも、同じ人である事に変わりはないのに…

その辺は奇妙だ…

それはともかく仙石原さんから貰ったビーズ万歳！！

と、いうわけで僕は夢に一步近付いた。ただ、これは僕の幸福の単なる序章に過ぎなかったのだ。

僕はその頃、ある女の子の事を考えたり、一緒に居ると何か胸が擦^{くすく}られる様に苦しかった。珍しい電車が来た時とは違う、沸き上がる感情ではなく、軽く胸を焦がされるような感覚。

あゝあ、なんか黄昏れちゃうなあ…

何だろう？

この浮かれた気分…

知りたい。

その正体を。

新型車両導入よりワクワクする…

「小田君！来たよ！コツニイサンサン！」

「あ、は、はいっ！あれが噂の！」

今日は大甕さんのお父さんと、『コツニイサンサン』の試運転を撮影に来ていた。この呼び名は僕らが勝手に呼んでいるだけ。

やっぱり電車もワクワクするや。

電車の撮影をした後、大甕さんのお父さんと別れ、僕は教習所へ行った。

教習所に着くと、仙石原さんと大甕さんが長椅子に掛けて談笑していた。偶然予約した時間が僕と同じだったのだろう。

「おっすオタちゃん！」

「おっ、撮れた？新型車両」

「どうも、撮れたよ新型」

僕は基本的に女子は苦手だけれど、この二人とは日常会話をすっかり平然と話せる様になっていた。

それは僕にとって大きな進歩だし、何よりこの二人の人の良さが僕を安心させているからだろう。

技能教習を終え、これから学科教習を受講する二人と別れ僕は教習所の出口の自動ドアに差し掛かる。

「小田君？」

この清楚な声は石神井さん？

一瞬でその情報を処理して振り返る。

「あ、こんにちは。石神井さんも教習だったんだ」

「はい、私は学科の方を」

清楚な容姿に女神のような笑顔でそう答える彼女に反応し、僕の心拍数は異常に上がって緊張してきた。この人と接すると今までの人見知りの緊張とは違う高揚がある。かと言って珍しい電車が来た時のものとも違う。この気持ちの正体が解らない。

「小田君、私、そろそろあの事言おうと思う。卒業試験が終わって自由登校になると顔合わせる機会なくなっちゃうから」

その言葉に一瞬戸惑った。石神井さんが重く受け止める必要はない

のかも知れないけれど。

「そうだね、じゃあさ、少しお茶しよう？」

自然とそういう流れになった。今までなら自ら誰かをお茶に誘うなどなかったのに。でも石神井さんの気持ちを考えると、少し話をしてみようという気持ちになった。

第四十話：グロウアップ（後書き）

オタちゃんにはモデルが何人か居たりします。モデルの一人は異性に全く興味なしのちよつと変わった人なのですが…

まあそれも一つの生き方ですね。

第四十一話：ROOT（ルート） それはあの夜から

夜、私は喫茶店で軽食をしながら小田君に相談に乗ってもらった。

彼とは同じ小学校に通っていて、高校生になった今でも当時の生真面目さはそのままで親身に話をしてくれる、私の中であらゆる面に於いて最も信頼出来る人となっていた。

「でも初めて聞いた時は驚いたなあ、そんな繋がりがあったなんて」「そうだよ。私も小田君がやってるって聞いた時はびっくりしたよ」

小田君や宮下さん、大鷲さんまでビーズをやっていたなんて。今回はみんな良い人のままで良かった。本当に良かった。

私が事実を伝えなければならぬ相手、それは小田君達三人にビーズを配った仙石原さんだった。

そう、仙石原さんよりも早く、ずっと早くビーズのセットを手にした。と言うより、私のあの時の出来事からそれが広がった。

あれには人を幸せにする力がある。それは既に三人にも知らされている。

私がこのセットを手にしたのは今から八年前の空気が乾燥して星が綺麗に見えた冬の夜の事。バイオリンの稽古を終え、帰宅途中に駅近くの路地裏をバイオリンの入ったケースを片手に、この場所の空気が夜の暗さが怖いので少し早歩きしている時だった。

「ちよつとお嬢さん？」

パイプ椅子に座り、机に水晶玉を置いた占い師らしき老婆が幼い私を呼び止めた。

「はい？」

私はピタツと立ち止まって老婆に視点を合わせた。こっちへおいでと手招きされるまま、私は水晶玉が置いてある机の前まで引き寄せられた。

「こんな時間までお稽古かい？」

「はい、バイオリンをやっています」

すると老婆は私に自宅の住所を書いて欲しいとメモ用紙をしわしわの中三本の指でテーブルに滑らせ私に差し出した。最初は知らない人に住所を教えるのは危険かもとそれを丁重に拒んだけれど、住所を教えてくれれば私や私の大事な人が幸せになれると言うので、何となく悪い人ではなさそうな老婆を信用して住所を書いてしまった。それ以降、私とその老婆に会う事はなかった。

数日後、私の元に宅配便でやや大きめの段ボールに入った差出人不明の荷物が届いた。箱を開けてみると、中には約二十センチメートル四方の蓋を被せるタイプの箱が幾つも入っていた。その箱のうち一つには小さな封筒に入った手紙がセロファンテープで貼り付けら

れていた。小箱を開けると中にはチャック式のビニル袋一杯に入っていた。ビーズとテグスが入っていた。

この手芸用品らしき物が何だか解らないので、とりあえず手紙を読んでみた。

手紙の内容は、この手芸セットで一日一粒ずつテグスにビーズを通して何か好きな物を作ると、一言で言えば、幸せになれるという非科学的で信じるに抵抗のある内容だった。しかしこும்書いてあった。このビーズ細工を作っている途中でそれを投げ出したり壊したりしたら、これまでにない不幸が訪れる事、もし誰かにそれをプレゼントして、その相手が悪人だと周りの人々や関係ない人々まで不幸になる。と。

第四十二話：幸福度上昇中

不思議なビーズを手にした私は半信半疑でそれを一日一粒ずつテグスに通していった。特に不幸な生活を送っている訳ではないけれど、きつと損をする事はないと思った。

この頃、私には中学三年生、受験生の従兄が居た。彼の名は川越勇かわこえゆう一。将来は医者になって怪我や病に苦しむ人々を救いたいと語る、本当の意味で『医者』になりたい学生だった。

ちようど私の家に来ていた彼に、少しでも夢に近付ければとそのビーズ細工のセットを一つ渡し、一日一粒ずつテグスに通すように伝えた。

「これ、何かのおまじない？」

「そう、勇一君がお医者さんになれるように」

「へえ、ありがとう。早速今日からやってみるよ」

私は彼が喜んでくれて嬉しかった。このビーズに効果があるかは定かではないけれど、これでもっと受験勉強を頑張ってくれば本当に夢を叶えられるかもと少し期待している自分が居た。

二月、私の元に吉報が届いた。それは勇一君が私の家に遊びに来た時だった。

「ありがとう。さやかちゃんのお陰だよ」

「うづん、きつとあのビーズのお陰だよ」

なんと、努力が報われたのか、彼は合格圏内とは程遠い高校に一般入試で合格した。これで彼は夢へ一歩近付いた。

四月、勇一君は高校に通い始め、そこで出会ったある女性むすめに恋をした。

：のだと思う。私の家に遊びに来るなりリビングのソファに置いてある座布団にニヤニヤしながら抱き着きウンウン言いながら左右に小刻みに転がっていた。

「勇一君、大丈夫？」

「大丈夫だよ。けどなんだかむず痒いんだ。胸やけしたのかな？こんな事今までなかったから自分でも何だか解んないよ」

勇一はニコニコしながら嬉しそう、いいえ、どちらかと言えば楽しそうに病状を訴えた。

「その病気、きつとお医者さんでも治せないよ？」

「大丈夫だよ、お、胸やけなら胃腸薬で治るから」

と言いながらもその後、日に日に胸やけは更に激しくなったらしいけれど勇一君が胃腸薬を服用する事はなかった。

そんな勇一君には後日、更なる幸福が訪れたのだけれど、その辺りから彼等の運命が大きく変わって行くのだった。

第四十二話：幸福度上昇中（後書き）

以前投稿した話の訂正など色々ありまして更新遅くなりましたm（
| |）m

第四十三話：人生大逆転

僕は医者を目指す高校一年生、川越勇一かわごえゆういち。僕が通う高校は全国平均から見てもかなりの難関校で、中学校の成績が5段階評価でほぼオール3だった僕にとつて、入学出来たのは、合格するために必死で努力はしたものの、奇跡と呼んで良いだろう。もしかしたら従妹のさやかちゃんから貰ったお守りのビーズのお陰だったりするのかもしれない。

その年の桜がすっかり緑になって陽射しを遮るようになった初夏、僕に『春』が訪れた。

同じクラスの仙石原絵里せんごくはらえりが気になって仕方ないのだ。彼女は学問に関して言えばあまり芳かんばしくない様だったが、長い黒髪と脛と眉を少し下ろして微笑むのを見ると、不思議な事に胸やけを起こしてしまうのだ。例えそれが自分に向けられた笑みでなくとも、これを一目惚れと言うのだろうか？

今までそんな経験がない僕にとって、こういった類の言葉は遣いづらく、その意味が合っているかすら疑わしい。

それから一ヶ月程経った六月の昼間。雨がしとしと降り注ぐ校庭を教室の隅、前から後ろからも三番目に配置された自分の机から見下ろし、一人悩み事も無くぼくっとしていた。

僕の長年の悩みと言えば、学校の学習について行けず、このままでは医者になる夢が叶えられないと焦る事だったが、高校に進学してからというもの、難関校に合格したという自信からか積極的に勉学に励むようになり、先日行われた中間考査の成績もトップとまではいかなかったが納得出来る結果だった。これならもしかしたら本

当に医者になれるかもと気持ちが始めていた。御利益だと科学的根拠のないものは少し疑うタイプの僕だけれど、さやかちゃんから貰ったビーズが本当に効力を発揮しているのかもしれないとそれを少し信じた。

放課後の進学補講を受けた後、少し居残って勉強をしようと守衛室を訪ね教室の鍵を警備員から受け取った。

茜色の空を眺められない夕方。

雨の日の誰も居ない教室の空気は昼間とは違った不気味さに加え更に重く、体全体の動きを制限されている様だった。雨の日は必ずと言って良いほど左足の膝と臍がずきずきする。

だから雨の日は憂鬱だ。

雨が降らないと僕らの生活が成り立たないのは分かっている。オーストラリア、ケアンズの民家にはほぼ必ずどこかに蛙の写真が貼つてあると昨年オーストラリアへの研修旅行に参加した先輩から聞いた事がある。そこに住む彼等は雨の日が好きだと本気で言うらしい。僕が雨を嫌うのは、恵まれているからだ。日本の関東地方の様に適度に雨が降ると言うのは幸せな事なのだ。

僕は勉強中でもついついそんな事を考えてしまう。そこに誰か話し相手が居たならば平然とそれを口にする。大概の人はそれを聞き流すから結局のところ自己満足。中学まで成績が悪かった上、クラスで少し浮いた存在であった原因はそんな所にあるのだろうか。今となっては『浮く』事は無くなったのだが。

紙パックのピクニックコーヒを傍らに勉強を始めてどれくらい経

つだろつと左手の時計を見ると18時15分。始めてから45分経過していた。最終下校の19時まで残り45分。ちょうど半分、これから後半だ。ストローで舌を潤す程度にコーヒーを吸い上げ、甘みと微妙な苦味が口に広がった時、ピューツ、と、リニアエンジンの教室の扉が開く音がした。鍵を開ければ店の様に縦に長いボタンをタッチしてドアを開閉出来る仕組みだ。

「やっぱり居たね」

なんと教室に入ってきたのは仙石原絵里、まずい、心拍数が上昇して胸やけがしてきた。勉強に集中出来ない。でもこれは嬉しい妨害と言っべきか？

何しろ教室で気になる相手と二人きりなのだから。

「うん、やっぱり居たよ」

僕が教室で下校時間まで一人で勉強しているのはクラス内では有名だった。他の生徒は進学補講の後、予備校に行く者が多い。きつと予備校でも補講と同じような内容を学習させられるのだから。だから教室に残って勉強しようだなんて発想が浮かぶのは僕くらいだ。家に帰るとテレビに目移りするし、ここのほうが静かで集中出来る。

「凄いなあ、川越君は。沢山勉強してるから成績いいんだよね？」

私なんか勉強しようとする頭が重くなっちゃって」

「僕もそうだった。でも親戚の女の子のお陰で医者になるって目標に近付けそうな気がしてきたんだ。だから頑張れる」

「親戚の女の子？」

僕は彼女にあのビーズの話をした。そして彼女にも幸せが訪れるように、さやかちゃんに頼んでビーズのセットを幾つか分けてあげようと思った。

家に帰ってから電話でさやかちゃんにその旨を伝えると幸せになれる人が増えるならと快諾してくれた。

それから二日後の夕方、二人きりの教室で仙石原さんに沢山あるそのビーズのセットのうち、十セット程を渡した。

「ありがとう。あのさ、川越君？」

「ん？ 何？」

「もし良かったら、私と付き合わない？ 川越君のひたむきな姿を見ていると、私も頑張らなきゃって張り切れるの。川越君と同じ中学だった人に聞いたんだけど、こんな事言っでごめんね。当時はあんまり成績良くなかったんだよね？」

は…

口が開いたまま塞がらない。あの仙石原さんが僕と付き合いたい？

これは夢か？ 勉強に疲れて居眠りしてるのか？

「うん、まあね。5段階評価でオール3だったよ」

「でも今はトップクラスだもんね。凄いなあ」

ああ…

なんだこれは…

もしかしてあのビーズのお陰？

「ありがとう。僕も仙石さんと、その、付き合いたいって思ってたんだ」

すると仙石さんは僕を夢中にさせたあの微笑みを見せた。

「そっか、じゃあよろしくね」

「うん、こちらこそ、よろしく」

あのビーズがあれば全てが上手く行く。残りほどのくらいだろうか？少なくとも一つ百グラムのケースが二十個は残っていた筈。これで僕は間違いなく医者になれる。何もかも思い通りだ。

そうだなあ、医者になるのはまだ先の話。じゃあ先ず何をしようか。そうだ、せっかく意中の女性ひとと恋愛関係を結ぶ事が出来たんだ。僕だって男だ。欲求不満になる事くらいある。僕が好きな時に彼女にそれを満たしてもらえばいいんだ。

もう全てが僕の思うまま。あのビーズさえあれば、望めばなんでも手に入るんだ。持ち主の不幸や不満を吸い取って幸せに変換するビーズなんだから。

オール3の人生大逆転だ。

第四十三話：人生大逆転（後書き）

前回の更新が遅かったので今回は早めの更新です（・・）

ここからは小説と関係ない話です。

花粉の季節が到来しました。花粉症にはベタにマスクや眼を洗浄するなどありますが、ブルーベリーやヨーグルトも良いらしいですよ。私はブルーベリーを圧縮した健康食品を愛用していますが、それが効いているのか、今年はまだ花粉症の自覚症状がありません。

今まで花粉症とは無縁の方も、環境悪化などで突然かかるかも知れないので注意してみてはいかがでしょう？

それでは（・・o・）ノ

第四十四話：懲りない男

梅雨が明けた七月上旬の休日、またも勇一が私の家に来ていた。

これは私の両親が仕事で不在のため小学生の私一人では危ないという事で、数年前から勇一と休日を過ごすのはいつもの事だった。

勇一は正午の陽が射し込む私の部屋の、僅かに光が当たらない南西側にある学習机を使って医学の本を黙々と、しかしどこかルンルンとした笑みを浮かべながら眺めていた。

どうやら勇一は今まであまり接点はなかったが、以前からずっと好きだった女子から交際を申し込まれたらしい。

学業成就や恋愛成就は私が贈ったビーズのおかげだとか言っただけでも喜んでくれているようだ。

もしかしたら本当にあのビーズには何らかの力があるのだろうか。

「さやかちゃん、お昼にしようか？」

「うん、そうだね」

勇一はふと本を机に置いて絨毯に体育ずわりをしながら考え込む私を誘った。

私は勇一に連れ出され、駅の北口にあるピザ屋に入った。

北口は私達が住む海側の南口より栄えていて、駅ビルの下に位置す

る割と大きめのロータリーにはバスやタクシーが溢れ、歩行者は駅ビルの三階エントランスから伸びるペDESTリアンデッキを歩く。周囲には銀行や証券会社、六階建ての大型スーパーやファーストフード店などが立ち並ぶ。

「さあ、今日は好きなだけ食べていいよ。さやかちゃんのお陰で僕はサクセスライフを送れているんだから」

「そんな、大袈裟だよ」

この店はこの時間、食べ放題を実施していて、どれだけ食べても値段は同じなのだがそこは敢えて何も突っ込まなかった。一般的な学生が金銭的に貧困な生活を送っているのは承知している。食べ放題であろうと御馳走してくれるだけで有り難いのだ。

「いやいや正直な事を言うと僕、あのビーズをお守りくらいにしか思っ てなかったんだけど、言われた通り一日一粒テグスに通してみたら受験に成功したり定期試験の順位が格段に上がったり彼女が出来たり、きつと何かあるよ、ホントに」

小さく扇形に切られたパイナップルが乗ったフルーツピザをかじりながらビーズを始めてからの運氣の上昇ぶりを語る勇一。

「良かった。でもね、私も実は半信半疑なんだ。でもきつとこのビーズをみんながやれば幸せになる人が増えるよね」

「そうだね。ありがとう、絵里にも分けてくれて、ビーズ」

『絵里』という固有名詞を口にしようとした時、勇一は少し頬を赤らめ照れ臭そうな顔をした。

きっと絵里さんは勇一の彼女なんだから良い人に違いない。私はそう信じていた。だからビーズを分けたのだ。

食べ放題を利用して、たらふく食べたのは勇一だった。私は腹八分目盛りで手を止めたのだ。彼は体を重たそうに、私に手を引かれながら猫背になって店を出た。

「ごめん、さやかちゃん、小学生に手を引かれるなんて、情けない」

はあ、と溜め息をついて中央公園に向かいとぼとぼと歩く勇一は、まるで何かに取り憑かれたようにぐったりとしていた。その姿はビーズの効果でサクセスライフを送る成り上がりの『勝ち組』の人間とは寧ろ逆で、運氣を使い果たして廃れ、やがては倒れて灰になり風化しそうな、奈落の底に落ちた『負け組』だった。

「食べ放題だからって調子に乗るからだよ。折角ビーズで運氣が上がっても、調子に乗って悪い事すると地獄に堕ちちゃうよ？」

勇一の体を落ち着かせるべく駅から少し北へ向かい、国道の向こうにある中央公園で休む事にした。中央公園は特に子供用の遊具などはなく、東西に芝生が広がっていて、東と西の間には背の高い木が何本か立っている。公園の西側には入口にトイレがある建物とやや大きめな池があり、東側には人工の滝と、その滝の上に小高い丘がある。噂によるとその丘には捨てられたウサギが多く棲んでいて、夜になると公園中を自由気ままに駆け回るようだ。

私達は滝の前に常に設けられている、木製のステージに上り腰掛け滝を背にして、私は両足をぶらぶらさせ、勇一はただうずくまって

いた。

「ふっ…」

「何か可笑しいかい？」

同じ場所で暫く休んでいると、未だ同じ姿勢を保ったままの勇一の背中にシオカラトンボが止まった。まるでトンボにまで馬鹿にされている様でそれが可笑しかった。

「うん、可笑しい」

公園を後にすると、そのすぐ近くの道路を挟んで東側にある駅前にある大型スーパ―とはまた違う大型スーパ―に連れられた。このスーパ―には映画館があり、勇一が私に何か好きな映画を見せてくれると言った。

その売店で勇一はメロンソーダを私の分を含めて二つと、スモールサイズとレギュラーサイズのポップコーンを一つずつ買った。レギュラーサイズの方は勇一が食べるそうだ。

この人、懲りてない。

映画が終わって、私や他の客は席を立ち劇場を出ようとする。しかし勇一だけはそこを立とうとしなかった。

「勇一？」

「立てない、体が重くて」

それを聞いた私は勇一を無視して出口へ向かう。

「ちよつ、そんな」

仕方ないので私は勇一の左腕を両手で引きずって劇場を出た。映画館の係員はどうしました？ と訪ねてきたが、私は何か言いた気な勇一を目で制止して、いえ、何でもありません。御心配おかけして申し訳ありません。と答え、一礼した。引きずる私と引きずられる勇一に入場待ちの行列の目線が集まる。

タクシーを呼んで家に帰り、夕食は出前を取る事にした。勇一はメニューを見ながら通話している。

「え〜と、ラーメン二杯に餃子二皿、麻婆豆腐と野菜炒めに青椒肉チンジャオロ絲を一皿ずつ、あとピータンも一皿、最後に杏仁豆腐を二つお願いします」

二人分の量とは思えない注文だ。それにお金は足りるのだろうか。ましてやピザとポップコーンで同日中に二度も苦しい思いをしている筈なのに。

どうもこの人は『懲りる』と言う事を知らないようだ。

第四十四話：懲りない男（後書き）

今回の話はコメディータッチですが、さりげなく今後の展開に重要なポイントを置いた話です。今後の勇一の動きにご注目下さいm)

――)m

以下は小説とは関係ない私の独り言です。

南関東は河津桜が満開になるなど、もうすっかり春です。私は四月から高卒で就職という事で、大学な専門学校へ進学する同級生を羨む事になりそうです(ノ<>)ノ

進学するお金がない！

自分じゃ学費払えない！

まあでも事務職より現場職のほうが私の性に合っていると思うので長い目で見れば良いでしょう！

それではまた次回(？)！

第四十五話：仙石原絵里

仙石原絵里せんじくばらえり、高校一年生。まもなく一学期が終了する。私にはつい最近彼氏が出来た。

彼氏の川越勇一かわごえゆういちは医者を目指していて、いつも進学補講が終わると教室で一人残って勉強をしている。話によると彼は中学時代まで勉学に於ける成績が芳しくなかったようだ。

中学までは成績優秀だった私とはまるで逆だ。

そんな地道に努力する彼を私は入学して間もない頃から尊敬していた。それはいつしか憧れとなり、そしていつの間にか『夢へ向かう彼を応援したい』という気持ちと共に、高校へ進学してから成績不振となった私に新たなヒントをくれるような気がした。

もしかしたら彼に告白したのは、『恋愛対象として好きだから』という事ではなく、『彼と付き合えば人生変わるかも』という期待を持ったからかもしれない。

『ギブ・アンド・テイク』の存在しない、私が求めるだけの関係。

とはいえ、そんな考えで男女交際をしている人々はさぞ多い事だろう。高校生の恋愛だし、それで良いのかもしれない。

それは彼を騙している事になるのかな？ だって、本当に『好き』かどうか疑わしいのだから。

彼は私の事が好きだ。それは以前から何と無く感じ取っていた。だ

から告白に関しては自信があつたし、何故か彼と付き合いなければならぬような、見えない力に引き寄せられるような感覚があつたのだ。だから私はごく自然な流れで告白した。いや、どうしてか何かの不可抗力がそうさせた感覚があつた。

とすると、私が行つた行為は『告白』と言つよりは『誘導』だろうか？

それでも彼と一緒に居たり彼の事を考えると楽しくて、うきうき出来る。だからついつい小学五年生の妹、未砂記みすぎに彼を自慢してしまふ。

それに彼もよく未砂記の面倒を見てくれて、その時は三人からほんわかとした空気が広がるのだ。

そうだ、きっと付き合つていくうちに本当に好きになつたんだ。

日曜日、彼は親戚の女の子の面倒を見るためデートはせず、私も未砂記と共に過ごす事にした。午後は得意のクッキーを焼いて、まつたりしたティータイムにしよう。

「み〜んみんな〜みぜみあ〜ぶらぜみ〜 お〜まえのな〜かまはどこにいます〜」

未砂記がカタツムリの歌を自分なりにアレンジした替え歌を歌いながらクッキーの生地をこねる。未砂記は何故か蝉せみが好きなのだ。ちようど外ではアブラゼミがじりじりと鳴いている。

クッキーを焼き上げ少し渋めのアイスティーをお供にしながら妹と二人きりの貴重な時間を過ごす。日頃は学校の勉強で忙しく、こう

いう機会でもないとなかなかゆっくりお話が出来ないのだ。

「は〜わ〜ゆ〜(How are you)?」

何と無く末砂記に問い掛けた第一声。

「まあまあやってるよ。えんどゆう?」

末砂記はネイティブでは定番の返事をした。

「みいとう〜」

そう、私もぎすぎすした進学校で成績不振でも何とかやっている。

それに今は彼氏が出来たり、こうして末砂記とティータイムを過ごしたり、日々が充実している。

だから

「う〜ん、やっぱりハッピー」

私のその言葉を聞くと、末砂記はにんまりした。

「それならきつと私も今はハッピーだ。うん、こういつ時間が幸せなんだよね」

「そうだね。って、末砂記、何かあった?」

最近は中学校とは桁違いに高いレベルの学校の勉強や彼氏とのデートで末砂記の様子に気を配れなくなっていた。

でも末砂記が

「まあまあ」

なんて言うのは珍しい。いつもなら元気だとか、前向きな返答をするのに。そういえば末砂記の友達が虐められていたと聞いていたけれど、それが解決したら今度は末砂記自身がその立場になってしまったとか？

「うーんと、最近暇なんだよね、でも私は嬉しいよ。勇一と長続きするといいね」

そうか、末砂記に構ってあげられなくなったから暇を持て余していたんだ。本当にそうなら二人のこういう時間をもう少し増やそう。こういうった事の積み重ねが実はとても大切だったりするのだ。

翌日の放課後、私は勇一の部屋を訪ねる事になった。

小さくて質素なマンションの一室。両親は共稼ぎのため不在で滅多に帰って来ないらしい。

夕方のちょっととした一時ひととき、少し弱くなった太陽光がカーテンの隙間から差し込んでくる。

「夏にサザンがキノコ公園でライブするの知ってる？」

「うん、絵里、サザン好きなんだよね」

「そうだよ、Mステ（音楽番組）での一言を実現するために駅前で

署名活動してた人も居たんだから」

二人は勇一の部屋のベッドに腰掛け好きな音楽やテレビ番組など、決して特別ではない話題で談笑した。ただ、勇一の左手の上には私の小さな右手が重なっていた。そこだけは二人の関係を示していた。

暫く続いた会話が途切れると、勇一は重なる私の右手から自身の左手を引き抜きその手を私の右手の甲を掴む様に置いた。

その手は温かくて、けど何かざわざわしていた。

瞬間、互いの心拍数が上がると同時に頬が少し赤らむと、私は胸の高鳴りを抑え、少し唾を飲み、勇一の瞳をそつと見つめ微笑みかけた。

それに反応してか、勇一も、はつとして唾を飲み込んだ。

ついに私も目を合わせられなくなり、頻繁に唾を飲み俯いたまま黙り込む。胸が張り裂けそうとはこの事を言うのか、気が気じゃない。知らぬ感覚への恐怖と少しの好奇心が交錯する。

勇一の小さな手が私の背中を押さえて抱き寄せる。更に高くなる二人の鼓動、抑えられない衝動、やや多量の唾を二度続けて飲み込む私は、目を閉じて彼の胸に左耳を当てる。

確かに聞こえる、心臓の音。

ドクン、ドクン　。

「すじい、心臓の音」

勇一の息がどんどん荒くなるのが判る。

「絵里、いい？」

「…うん、いいよ」

私はそのまま、ゆっくりと、その温かい手に押し倒され包み込まれた。それは痛みを伴うけれど、とても温かく、私は身体から意識を離されそうになった。けれど彼の胸の中へと魂を吸い込まれてゆくような、不思議な感覚だった。

じめじめとした生暖かい夜、ゴールデンタイムのドラマが始まる少し前。こんな時間まで鳴いているアブラゼミの声を聴きながら、痺れる足で閑静な住宅街を歩き末砂記が待つ家へ帰った。

「ただいま〜」

リビングでは夜遅くまで一人ぼっちにさせてしまった末砂記が私を出迎えてくれた。

「おかえり〜」

私は心の中で末砂記に言った。

『こんな遅くまで一人ぼっちにしてごめんね、そしていつも私を一人ぼっちにさせないでくれて、本当に、ありがとう』

「ただいま」

アブラゼミの声心地良い夜、姉貴がきつと彼氏の勇一とデートをして帰ってきた。

「おかえり」

両親は帰って来なくとも姉貴が帰れば一安心。淋しさはさっとどこかへ消えていった。

「遅くなってごめんね、いま焼きそば作るからね」

「うん、ありがとう！」

遅く帰ってきてても、姉貴はいつも通り私に夕飯を用意してくれた。ただ、どこか魂が抜けたような、心此処に在らずといった雰囲気ではあった。

こんな事を口にするのは恥ずかしい私の中で言う。

『姉貴、今日もおつかれさま、いつも私を一人ぼっちにさせないでくれて、ありがとう』

第四十五話：仙石原絵里（後書き）

近頃は更新が遅くなりまして、日頃ご覧頂いている皆様には大変申し訳ございません。

今回は末砂記の姉、絵里の話をお送りしました。絵里の性格や人間性をちょうど良い具合に表現出来ているか心配です（- - ;）

それではまた次回（^ ^）ノ

第四十六話：『いとしの』『姉妹愛』の裏で（前書き）

この話は第二十五話『いとしの』と第二十六話『姉妹愛』と連動した話です。

第四十六話：『いとしの』『姉妹愛』の裏で

何もかもが上手く行き過ぎているこの頃、絵里とは一週間に一回だけ僕の部屋に誘い込んで重なり合う。しかし絵里は初めは我慢していたのか、あまり声を出さなかったけれど、二度目以降、馴れてきて僕の行為が激しくなると痛がったり嫌がったりする事が多くなっていた。

休日、気分転換に近所の緑地や公園を散歩した帰り、住宅街を歩いていると、絵里のお母さんと出くわした。よく絵里の家に遊びに行くから彼女とも顔を合わす事はよくある。

「あら、勇一君、こんにちは」

「どうも、こんにちは」

互いに愛想良く挨拶を交わした。

「勇一君、いま絵里も未砂記も居ないけど、良ければうちに寄ってかない？」

「あ、はい、じゃあお言葉に甘えて」

帰った所で僕を待っているのは参考書の山。いつもしっかり勉強しているから今日はもう少しくらい墮落しても良いだろうと思い、家に上げてもらう事にした。

絵里のお母さんの年齢は見た目と子供の年齢から推測しておそらく三十代半ばくらい。皺しわ一つない、和服の似合いそうな大和撫子だ。

きつと娘である絵里や末砂記ちゃんも将来こんな美人になるであろう。

「アイステイーでいいかしら？」

「あ、はい、ありがとうございます」

リビングのソファアに腰掛け、芝生の庭をぼんやり眺め、絵里のお母さんとアイステイーを待つ。

しかし、何と言つのだらう、気まずいとも違うし、緊張とも違う、どこかそわそわする。絵里のお母さんと二人だけの空間。

「勇一君、絵里とは上手くやってる？」

「はい、いつもお世話になってます」

「あらあら、そんなに畏^{かしこ}まらなくていいのよ」

「いえ、なんとというか、こんな言葉遣いの方が楽なんです」

「そう、なら仕方ないわね」

すると彼女は立ち上がりこの部屋を出て階段を上って行き、暫くすると少し重たそうな段ボール箱を抱えて戻って来た。それを開けると中にはアルバムが二列に行儀良く平積みされていた。

「これ、絵里が生まれた次の日に撮った写真よ」

それは病院のベッドで絵里のお母さんが絵里を抱っこしている写真

だった。

「絵里ね、生まれてすぐには泣かなかったの。だからやっと初産^{ついでん}が終わったのに不安と恐怖でどうしようもなかったわ」

アルバムのページをめくりながら産後から現在に至る迄を語る絵里のお母さん。母として、娘への愛情が伺える。

「勇一君、何か悩んでる事はない？」

あらゆる事が上手く行き過ぎている中で悩んでる事と言えば絵里と体の関係だ。しかしそんな事など本人の母親に打ち明けて良いものだろうか。

「なんでもいいのよ？」

なんでもいいと言われても抵抗あるのが一般的であり僕もその例外ではないのだけど…。いや、抑^{そしても}そんな事バレてはならないのであって、うん、言えないな。

「いえ、ホントに大丈夫です。今の所は」

これが妥当な答えだ。きつと。

それからというものの、絵里のお母さんには同年代とは話しくい大人だからこそ出来る話や悩みを聞いてもらったり、時々僕が聞いたたり、そういった相談相手としての関係となり、絵里のお母さんではなく、個人として、よし江さんとして接するようになった。ちなみに絵里のお母さんであるよし江さんは自分の名前が気に入らないらしい。

この名前は彼女の父親の名前『義一』^{よしかず}を引き継いだもので、女子に『義』の字は付けにくいという理由で『よし江』となったそうだ。もしかしたら父親と仲が悪いのだろうか。そこまで聞き出すのは釈に触るから止めておこう。

彼女と接していると、僕の日常とは少し違った上質な世界を垣間見る事が出来てそれが楽しい。僕はそんな彼女をもっとよく知りたいと思うようになり、自然に恋人の絵里と居る時間よりよし江さんと居る時間の方が日増しに長くなっていった。

ある雨上がりの午後、僕は絵里とのデートの後、よし江さんと二人で横浜の元町を中心に散策する事となった。

この近辺は中華街やブランド品の店が立ち並んでいるのだが、横浜地方気象台の横を通る階段状の坂を下ると、一日二十杯限定の鶏肉が入ったラーメンを出している店がある。この鶏肉が正に頬が落ちる美味しさなのだ。本当に美味しいものを食べると自然と笑顔になるのは本当だ。僕は横浜にはあまり詳しくないのでこの隠れた名店を案内した。

ラーメン店以外は全てよし江さんのリードで終わった横浜巡り。気が付けば終電間近の時間だ。公園からベイブリッジを初めとする夜景を少し眺めこの場を去る。

この時間がずっと続けば良いのに。

「今日は楽しかったわ。ありがとう」

僕に微笑みかけるよし江さんの表情はどこか絵里を思わせる。絵里

のあの笑顔は母親譲りなのか。

「いえ、僕の方こそ」

「良かったら家に泊ま^{うち}っていかない？ 家に帰^{うち}っても誰も居ないのよね？」

迷惑ではと遠慮しつつ、結局泊めてもらう事になった。仙石原家の姉妹が二階の子供部屋ですっかり寝静まったと思われる頃だった。周囲に騒音は無く、家の中に響くのは僕ら二人の、夜中だから忍ぶような足音だけだった。

それからはリビングで白ワインと赤ワインを一本ずつ開けた。赤の方はアルコール濃度が濃いらしいが少し高価で熟しているので頂く事にした。ちなみに日本では常識だが未成年の飲酒は禁止されている。

アルコール濃度が高いせいか、飲んでいるうちにどんどん気分が軽くな^くっていく。右隣にはよし江さんがどこか寂しそうな表情でソファアの向かいにある窓を見つめていた。軽くなった僕の心を彼女の切ない瞳が引き寄せる。

娘、絵里の彼氏である川越君とワインを飲んでいたらいつの間にか眠^かってしまい、気が付けば朝になっていた。

「あれ？」

寝ぼけていた気を確認にすると、私と川越君の着衣が乱れていた。

「うそ、これって…」

何て事をしてしまったのだ。娘の彼氏とそんな事を？　しかし記憶がない。酔ってしまった勢いでそんな事をしてしまったのか。私はとりあえず服を服装を調べ眠っている川越君を起こす。

朝、よし江さんが慌てた様子で僕を起こした。

「川越君、あの、早く服着て！」

見ると僕の着衣は乱れていて、昨夜のままだった。そう、僕は酒に酔った勢いでよし江さんを襲ってしまったのだ。彼女も酔っていたらしく最初は抵抗したが、こちらの流れに引き込むのは容易だった。

服を着てよし江さんと話してみると、どうも昨夜の事を覚えていないようだった。僕も途中の記憶が所々抜けている。だが絵里が嫌がるので欲求不満だった僕にはとても幸せな時間だった。これも例のビーズの効力なのだろうか。

だが流石に恋人の母親とそのような関係を持つのはまずい。だから次の恋人を探そう。きっとこれまで有り得ない程のミラクルを起こしたこのビーズが引き寄せてくれる。

そして次の恋人、いや、そう呼ぶには語弊があるが交際相手はすぐに見付かった。まだ絵里との別れ話は切り出していない。

それは高校に入学して間もない頃から好きだった絵里と別れるのが

惜しいというのもあるけれど、よし江さんとも会えなくなるからだ。それに絵里の妹の未砂記ちゃんとも一緒に遊んであげられなくなるのはやはり惜しい。とりあえず暫く黙っておく事にしよう。

第四十六話：『いとしの』『姉妹愛』の裏で（後書き）

3月22日以来の更新です。仕事で更新が遅れましたがちゃんと完結させます。非常事態が起こらなければm（|）（|）m

第四十七話：その先に待つもの

昼、私の気持ちはまだ落ち着いていなかった。川越君との出来事は本当に何も思い出せない。

川越君は朝早くに帰り、その証拠は無くなった。

しかしきつと事實は私の思う事と違いないだろう。

私は、許されない事をしたんだ。

そう解っているのにどうしてか、うきうきしている自分が在る。それは女として、性別のあるものとしてか、または侵してはならない領域を冒険した気持ち良さか。

「ねえ、どういう事？」

いつの間にか私の背後に居た次女の末砂記が私に問い掛けた。まさか…

「ん？ 何が？」

あまりにも唐突な問いに私は咄嗟の返事しか出来ない。

「どういう事じゃないよ。夜中の事だよ。アンタここで姉貴の彼氏といけない事してたでしょ」

やっぱりそうだったのか。してしまったんだ。私は。親として、人として最低な事を…。

「何それ？ 夢でも見てたんじゃないの？ どうせ彼氏が欲しいからって妄想でもしてたんでしょ？」

私は何て事を言っているんだ？ そんな事を子供に言うなんて、どうかしてる。いつそ私を殺して？

殺して…

気持ちが悪んでゆくのは裏腹に事実を否定した。子供に嘘つくなんて、親として最低だ。

「最初に姉貴が見付けたんだよ。それを私も一緒に見たの」

絵里に見られた！？ もう駄目だ。

「ああ、仲良いのね。二人揃って同じ夢見るなんて」

立っているのもやっとの私の頭の中は真っ白で、言っている事は目茶苦茶。

「もういい」

「あつそ。気が済んだのね」

私、何でそんな事言えるの？ 苦し紛れの強気な口調は自身も子供たちの心もズタズタにして親子の絆を断ち切ったに違いない。

子供に見捨てられ、もはや母親の資格など私にはない。

ここに私の居場所はない。

裏切り者の私は何処へ行こう？

何処へ…。

私はそのまま家を出て宛もなく歩き出した。もう娘達に会う事はないだろう。

歩いているうちに辺りは暗くなっていた。虫の声が侘しい。それが私の頭の中を、胸の中を真っ黒でどろどろした後悔の色がじわじわと染めて行く。きつと私と同じ事をした母親は他にも居るだろう。中にはそんな事しても平然としてる人も居る筈。しかし私はそうでなかった。そんな事をしてしまった自分が許せなかった。

何度か朝が来て、気が付くと周囲に木々しか見えない森の中に居た。時々鳶に足が引つ掛かり転びそうになる。私は道などないそこを孤独に、無心で歩み進んだ。やがて脱力感に苛まれ目が眩み体がふらついて立ち上がれなくなった。

私、こんな森の中で誰にも看取られないで死ぬんだ。当たり前だよ。あんな酷い事をしたのだから。

でもせめて、子供たちに謝りたかった。思い出すと意識は朦朧としていても、頬が緊張して涙が込み上げてくる。

「ごめんね、ごめんね、絵里、末砂記、ごめんなさい、私なんか早く忘れてね、お父さんと仲良くするんだよ?」

聞こえるのは木と木が擦れる音や小鳥たちの囁きのみ。そこでは私

の嘆きの声などすぐに掻き消されてしまう。

分かっていた筈なのに。

決死の想いで産んだ子供たちの存在の尊さを。

他愛ない日常の尊さを。

それをたった一つの、浮いた気持ちが犯した過ちで積み上げたもの全てを崩してしまった。その先でどうしようもなく愚かな私を待っていたのは、深い深い森の中での孤独な死だった。年老いた両親を亡くした私が失踪した所で、旦那に犯した過ちが知れば携帯電話を持たない私を探してくれる人など誰もいないだろう。

第四十八話：幸福のコツ

ビーズが引き起こした悪い運命、それは石神井さやかの従兄弟である川越勇一がビーズの力を悪用した結果、末砂記の母親である仙石原よし江と同じく末砂記の姉である絵里が死亡に至った事だった。もともと、よし江の死亡は確認されていないが、あれから約八年経過した現在も消息不明なのだからそう見るのが自然だろう。

さやかは従兄弟のビーズの悪用によって家族を亡くした末砂記にそれを伝えるべく、その前にオタちゃんに相談を持ち掛け全てを打ち明けたのだった。さやかは末砂記に対する罪悪感を小学五年生から高校卒業間近の現在までずっと背負っているのだ。

話が重く、今どうすれば良いのか判らなくなったオタちゃんは取り敢えずさやかを慰めた。

「よく打ち明けてくれたね。もう大丈夫だよ、これから何か辛い事があつたらいつでも僕に言つてよ。力になれるか自信ないけどさ」

それを聞いたさやかは一気に緊張が解けた様で肩を下ろし、深刻そうな表情が柔和になった。

「ありがとう、小田君、決めた、私、明日仙石原さんに打ち明けてみる」

「分かった。じゃあ僕も一緒に行こうか？」

「ううん、これは私の問題だから、最後は自分で決着つけるよ、けど、ありがとう、小田君」

翌日は卒業式の前日で登校日だった。さやかは末砂記を校舎の屋上に呼び出した。この学校の屋上には小さな池があり、鴨の親子が列を成してぺたぺたと散歩していた。

「さやかちゃんが私とマンツーマンでお話なんて珍しいね」

さやかは笑顔が絶えない末砂記にそんな話をするのが抵抗あった。しかしもう自分の中で後戻りは出来なかった。

「はい、とても大切なお話です」

二人は近くの木のベンチに腰掛け、テーブルを挟み対面する。

さやかは春の風が吹く青空の下で昨日オタちゃんに話した事と同様に全てを打ち明けた。それを聞いた末砂記がどんな反応をするか、さやかはそれがとても不安だった。

「本当に、申し訳ありません、とてもお詫びしきれません」

「そっか、そうだったんだね。でも大丈夫、さやかちゃんは何も悪くないよ。だからもう気負わなくていいよ」

末砂記の反応は驚きを見せたものの落ち着いていた。

「でも、私が勇一にビーズを渡さなければ」

「それは仕方ないよ。勇一だって本当は良い人なんだから。私だっ

て信頼してたもん。きつと彼も反省してるし、姉貴だつて許してく
れてるんじゃないかな？ それよりさやかちゃんと勇一が従兄弟だ
つたなんて知らなかったよ！ あとビーズがさやかちゃんから渡つ
て来てたなんて。その、うーんとね、私はビーズのお陰で幸せにな
れたよ？ 中学の時から好きな人とも付き合ってるし。だから結果
オーライって事で！ ねっ？」

「本当に、良いんですか？」

「うーん、じゃあ一つ課題を差し上げましょう」

末砂記は何か思い付いたかのように左手の人差し指の腹で自分の顎
を押しながら言った。

「はい、何でも言つて下さい」

「私ね、まだ期末試験の追試課題が終わつてなくてこのままじゃ卒
業出来ないんだ。本当は提出期限過ぎてるんだけど、何とか頼み込
んで今日まで待つて貰える事になつたんだ」

「はい？」

追試など受けた事のないさやかにとってはその意味がよく理解出来
なかった。というよりそんな状況が実在するなど信じられなかった。

「だから、それ、手伝つてくれない？ 最初は優成に手伝つて貰お
うと思つただけけどアイツも理解出来ないらしくて」

「は、はあ……」

その日の夕方、必死でレポート用紙十五枚の課題を終わらせた（終わらせて貰った）。ちなみに未砂記の追試課題教科は化学で、内容は一年生の時に習った化学式の計算が主だった。さやかならそんな事くらい容易いが未砂記の能力では到底及ばぬものだった。未砂記はバツサバツサした課題のレポートを持って職員室へ急いだ。

「しつれーしまーす！！ せんせーっ、課題出来たよー！！」

定年近い講師はどこか間抜けな顔付きで円形脱毛が激しく、加齢臭が漂っていた。

「はあ、あのですね、ここは職員室なんですね。もうちょっと静かな登場は出来なですかねえ」

すると未砂記は講師にそつと囁いた。

「これ以上文句言つと先生がソー〇通つてる事ばらすよ？」

講師は手の平反したようににっこりした。

「はい、文句なしの素晴らしい出来です。これで無事に卒業ですね」

また未砂記は囁いた。

「うん、だって、さやかちゃんが答え教えてくれたからねっ！」

「…」

未砂記は黙り込む講師を覗いた。

「どうしたの？ せんせ？」

「やはり卒業は考え直したほうが…」

「そっか！ じゃあばらすよ？」

無事に（？）課題を提出した末砂記は荷物を下ろしたような気分
で教室に戻った。

「仙石原さん、どうでした？」

他に優成と浸地ひたち、オタちゃんが残る教室で南側の自分の席に座って
いるさやかが末砂記に問い掛けた。

「バッチリ！ さやかちゃんが手伝ってくれなかったら留年だった
よ！ 本当にありがとね！」

「いえ、こちらこそ、そんな事で済ましてくれて、本当にありがと
うございます」

こうして、さやかの長年の悩みは意味を失った。幸福を手にする事
が出来るビーズには、その容易さ故のリスクが伴い、使い方を誤れ
ば誰かの命を奪う。末砂記はビーズの影響で二人の家族を失った。

オイシイ話には必ずと言って良いほど裏があるのだ。だから幸福を
感じた時は調子に乗らずそれに感謝する気持ちが大切で、それが幸
福を全うコツでもあったりする。

ビーズを始める前からどんな効果があるか知っていた二人の例を挙

げると、ビーズの効果を実感して調子に乗った川越勇一は人を巻き込み間接的に二人の命を奪い、一方の末砂記は何かを意識しながらビーズを紡いだ訳ではないが、効果として好きな人、つまり優成と交際することが出来てそれだけで十分に幸福を感じている。そしてビーズを分けてくれた姉の絵里に感謝してきた。

明日は卒業式。三年生の末砂記たちは軽音楽部に所属していて部外のメンバーもバンドに誘い、式後に卒業ライブを予定している。これが最後のステージになる。そして進学や就職など、それぞれの道へ旅立って行くのだ。

第四十九話：卒業ライブに向けて

二月二十日の雲が少なく蒼窮に近い空を臨む午後、優成や末砂記たちは三月一日の卒業式に向けて学校の音楽室で卒業ライブの練習をする事になっていた。集合時間の一時間前である十二時に到着した暇人の優成と末砂記は練習するにあたって非常に大きな問題にぶつかっていた。ちなみにバンドは優成、末砂記、オタちゃん、浸地^{ひたち}、さやか^{ひたち}の五人だ。

暇人二人は現実逃避をしているのか、ステージに並んで末砂記が南側に腰掛けふわ〜とした腑抜けた口調で会話している。

「なあ末砂記い、俺の担当ってギタボ（ギター&ヴォーカル）と作曲だよなあ？」

「うん、そうだよ。でさあ優成い、私の担当ってベースと作詞だよね？」

「そうですよ」

「そうだよねえ」

その時、音楽室の自動ドアがピューッと開き浸地が入ってきた。浸地は思った。

「こんにちは、どうしたの？ 二人とも目が死人だよ？」

「そうかなあ、そう見えるかあ、うん、そうだね、私もそう思うよ。きつと優成も私と同じ様な理由でぼあくっとしてるんだよ」

二人から発せられる何処か重く、やる気と言うよりは投げやりな空気が教室より二倍広い沢山の音楽家たちの肖像画が貼り付けられた室内を漂う。二人の無気力には音楽家たちも何だかなあ、と言った所だろうか。

「んで、二人が無気力になった理由は？」

そう言いながら立っていた浸地は二人の前にしゃがみ込んだ。

それと連動する様に優成のブーツとした目線の先は正面の行儀良く整列した机の脚の群れからさりげなく浸地のスカートの中へと移った。

「え〜っですな、そんな事言っちゃって大丈夫でしょうかね末砂記さん」

「う〜んとね、先ず目線を浸地のスカートから逸らしてね。さりげなく見てるつもりでも判るからね」

浸地はそれに反応した。

「おおっと宮下、私のパンツ見たいの？ 今日は見ただけでビンビンになっちゃう凄いの着けてるよ」

それを聞いた優成は急に元気を取り戻してハキハキした。

「えつまジで！？ 見たい見たい！！ 見せて下さい浸地さま！！」

恋人の末砂記が隣に座っているのに浸地のパンツを平然と要求する優成であった。

「うん、どしよつかなく」

「いい男紹介するから！」

「しよがないなあ」

すると浸地は自分のスカートを少しずつゆっくりくりめくり上げた。

「ほら、見えるかなあ？」

「ああっ、惜しいっ！ もうちょっと！」

優成の頬は下がり完全にエロオヤジのうへっとした面になっていた。

「えっとな、浸地も悪ノリしないでね。優成は私の彼氏だからね？ 本題に戻してね、どうせすぐばれるから大丈夫ですよ優成さん」

「んじゃ、言っちゃいますか末砂記さん」

「言っちゃいましょう優成さん」

……

二人はせうの、の合図で正面にしゃがむ浸地に打ち明けた。

「曲、まだ一音も出来てない……」

「詩、まだ一文字も書けてない……」

本番十日前とは思えない二人の言葉を聞いた浸地は目が点になり魂が抜けるかのように、はあくっと思を吐いた。一方、優成と未砂記は何かスッキリしたのか黄昏れて、ほへえっつ¥(、)、し/とし

た。

魂が抜けた静けさの中、浸地だけはふと我に還った。

「バカだろ！！ あんたらバカだ！！ ホントの意味でバカップルだよ！！ ってか宮下っ！！ 曲出来てないのはマジでヤバイからっ！！！」

「はひっ！！ も、申し訳、い、いざいませんm(ー)m」

「じゃあ今日は優成のおごりで三時のおやつだ！！！」

「末砂記も他人事ひとことじゃないから。でも賛成！！！」

「おいっ！！ ふざけんな！！ おかしいだろ！！ 何で俺だけこなるんだよ！？」

優成は誰かと同じ事をやらかしても何故か自分だけはめられてしまう体質なのだ。それに反論しつつも結局ご馳走してしまうのが優成の性質だ。

「でさ、バカップル二人に提案なんだけど、みんなで作詞作曲しない？ その方が五人の個性が入ったこのバンドらしい仕上がりになるんじゃない？」

「おつ、それいいねヒタッチ！ うん！ そうしよう！」

「そうっすね、そうしましょう。いいんじゃないっすか？」

そんな事情をオタちゃんとさやかに説明して結局みんなで作る事になった。曲は二曲あるので一曲を男二人で、もう一曲を女三人で作る事になった。これを機に一曲目のヴォーカルはメインが優成、サブが末砂記のツインに。

二曲目のヴォーカルはメインが末砂記、サブが浸地のツインに変更となった。

楽器はいずれも上達に時間を要するので当初のまま優成がギター、オタちゃんがドラム、末砂記が一曲目のみベース、浸地が二曲共にベースで、さやかは一曲目はサブギター、二曲目はバイオリンとなる予定だ。

曲は遅くても二十四日までに完成させ、残りの最低五日間を練習に充てる。

十三時から最終下校の十七時まで、一曲はある程度 優成の頭の中に浮かんでいたのでサビまでを譜面ふめんに書けた。もう一曲は末砂記の感性が優れている為か詩も曲も思いの外ほかあっさり完成した。

女子チームが作った曲は切ないメロディーのバラードに仕上がった。

まだ出来ていない男子チームの曲はベースが二人の激しくも疾走感のあるロックになるつもりだ。

二曲共 五人が気楽に、しかし一切手抜きをせず精一杯の気持ちをぶつけた、彼等にとって一生忘れない音楽になるだろう。

『気楽に精一杯の気持ちを表現する』というのは彼等五人のポリシ―でもあった。そのためバンドメンバーで集まって会議をする時はいつも和気藹々とした楽しい雰囲気なのだ。

学校を出た頃にはスッキリした蒼窮に近い青空がいつの間にか都市の霞んだ星空になっていたが、それでも金星やオリオン座は見えていた。

通いなれた海岸沿いの国道から枝線として伸びる、二車線で少し狭い通りのグリーンベルト（緑色に塗られた路側帯）を歩きながら好き勝手な話をする。こんな日々も数える程だ。

ちなみにこの道は後にSMAPの木村拓哉さんが出演する携帯電話のCMのロケ地となった。

「みんな今日はありがとう！ って事で今日は優成がみんなに焼肉でもお寿司でも何でも好きなものご馳走してくれるってえ！！」

「おっ、さすが変態宮下！」

「じゃあ僕は寿司で！」

「いいんですか？ 宮下さん」

「はあ！？ いやあ、何それ！？ ちょっと待て！！ 俺そんな事言

「つてねえ！！」

優成は

未砂記に

再びはめられた。

「お昼に言ったじゃん！」

「俺は言っただけから！！ ああもう分かった！！ 好きにしろ！！」

「なんやかんやで投げやりになり、結局こうなってしまう優成であった。」

「だあくいじょくぶ！ 私もみんなに手伝ってもらったからちゃんとお金出すよ！ だから今日は一人でご馳走しよ？ ね？」

「はあ、そつすね。末砂記には敵わねえなあ」

「ごめんね、無理言つて」

「まあしょうがねえか。曲作つてなかつたし」

「ありがとねっ！」

優成は末砂記の『ありがとっ』と言つた時の笑顔に惚れていたのだった。

優成は末砂記のような賑やかなタイプは苦手なのだが、彼女の場合ただ賑やかな訳ではなく、中学生の時からずっと好きだった優成に対し常に『こんな私と付き合ってくれてありがとっ』といった謙虚な気持ちがあるのだ。末砂記自身も自分の様なタイプは優成にとつて苦手な存在だと認識している。

一方の優成も『いつも気を遣わせて悪いなあ』といった気持ちがある。だから互いにもう少しだけオープンな付き合い方をしたいと考えている。

意見の結果、食事は焼肉屋で食べ放題となった。五人で座敷に座り、テーブルを囲みながら盛り上がる。

「じゃあ今日は私達のおごりだから遠慮なくね!」

「え、遠慮なく…」

この期に及んで優成は俯いていた。

「サンキュー!! 日本一のバカップル!!」

「ありがとうございます!」

「ありがとうございます」

じわじわじゅわじゅわと炭火で肉が焼ける。ミディアムレア程度に焼けた所で末砂記が声を挙げた。

「じゃあ、外だから烏龍茶だけど、カンパイツ!」

「かんぱ〜いつ」

「カンパ〜イツ!」

「カンパ〜イ」

「カンパイツ!」

この夜、優成と末砂記の財布から一気に七千五百円が吹っ飛んだが、そんなのも青春の楽しい思い出の1ページになったりならなかったりするのだった。

第四十九話：卒業ライブに向けて（後書き）

アウトローなのかも知れませんが今回初めて作中に顔文字を使いましたm(_____)m

優成と末砂記はカップルですが、付き合い始める前、優成は末砂記を

「うるせえ奴だなあ、俺、こいつ苦手だわ」

としか思ってたんです。

一方の末砂記は中学生の頃からずっと優成を好きなので、自分が苦手意識されているのを解つていてもついつい構ってしまっんです。それでは優成にとって余計マイナスイメージになってしまうのですが…。

ではなぜ優成が末砂記を好きになってしまったのか。それはバイト帰りに公園で告白されたとか、事件に家庭の巻き込んだ上に自分を刃から守ってくれたというのもあるのですが、何よりも彼女の

「ありがとう」

と言った時の笑みが優成にの目とハートに最高に素敵な印象を与えたのです。

これは私、おじいの考えですが

『ありがとう』

とか、感謝の意を表す言葉って、世界で最高なんだと思います。みんなに感謝の気持ちがあれば戦争や殺戮なんて起きませんよね。

でも言葉って気持ちを込めて初めて意味を成すので、流れ作業で言っても意味ないです。

結局、多くの人がそれを忘れちゃってるんです。私も時々忘れてしまいます。それじゃいけないんですけどね。

どうにかなんねえかなあ、（人としての）馬鹿が得するこの腐った世の中。

第五十話：ぼくらのメッセージ（前書き）

今の自分だって幸せだけど、でもやっぱり満足出来ないんだよなあ…

だって、一度しかない『この自分』の人生だから。

最終話目前にして新キャラ登場です！

第五十話：ぼくらのメッセージ

女子チームに続き、男子チームの曲も完成した二月二十二日、この日は三送会（三年生を送る会）で軽音楽部の部員、総勢約百五十名と顧問の朝川夕子先生あさかわゆうじこが学校のホールに集まった。この会では在校生の一、二年生がライブを行う事になっている。三年生の後輩たちとの交流は実質これで最後となる。とはいえ部員数が半端なく多い上、他の部活と掛け持ちしてバンドに参加しているメンバーも居るため、一度も関わる事なく終わる部員も多く居るのだ。

会を始める前に、約百五十人の生徒でざわつく中、顧問がステージの上に立ちヴォーカルマイクをヴォーカリストの如く握った。彼女は二十三歳の教師一年目で担当科目は軽音楽部の顧問だが家庭科だ。身長は百五十七センチ、髪型は金髪のポニーテール。顔はやや童顔で一見すれば高校生だ。元気で明るい彼女は生徒たちから色んな意味で人気だ。

「みなさん、こんにちはー！！」

夕子の掛け声と共に一同が大きな声で返事した。

「こんにちはー！！」

ざわめきの中、夕子は語り始めた。

「今日は集まってくれてありがとう！ 三年生たちの卒業を祝って今日は一、二年生たちがライブしちゃいます！！ でもその前に、在校部員を代表して絵乃ちゃんえのから卒業する三年生のみんなにメッセージがあります」

「えっ!？」

どうやらメッセージをスピーチさせられる事など知らされていなかった彼女は、一年生、ヴォーカルの腰越こしこえ絵乃だ。

長く艶やかな黒髪とスマートなボディ、身長は百六十センチ程。上品で大人びた容姿とクールな頭脳を持つ所謂『デキる女』といった印象で男子からの人気はあるが、彼女自身は馴れ合いを求めないタイプで仲間をあまり作ろうとしない。

「お願いね」

「分かったわ」

急な依頼にもアドリブでクールに対応。それが絵乃クオリティ。

優成たちはそんな絵乃を遠目で見ていた。

「あらあら絵乃ちゃん、夕子ちゃんに嵌められたな」

「もし優成が絵乃ちゃんの立場だったらキョドって(挙動不審になつて)大変だったね」

「ああ、納得だ」

クールな性格だけどクールに対応出来ない、末砂記にも絵乃にも敵わない。これが優成クオリティ。

「は、いい、じゃあ絵乃ちゃんがスピーチするからみんな静かにして

ね
」

夕子の掛け声で部員たちのざわつきがほぼ収まり、ホールは静かになった。

床に座り込む部員たちの視線がステージに立つ絵乃に集中する。中には絵乃のスカートを覗き込む不届き者も何人か居た。絵乃はその不届き者の一人を顔は正面を向いたまま、目だけで見下ろし一瞬冷たい、クールな視線を送った。

「あう……」

その不届き者は蛇に睨まれた蛙の様になった。

ちなみに…

睨まれた不届き者の名は『宮下優成』。クールで熱いハートを持った本作の主人公だ。

「優成い、一昨日の事も含めて後でちよっとお話しようねっ」

優成は『一昨日の事』とは何なのか理解出来なかったが、末砂記の表情は笑顔なのに何故か非常に恐ろしかった。優成は何かとてつもなく嫌々な予感がした。

そんな卒業生、優成を差し置き、絵乃の『卒業生』に向けたメッセーجزのスピーチが始まった。

「ええ、三年生の皆様は、これから各々の夢や目標に向かって、この学校を卒業されることと存じます。しかし社会のは厳しく、矛盾だらけで、時には理想と現実のギャップに苛まれ、挫折してしまいたくなる事もあるでしょう。」

でも、そんな時は共に同じ巣を旅立った仲間を、巣に残った私達、後輩達をどうか思い出して下さい。私達は皆様の『心の家』としていつでも力になります。

ですからいつでも、メールでも構いませんので、今まで同様『絵乃ちゃん!』って気軽に呼んで下さい。みんな離ればなれになっても決して孤独ではありません。皆様には、この百五十人以上の仲間が居ます。それだけ心に留めて旅立って頂ければ幸いです。これにて卒業生の皆様に贈る言葉とさせていただきます。ありがとうございました」

上品でクールな口調だけど温かい彼女のアドリブ展開には部員は勿

論、教職員や校長も関心してしまう程だ。彼女の台詞は高校生というよりまるで卒業式で壇上に立つ校長の様だ。しかしこれも絵乃クオリティ。

「サアンキューエのーーーーーっ！！！！」

「絵乃ちゃんサイコーッ！！」

「やばい、マジ泣きそうなんですけどぉ（；；；）」

そんな声があちこちから聞こえてくる。

「やっぱ敵わねえわ」

「あーん！！絵乃ちゃんが言うとかッコイイー！！ 優成い！！私もあんなカッコイイ事言ってみたいーっ！！」

「まあ末砂記は末砂記らしくな？」

「だねっ！！ でも十六歳であんな事言うなんて、絵乃ちゃんもきつと苦労してるんだね」

「そうかもな。クールなフリして本当は繊細なんだよな、アイツ」

「優成と似た者同士だね！」

「そうだな。」

あつ！ いやいや？」

「優成は素直じゃないなあ」

素直に言えば良いものを素直に言わない。優成は割とプライド高いのだ。就職先もプライドの塊かたまりと言っても過言ではない会社に内定している。

普段は至ってクールな優成だが、心配事が発生すると考え過ぎる一面もある、かなり落ち着きのない性格である事は今までの行動から見ても解るだろう。

「それじゃあ早速、一、二年生のオン・ステージでえゝす」

夕子の掛け声を合図にホールの照明が落ちて暗くなった。

アンプ（専用のスピーカー）、ギター、ベース、マイクを叩いてテストをする音が、ビュウイイイイン！！ ボフツ！ ヴォンヴォン！！ と、真っ暗なホールに響き渡る。最初に演奏するバンドが準備をしているのだ。この音や暗さが演奏者は勿論、客までもが緊張する。

そして間もなく演奏が始まった。このバンドはアメリカでも認められたロックバンド、B・Zビーズの曲を披露した。

以後も演奏は約三時間に渡って続き、最後は絵乃がヴォーカルを担当する一年生バンドとなる。

このバンドは毎回オリジナル曲を演奏し、絵乃が書く独特の歌詞は

部員たちから注目を浴びているが、今回の曲はこのバンド全員で作詞したものだ。

演奏を始める前に絵乃からまた卒業生に向けたメッセージがある。メッセージは各バンドのヴォーカル担当が一言ずつ述べる事になっていた。

真つ暗なホールの中で、一筋のスポットライトを浴びた絵乃が稀に見せる微笑みで卒業生に再びメッセージを贈る。

「これからお届けする曲は、バンドのみんな作って一所懸命に練習した、私達後輩を可愛がってくれた先輩方に向けたメッセージソングです。私が詩を歌いますが、他のメンバーは楽器に気持ちを込めて演奏します。どうか、私達『四人』の素直な気持ちを聴いて下さい。『ぼくらのメッセージソング』」

曲は伴奏なしで絵乃の透き通るゆっくり、ローテンポな歌声から始まった。

『「光の空へ旅立つあゝなゝた 空に描く夢果てなく さあ、大きなみらゝい（未来）へ」」

すると一旦静かになり、伴奏が始まった。楽器（ギター、ベース、ドラム）をフルに使い、テンポは徐々に上がって行き、サビに向かって加速する。

「ぼくらに〜思い出え のおこして（残して）心に軌跡をき〜ざ〜む（刻む）」

だから贈ろう

ぼくらのメッセージ」

ここで曲はサビに入り、テンポは最高潮になる。

「心のいゝえゝ（家）をゝ 巣立つツバサゝへ

あなたのおかげでいまゝの 僕と私がありまゝす

出会った春

はしゃいだ夏

文化祭の秋

声を枯らした冬」

間奏が入り、急にテンポが下がる。すると再び楽器演奏は止まり、絵乃の歌声だけがホールに透き通ってゆく。

「ページめくっていくぼくらのアルバム

ぼくらのせゝいしゅゝんものがゝたりい（青春物語）

もしも、疲れたら

翼を休めてくれまゝすか？」

そして終盤、テンポは一気に上がりアンプを通して響く精一杯の楽器の音に掻き消されぬよう、絵乃も精一杯マイクを握り、精一杯の声でバンドメンバーみんなの気持ちをつける。

「ここはあなぐたの心の家！」

だからいつでも待っていますう

お茶とポテトチップス用意して

不器用な音楽BGMにおやつの間

また会いましょう！

同じ空の下でっ！！」

歌い上げると同時に楽器の演奏も終了！！絵乃を始め、バンドメンバー四人は不器用だけど精一杯の歌を卒業生に贈った。

ホールは騒然っ！！他の部員たちから盛大な拍手と歓声がざわざわとホールを震わせた。

最後に絵乃が締め挨拶をした。

「ありがとうございましたっ！卒業しても遊びに来て下さい」

これにて全てのステージが終了し、三時間ぶりにホールが明るくなった。

解散後、優成と未砂記は校門前の広場のベンチに腰掛けて雑談していた。

「いやはや、もう卒業か。めんどくせーなあ」

「これから夢に向かって旅立つんだよ！ 絵乃ちゃんが言ってたじやん」

夢に向かうとはいえ、優成にとってその夢を実現するには少々軌道修正が必要だった。なので解せない部分もあるのだ。実は優成は夢を沢山持っている、意外とドリーマーだったりするのだ。ちなみにその夢の一つは『動植物たちが過ごしやすい環境を作る事』だ。

雑談を続けていると、目の前を絵乃が一人で通りかかった。

「絵乃っ！」

優成が呼び止めると絵乃は歩を休め『何か用？』とでも言いたげに二人を見下ろした。

「何か用？」

第一声はやはりそうだった。

「今日はサンキュー。ってか何で俺だけ睨んだんだよ？」

「あら、親愛の印よ？ 親しくない人にそんな事はしないわ」

「あつ、そういえば優成に話があるんだった！ 絵乃ちゃん、ちょっと優成を取り押さえてくれる？」

「ええ」

末砂記の指示通り、絵乃は優成の背後に回り込み、優成の両脇を取り押さえた。

「えっ！？ 何！？ ってか絵乃もあつさり応じるなよ」

ぼふっ！！

「くほあつつつっ！！」

優成は末砂記に殴られた。

男の急所に当たった！！

優成はあまりのショックに意識が朦朧もつらうとしてきた。

末砂記と絵乃はいくらか経験値をもらった！！

絵乃にとって男が急所を殴られて倒れるのを生で見るのは初めてだった。

絵乃はハッと口を開けて顔を赤らめていた。

「最近の優成は変態さんだからね。少しお仕置きしないとなっ
」

????

急所を押さえるのに必死の優成は思考回路が混乱していた。

「変態？ 俺が？」

優成には浸地や絵乃のスカートの中を覗き込んだ覚えがあるので何と無く意味を理解していたが急所を殴られるとは予想外だった。

「あゝ、スッキリした 絵乃ちゃん、解放していいよ」

「あつ、ええ」

顔を赤らめたままの絵乃は末砂記に目線を合わせ解放すると、優成は急所を押さえたままベンチに倒れた。

朦朧とした意識の中、優成はまたも良からぬ、いや、男として自然な心理だった。

『絵乃の胸、あんま大きくないけど柔らかくていい匂いだったなあ』

取り押さえられた時、優成の背中に絵乃の胸が当たっていたのだ。

『あつ、そうだ』

優成はふと思いついた。

「絵乃、幸せになれる魔法、教えてやるうか？」

優成が言う『幸せになれる魔法』とは一日一粒ずつテグスに紡いで行くと次第に幸せになる、ムシが良い様で実は莫大なリスクを伴うあのビーズの事だ。

「あら、私は幸せよ？ こうして衣食住に不自由せず五体満足で生

活出来ているのだから」

「おっ！ 偉いぞ絵乃ちゃんっ！！ それに気付いてるならピースをやる必要ないねっ！」

「だな、やっぱり絵乃にも未砂記にも敵わないわ。俺なんか解つててもなかなか幸せだなんて思えないからなあ」

未熟者、宮下優成は薄々気付き始めていた。『幸せになれるピースの真理』を…。

第五十話：ぼくらのメッセージ（後書き）

今回から登場した『絵乃』は『いちにちひとつぶ』に代わる次回作のキャラクターで、本作にゲスト出演させてみました。

第五十一話…ようやく辿り着けました(前書き)

こんな身近な所に答えがあったんだ。

あの頃を思い出して、ようやく俺は真実に辿り着いた。

第五十一話…ようやく辿り着きました

卒業ライヴの練習、車の運転免許を取得するために教習所通学、学生時代が約一ヶ月で終わるといふのに何かと忙しい優成。

今日はファミレスでのアルバイト契約が満了のため退職する。共に働く末砂記は進学のため契約更新だ。今は最後の仕事を終えて事務所で店長に挨拶をしている所だ。店長は円形脱毛、丸顔に縁なし眼鏡を掛けていて、目尻が垂れ下がった人の良さそうなおじさんだ。

「二人が居てくれて本当に助かったよ。ありがとう。すぐに辞めちゃう子が多いから最後までやってくれると店としても私としても嬉しいよ」

「いやいやそれほどもあるよ。店長、年なんだから無理すんなよ？」

「まだまだイケるって！ 別の店長になったらこの店潰れちゃうぞ？」

「うーん、そうかもな」

実はこの店、この店長が就任するまでは食器もロクに洗わず、賞味期限が切れた商品を顧客に平然と提供していたのだ。前の店長は当時のアルバイト社員にそれを密告され降格し、転勤になったのだ。

「んでさ、店長、今日から働いてもらえそうな俺の替え玉を用意してきたぜ？」

店長に言い残して優成は事務所を出て客席へ向かった。

実は今日から働いてもらえそうな替え玉など用意していなかったのだが来店している客の中に何となく自分と似ている知人を発見してしまい、優成は後継者にちょうど良いと思ったのだ。

優成は席で三人の友人達と会話している知人客に声を掛けた。

「お客さま、ちょっとよろしいですか？」

「あら、あなた、ここでバイトしてるのね」

「その件でお話が」

後継者候補とは、後輩の絵乃の事だった。勿論、彼女はバイトに勧誘されるなど知らない。

優成はとりあえず絵乃をロッカールームへ連れて行き、壁に立て掛けてあったパイプ椅子を広げて座らせその旨を伝えた。

「今日からなんて、突然そんな事言われても困るわ。それに履歴書だっぺないのよ？」

絵乃は少々攻撃的な目付きで冷静に返した。

「ああ、それなら大丈夫。本当は履歴書ないと規約違反なんだけど俺と末砂記も履歴書なしだったから。それに、ここの店長いい人だ

ぜ？ 俺が居なくなると人手が足りなくなつて困るらしいんだ」

絵乃は少しの間、俯いて左手で頭を抱えた。

「はあ、仕方ないわね。でもコンプライアンスに反するから履歴書を用意してからでいいかしら？」

「ああ、『コンプライアンス』がどんな意味だか知らないけど、サンキュー」

絵乃は割とあっさり承諾した。クールだけれど困った人を放っておけない彼女の性格を優成は理解していた。それは自分と共通するからだ。

ちなみに『コンプライアンス』とは公正・公平に物を行う事で、この件ではアルバイトの申し込みに必要な書類（この場合は履歴書）を用意していない場合、特別な許可がない限りこれに反する。簡単に言えば『ルールを守る』という事だ。

こうして無事に後継者が出来た優成は絵乃と二人で店長に挨拶をした。絵乃はそのまま友人が居る客席に戻り、優成は思い残す事なく店を出た。

家に帰った優成は自分の部屋のベッドでグダグダゴロゴロしながら考え事をしていた。枕元には腕輪やネコ、ゴキブリなど、様々な形をしたビーズ細工が所狭しと置いてある。

優成はその中からゴキブリ形のビーズを手に取り思考を始めた。

ビーズは本当に幸せを呼んだのか？ いや、ビーズを始めてから俺の生活がいくらかマシになったのは事実だ。でもそれは偶然か？ いや偶然なんかじゃない、俺だけ幸せになったならともかく未砂記やオタちゃん、大甕おおみかも石神井しゃくじいさんも、結果的には良い方向へ進んでるんじゃないか。

間違いない、これは必然だ。ビーズに人を幸せにする力があるのは間違いない。

だがその一方で図に乗って何でも自分の思い通りにしようとするとき悲惨な結末が待っているという話も聞いた。

緑と赤の透き通ったビーズを交互に紡いだゴキブリ形の細工を右の親指と人差し指でつまみ、時々その人差し指で長い触覚をちよんちよんしながら真剣に考える優成であった。

じゃあどん底だった去年の春から今に至るまでに何があっただろう？
何をしてきたんだろう？

未砂記からビーズを貰って、未砂記に告られて、付き合い始めた矢先に未砂記がアイツに刺されて、未砂記を見舞いに行って、俺は泣き叫んで自分の無力さと未熟さを思い知り…

あれ？

この一年間、未砂記に絡んで俺は人生は転機を迎えたのか？

「もしかして、未砂記が俺に幸せを届けに来たのか？」
すると部屋の扉がカチャンと開いた。

「うーん、それはどうかな？」

「うわっ！？ 何でここに！？ 勝手に人人家ちに上がり込みやがって！！ ってかどうやって入った！？」

突如、優成の部屋に現れたのは彼とは違い自動車の免許を早く取得した末砂記だった。

「大丈夫だよ。ネコちゃんから許可は取ったから。縁側から一緒に入ったんだよにゃ〜？」

「おおあん！」

末砂記の後ろからネコが付いてきていた。

何度か説明しているが宮下家に住むペットのネコの名前は『ネコ』だ。

ネコはそのまま部屋に入り絨毯にボタンと倒れる様に横たわった。すると末砂記もそれを真似て絨毯に寝転びネコの頭を右手で撫で、可愛いにな〜、と話しかけた。ネコは目を閉じてとても嬉しそうだ。その証拠に人間で言えば前足を地に着けた正座の体勢になり、足踏みを始めた。優成はそれを見て自分もネコの背中を撫でてみた。

「フシャーッ！！」

ネコは閉じていた目を急に見開き立ち上がって牙を剥き出しにしな

がら優成を威嚇した。

「何だその態度の違いは！！俺が猫嫌いだってなら分かる。けど俺は猫好きだ！！今まで俺に懐かなかつた猫はお前以外にいないぞ！？」

優成は心の底から少々本気で落ち込んだ。

「ネコちゃんは女の子のほうが好きなんだよね〜」

「だからって五年近く一緒に暮らしてる、尚且つ命の恩人である俺を威嚇しなくなつて」

優成がネコと出会つたのは中学二年生の秋、妹と山の中を歩いていると突然骨と皮しかないくらいに痩せ細つた生まれて何週間も経っていない子猫がフヒヤ〜、と今にも死にそうな声と共に二人の前に現れた。二人はその子猫の身体全体を撫でて立ち去ると、何やら後ろから付いてきちゃつてるではありませんか。それを振り払う事など善良な中学生と小学生に出来る訳ないじゃないですか。結局、その山から約五キロメートル離れた海岸地域の家まで付いて来ましたよ。

白い毛なのに汚れて黄色くなっている子猫を取り敢えず小学校低学年の時にカブトムシを飼っていた空の大きめの虫籠むしかごに入れ、動物愛護病院に連れて行き里親探しを依頼したが二週間は預かつてくれという事なので家で預かつた。

一緒に暮らしてりや愛着も沸いて来るでしょう。ましてやこの家族は母親、優成、妹は猫好きだ。

という事でそのまま家で引き取り、一緒に暮らす事となり現在に至るのだ。

最初は食べる気力もなくミルクしか飲まなかったネコも今ではすっかり余分な肉が腹に垂れ下がり、特別贅沢ではないが、思うに幸せな生活を送っているのだらう。懐いてないとはいえ、五年前は死にそうだったネコがこうして日常の生活を送って、走り回ったり眠っている姿を見れるだけでこっちも幸せな気分になる。

優成はそれを熱心に末砂記に語った。

「あつ！ あのビーズの力って、もしかしてそういう事か！！」

優成はようやくビーズの本質に辿り着けた様だ。末砂記はやっと気付いた？ と言わんばかりにフツツと彼に微笑んだ。

第五十一話…ようやく辿り着けました（後書き）

一年間に渡ってお送りしてきました私の処女作、『いちにちひとつぶ』は次回で最終回を迎えます。

本作は最初から一年分、全五十二話の予定で執筆してまいりました。三日坊主の私でもやれば出来るんだなあと少し達成感に浸っています。

『いちにちひとつぶ』が終了しますと、次は本作で前回から登場している腰越こしこえ絵乃えのをメインとした、登場人物たちの成長を描く『あいはぐ』がスタートする予定です。絵乃は『あいはぐ』のささやかな宣伝のために本作に出張させてみました。

『あいはぐ』の公開は『いちにちひとつぶ』の最終話公開後を予定しております。引き続き私、おじい作品にお付き合いいただきたく存じます。

それでは（＾－＾）ノ

第五十二話：旅立ちの刻（とき）、それだけは忘れずに。

ようやくビーズの本質に気付いた優成。それは一日一粒ずつテグスに通すとやがて運氣が上昇し、結果的に幸福が訪れ更に物事が自分の思い通りに進むという代物だ。

ただしそれをいい気になって暴走した使い方をする自分や周囲の人々を奈落の底に落とすリスクを伴うものでもある。

優成の友人、石神井^{しゃくせい}さやかの従兄弟である川越勇一は約七年前、十六歳の夏、さやかから貰ったビーズの効果ですつと好きだった末砂記の姉、絵里を恋人にし、その上、絵里、末砂記の母親、よし江と不倫関係を持った。

その行く末は絵里を原因不明の死に追いやり、よし江を現在に至るまで行方不明としてしまった。勇一人は末砂記を人気のない波音のみが響く、灯台の光が僅かに届く夜の海岸に呼び出し、謝罪の意を込めて彼女の目前で焼身自殺を試みたが

『本当に償う気があるなら生きて償ってほしい』

と止められ命を取り留めた。

ビーズに於ける不幸な例は今の所その一件だ。他のビーズ使用者たちは所謂『幸福』を手にした事になる。優成が気付いたのは何故欲求のまま自分勝手な事をした者は不幸に陥り、純粹に幸福を願った者はそれを手に入れられるという理由だ。

俺がようやく辿り着いた答え、それはこんなにも単純な事で、これこそが『幸福』の真意であると確信した。

石神井さんが小学生の頃、謎の老婆からビーズを貰った事から始まり、末砂記のお姉さんや末砂記を介して俺やオタちゃんに渡ってきた、『幸福になれるビーズ』。

では『本当の幸福』とは誰のもので、どういった条件で成り立つものか。そこから考えた、というよりは自身の胸中を探ってみた。

とはいえ、それだけではきつと独りよがりな結論に達してしまうと俺の心は先ず訴えた。そこで俺は末砂記をはじめ、身の回りの人々とのコミュニケーションのうちに、時に自分から求めた訳ではないがヒントを貰った事もあった。その他の人物も、時に反面教師も居たけれど、ヒントは至る所に散らばっていた。周囲を参考にしたという訳だ。

幸せを呼ぶビーズで本当に幸せになる方法

それは

自分『だけ』が幸せになろうとしなければ良い。

たったそれだけの事だ。

本当の幸せ、それは決して一人では手に入れられないもの。昔から言われているが人は一人では生きられない。自分を支えている人の数は知れず、人だけではない。ペットや食べ物にだって支えられているのだ。

自分というたった一人が、数えきれない、把握しきれないほどの誰かや何かに支えられ、生きていられる幸せになれる。だから当然、自分も誰かを幸せにする歯車の一つにならなければならぬし、そうでありたい。

自分の欲のみを満たすなど、本当の幸せとは言えない。あのビーズを作った誰かは、それを伝えたくて人々にビーズを届けたのだろう。

2008年2月29日、俺、宮下優成は以上の結論を導き出した。

社会人になるまで残り一ヶ月。きっと未来は楽な事ばかりではない。泣きたい程に辛い事もある。でも俺は一人じゃない。恋人、友達、ネコを含む家族、僅かな数でも味方が居る事は忘れないでいよう。

「優成、涙目になってるよ?」

昼下がりの俺の部屋、ネコと共にここへ入ってきた末砂記が俺に微

笑んで言う。

「ああ、ビーズの真意に辿り着いたのはいいけど、やっぱり不安で心淋しいんだ、社会人になるのってさ」

そんな事、誰にも言った事なかった。自分がそこそこ幸せなのはわかっている。だがどうにも割り切れないのだ。悔しいけれど、それが、まだ未熟で弱っちい俺の心情だ。

「そうだよ、私は進学だからまだそんな事は分からないけど、時には子供の頃は実在しないと置いて『悪魔』にも立ち向かったり、一緒に仕事したりしなきゃいけないんだもんね。でも、私はいつでも貴方の天使だから」

「へっ?」

末砂記の最後の一言に、ちょっとドキツとした。やばい、素直に嬉しい。

「なんてねっ! でも、何があっても私は優成の味方だから」

また末砂記に安心させられてしまった。俺は女の子に守られるくらい無力なのか。

「サンキュー。なあ、俺にも何か出来る事、ないか?」

末砂記は即答した。

「私ね、実は優成と付き合い始めるまで、ずっと淋しかった。姉貴は死んじやったし、お父さんは単身赴任、母親もきつと死んじやった。友達は何も居るけど何か物足りなかつた。でも優成はそんな物足りなさを埋めてくれるし、一緒に居ると安心するんだ。私の淋しさだつて癒してくれた。だからもう十分、私にしてくれてるんだよ。今度は私が優成を支える番」

そうか、こんな俺でも誰かの役に立てたんだ。本当に必要とされてたんだ。だから今の生活はビーズのお陰か、半年前よりは少しマシになったのかな？

こうして俺は誰かを支え、そして誰かに支えられ、幸せを実感出来たのだろう。

きつと。

やべ、涙出てきた。

「どうした？」

「い、ひゃ、なんでも…」

俺のことをこんなにも良く言ってくれる人は初めてで、十年以上の苦勞が報われたようで、どうしても涙を堪えられなくて、過呼吸になりそうなくらい苦しくて、嬉しい。

彼等は今日また一つ、一生の大きな区切りを、旅立ちの季節ときを迎える。

2008年3月1日、この日は優成や末砂記たちが通う湘南海岸学院の卒業式が催される。一学年二十クラスで全校生徒約三千人、築三年、エレベーター付き四階建ての横に長い学校とも今日でお別れだ。

卒業式では『旅立ちの日に』を合唱し、一人ひとり卒業証書を受け取った。思ったより素っ気ない式ではあったが、ここで一つ、未来へ腹を括くった。

式を終えて『最後の教室』に戻る。

優成は思った。

もう俺にはこうやって教室に戻る日々もないと思うと少々切なかった。色々不満はあったが、なんやかんやで楽しい学生生活だった。

教壇に立つ担任の朝川夕子が最後のホームルームを行った。

教室の後部には父兄も居る。

夕子の話は五分ほど続いた。

「……………それじゃ、みんな、元気でね!! またいつでも遊びにおいでね! 私立だから転勤はほぼないし、お昼と夕方なら休んでなければいつでも居るから。……………う、うう、やっぱり淋しいよお、私の最初の生徒が卒業しちゃうんだもん…」

夕子は泣き出した。

「夕子ちゃん頑張れ!!」

「頑張つて!!」

生徒たちからそんな声たちが飛ぶ。

「う、うん、ありがとう」

そして夕子は一気に涙を拭った。

「それじゃ、みんな、元気でね! これにて解散っ! ばいばいっ
「!」

生徒一同が声を挙げる。

「バイバイ!!」

「ありがとうございまして!!」

「ありがとう!!」

人によって台詞は様々。その後、夕子には生徒一同から花束が贈呈され、また彼女は泣いた。

クラスが解散し、俺たちの部活では卒業ライブが行われた。俺たちのバンドでは最後の最後でベースを二本使ったロックや、卒業らしくバラードも演奏した。観客は軽音部員以外でも観覧自由、卒業生、在校生を交えた全バンドの演奏は4時間にも及んだが、あっという間に過ぎた。

卒業後の進路だが、俺とオタちゃんは同じ鉄道会社へ就職。駅員や車両メンテナンス、乗務員を何年間か経験して企画部門へ。末砂記は保育関係の専門学校へ、浸地と石神井さんは四年制大学だ。

こうして各々の目標を胸に、俺たちは旅立つ。

第五十二話：旅立ちの刻（とき）、それだけは忘れずに。（後書き）

私の処女作、なんだかガタガタでしたが一年間続けられました。

また別の作品をいくつか用意していますので、公開したら見てやっ
てくれると嬉しいです！

一年間ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3285c/>

いちにちひとつぶ

2011年11月15日22時14分発行